

触野 千手郎著 『騎馬触手技術の完成とアマゾネス文明の興亡』
川満新書

HASURYU

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは今ある地球に似た、しかし触手や魔法による技術がある世界で出版された、触手技術についての歴史が書かれた新書である。

その中で触手による生殖器付与などの各種技術、乳量増加、性感アップ、魔法淫紋技術、触手利用の戦術がどのように開発され、この世界で流布されたかが詳しく書かれている。

目 次

1 現代において古代アマゾネス文明の騎馬触手技術を学ぶことの意義	1
2 触手の生物学的説明、生態学的位置づけと原始触手技術の成立	6
3 ガンダ文明による古典触手技術の成立、その文明史的位置づけ	15
4 触手技術のガンダ文明からフタスタン、東部カソップ海域への伝搬	24
5 アマゾネス文明の発見までの過程——少しの寄り道	30
6 アマゾネス文明の勃興——そして政治体制と社会、文化と技術	42
7 長育種触手技術による軍事革命と生活革命	54
8 何故アマゾネスは長育種を作ることに成功したのか？ その再発見に至るまで	66
9 何故アマゾネスは長育種を作ることに成功したのか？ その原理とナーリン発掘から明らかになつた姿	80
10 アマゾネス文明の発展と爛熟～そして分裂と改革	94
11 アルジヤニス朝の魔法軍事革命と政治的アマゾネス文明の崩壊	106
12 アマゾネス文明の残光とその影。（1）	119
12 アマゾネス文明の残光とその影。（2）	127
13 アマゾネス文明の世界史的意義——そして大三島域の触手技術	135
終わりに——ある触手技術者の個人史から	150

1 現代において古代アマゾネス文明の騎馬触手技術を学ぶことの意義

現在、触手技術は幅広く利用されている。古典的な母乳分泌や精液の増進、狩猟や漁業における触手鞭術による動物の捕獲、毒性を利用した催淫効果、さらに疑似器官による手術、内視鏡技術など、医療、牧畜など幅広く、またその応用範囲が多い。また第三の手として危険な領域での作業にも触手マニピュレーションは欠かせない。また最近の身近な触手技術としては、発達した各種介護用触手も目にすることがあるだろう。

このように、現代生活において触手技術の発達はもはや自明視されているにもかかわらず、その歴史はこの大三島諸島域において、その歴史的文化的環境的背景も含めてあまり知られていない。これは我が国の歴史において、触手技術は賤民の技術、もしくは海女の技術であるという偏見があることと、開国以来の洗練された触手技術を手にしたことから、その途中の発展形態を知ることがないという、歴史的背景がある。

そのためその技術が広く使われているのにも関わらず、それらの発展史はわが国大三島国ではあまり知られておらず、もしくはその技術の起源というものが意識されることなく利用されているのが現実である。

だが触手技術は、世界史レベルで発達したものである。その用途と形態からポルノグラフィックに想像されることも多いが、基本は、各地でその技術の原始的形態を形成され、紀元前1000年ごろのガンダ文明域によって体系化された。それらの知見は歴史上の各民族の長年における生活技術と知恵の長い進歩と進化によつて得られたものである。

完成された触手技術とそのアレンジは、紀元前850年ぐらいに始まる静黒海域からカスプ湖域の触手文化とそれによるアマゾネス遊牧民の興亡ともに発展し、これらの民族によつてエウラスタン大陸全

土へと広がった。

しかもこのアマゾネス文明で発生した触手技術のブレイクスルーは、人間の第三の手としての触手という新たな段階をもたらし、それと騎馬技術の革新とともに世界史を動かしたのである。またこれらの技術の発達は明らかに女性がイニシアチブをとっていることでも、歴史上に独特の位置を与えていた。

このことがアマゾネス文明はフェミニズム的にも様々な評価と論点を与え、これらの文明における女性の役割と歴史的意義を肯定的にとるか、否定的にとるかで現在進行形で論争が続いている。前者はその技術の女性によってイニシアチブがとらえている面を評価し、後者は後の性暴力として使われることが多くなった技術の始まりであり、あまりにも男根主義的な技術であるとして、進歩主義批判の文脈で低く評価している。

これらのアマゾネス文明における触手技術のフェミニズム的解釈の論争の詳しい紹介は、この本ではあまり触れない。しかし最低限の筆者なりの見解だけは示すのは、この本の理解を深める上で読者としては有意義であると思う。したがつて私なりの最低限の視点は示しておきたい。

現時点の筆者の見解としては、前者の見解に足を置いている。後者のような解釈をとるのは、アマゾネス文明以後の触手利用の結果生じたものである。後者のような立場をとるならば、それらの技術の始まりとしてのアマゾネス文明の意義を軽視するものではないかと考えるからだ。

筆者は性暴力の加害者としてなることの多い男性があるので、このような解釈をとれないのだといえど、私も男性の一員としては否定はできない。だが触手技術が後者が性暴力として使われることが多いという歴史的事実を軽視もしくは否定するつもりはないことだけは、一学徒のささやかな義務として引き受けたつもりである。

だがこれらの解釈を取るにしても、どのように触手技術が生まれて発達したのか、どのような風土的文化的背景があつたのかをも含めて

考察する必要はある。そしてそのうえで、性暴力としての触手技術が使われるようになつたのかを考えるべきで、それらを防止する術を考えるヒントをアマゾネス文明の歴史は与える思う。

現に触手技術の応用による性犯罪者対策技術も現実に行われており、それらの恩恵をもたらしたのも触手技術である。その技術の始まりは、古くこのアマゾネス文明の処罰から発達したものであるから。

話がそれたが、まずこの本は次のように構成されている。

まずは触手の生物学的説明、生態学的位置づけについてについて説明する。各地で広く使われている触手技術であるが、その近縁種は森林域を中心に多く存在し、それらの触手も世界各地でユニークな使われ方をしている。だが現在実際使われている触手の起源は、その中の数種から発達したものにすぎない。なぜこの数種だけが家畜化なしえたのか、その生物学的背景、生態系の位置づけを説明する。生物学的には最低限であるが、その人類との出会いをも含めて説明する。この出会いは、ヒューマン・アルタ種にとって不幸なものであつたこと幸運であつたこともあるが、やがて原始的触手技術の確立に至つた。

次に、これらの生物学的背景を踏まえたうえで、原始的触手技術からガンダ文明以前の触手技術の成立を軽く説明したのち、最終的にガンダ文明における古典的触手技術の成立と完成、その文化的位置づけと歴史的意義を説明する。

ガンダ文明こそ触手技術完成の地であるが、実はその技術は乳量増加、精液の増加、医療用触手の原型など重要なものではいえ、第三の手という使われ方はされていない。なぜそのブレイクスルーがなされなかつたのか。ガンダ文明域の触手技術の説明とその文化的背景も含めて紹介する。

それからガンダ文明から静黙海域への伝搬とその過程における変化を説明したい。古い本では触手技術は多元的発達説がとられ、それらの発祥の地の論戦はナショナリズムの興隆もあつて激しかつた。だが近年のDNA分析により、家畜化された触手はその多様な形態をとるわりに思つたより少ない種が起源であることが分かつてきた。

そして第三の手としての触手はその起源となるとさらに限られてくる。このことによつてアマゾネス文明搖籃の地である、カスプ海東岸域こそ第三の手としての触手技術ブレイクスルーの地であることが判明したのである。その技術的伝搬はどのようなものであつたかを書きたい。

これらを踏まえたうえで、触手技術以前のアマゾネス文明域へ静黙海域からカスプ海域への文明が、その文明の発掘史とその技術の発見の経緯の説明も踏まえて、どのようなものであつたかを含めて説明する。ここでは何故アマゾネスは、第三の手である長育種を作ることに成功したのか？ 考古学的調査と再現技術と原理も含めて説明する。

ここでは女性や男性にとつては性的にシヨツキングなことも書かれているが、現時点での推理とそのために身を張つた男女問わぬ各種

学者の試みも含めて紹介したい。とはいへ必要以上に煽情的に書かないようにするつもりだが。

そして長育種触手技術の発展とその文化的受容を周辺先進国の歴史書からの記述も含めて解説していく。これらの技術は確かに一つの文明を作り出し、各種圧力をかけた。それはガンダ文明に一つの断絶を産んだ。だがこれらの技術もまた模倣、もしくは代替技術によって圧力にさらされる運命にあつた。アマゾネス文明の覇権は、さらなる触手技術の発展とそれとは別の技術にさらされ、その限界を示すことになつた。ここでは最新の発掘からわかつたアマゾネス文明の興隆と、その技術的優位による覇権とその限界も含めて説明したい。

最期にまとめとして各地への影響を説明したうえで、触手技術史におけるアマゾネス触手技術の位置付けを行いたい。アマゾネス文明はゆつくり衰亡し、滅亡したが、彼女たちの子孫は完全に滅んだわけではない。彼女たちは遊牧民らしく、ダイナミックな移住を行い、西へ東へと移動した。それらの動きは現代の発掘調査からもわかりつつある。

それに伴い、第三の手としての触手技術はアマゾネス文明から各地に伝播した。この移住先で現地の技術と融合することで、さらなる新しい技術の発達とショクシユの種の改良を行つた。ルートによつて

発達した部分は違うが、その技術の発達は興味深い。その伝播と発展を各地域ごとに軽く説明したい。

彼らたちの技術の影響はわが国にも例外ではない。箭内芳夫氏が提唱した海上の道を通じて、古代にその技術は伝播しただけでなく、普科教伝来、中世のリヤンモー帝国北方域からの襲来、そして近代のウエスタンインパクトと幾度なく我らの国へと伝わったのである。ここでわが国の軽い触手技術史を説明した上で、アマゾネス文明の触手技術の歴史的位置づけを最終的にまとめたい。

本文を読んだうえで、これらの技術の発展とその中で生きていた人たちに想いをはせ、技術によつて可能なこと、それらの限界はどこにあつたのか。そしてあるべき技術について読者が考えて貰えるなら、筆者としてもこの新書を書いた価値があつたものである。

2 触手の生物学的説明、生態学的位置づけと原始触手技術の成立

【ショクシユの生態とライフサイクル】

さて触手、触手と呼ばれているものは、動物学的には類線形動物門のモリスミオオショクシユ目、ウミナガショクシユ目の二種をさすものである。昆虫に寄生するハリガネムシと先祖と同一とし、それが進化したものであることが、近年の研究で分かつてきたことである。

だが現代では、ショクシユ目のライフサイクルは長年の品種改良の結果、そのライフサイクルや形態は多様になった。だが一番原始的で最初の人間に利用されたショクシユ目のライフサイクルを見るところで、どう人間やその他の生物がショクシユを生態系の中で利用したかが見える。

典型例としてリクスミオオショクシユのライフサイクルを上げてみよう。このリクスミオオショクシユは世界各地の森林域に住む触手である。その科種も多様であり、森林狩猟民族が利用するものの半畜化されたものから、数ミリ程度の寄生主体内のセンチュウや各種寄生虫を食べるものも含めて存在する。

この図を見てもらいたい。基本、他の寄生動物と同じく、ショクシユ目は卵生で、幼体から成虫へと成長する。

この過程で鳥や魚に食べられることもあるが、多くは体内で成長、産卵し、ホストの排便とともに卵や成虫第一次形態となつて、寄生主から分離する。

成虫第一次形態の成体はホスト体内に残ることもある。だが捕食されることがない限り、一定程度成長すると、ホストから離れることが多い。

この半独立寄生生物というべき成虫第一次形態のショクシユモク

目は、プランクトンや腐植土の生物などを捕食しつつ、彼らの出すフェロモンに導かれて、成虫同士集積することを目指す。

そして樹上や水上に成虫群がコロニーを作る。これらのコロニーは森林域や河川の淀みでも見かけられ、適当な釣り餌として利用する方も多いであろう。この時に成虫第一次形態は変態し、成虫第一次群生形態とよばれるものに変化する。

この形態で捕食されることが多いが、この場合で捕食されても次の形態の性質である疑似器官を寄生先に与えることはなく、成虫第一次形態に分解するだけである。

だがコロニーが捕食されることなく一定の規模になると、樹上のコロニー群は移動し、一匹の昆虫のように行動する。いわゆる世間のいう触手とはこれらの群体を一個体としてみるとが多い。そして第一次コロニーとは別のコロニー形態を作る。この状態まで成長したショクシユ目の成虫の形態を、成虫第二次群生形態——疑似器官態——と呼ぶ。

第二次群生形態のコロニーの寿命は、数週間～数か月である。その期間を過ぎると、コロニーは後述の機能を停止し、群体を崩壊させる。これを自然脱落と呼ぶ。

しかし機能しているあいだ、このコロニー形態は成虫第一次形態やコロニー態とは違った機能と生態を持ち始める。このコロニー群体はまるで、ダニのような生態を持つようになる。樹上もしくは水上の淵などに潜み、ホストから発している酢酸ならびに動物フェロモンを感じして、絡みつくようにして粘膜接触を優先しつつ体内に入る。

これらの群体がホストに寄生すると、成虫第一形態とは基本的な生態を持ちつつ、各ショクシユの種ごとに異なった生態を示す。

基本的な生態としては、体内に卵を産み、排便もしくは体液とともにそれらを排出するようにする生態である。この生態は第二次群生形態に寄生されたとしても変わらない。

だが第二次群生形態に寄生された生物は、第一成体とは異なった特徴を持つことになる。それは疑似的な生物器官をもつようになるのである。これがショクシユ目の大きな特徴である。

このように疑似器官態のショクシユ類に寄生されると、種によつては獲得する疑似器官は異なるとは言え、生殖戦略と生存戦略において優位さをえることになる。

特に顕著なのは、生殖器官とそれに付随した器官の発達、センチュウ類やマラリアや各種細菌に対する抗体付与、ホストに各種神経毒を与える器官の付与などである。

また一部の動物には積極的に触手に寄生されることで、生存戦略を優位に立とうとする種が現れ始める。代表的なものとしては、スライム族に寄生することによるローパーショクシユ、オオカミに寄生するダイアショクシユなどがあげられる。

ローパー種になると、もはやショクシユ目とスライム目の共依存進化の最終形態ともいえるものであり、相互進化の繰り返しにより多様なものになり、生物学的進化論的関心をえ、各種スライムの劇的進化を促したのではないかと言われている。そしてついには一種の知的反応すら可能になるものも近代後期において現れ始めた。

またこれらの生態は海上種においても変わらない。海洋域の代表種であるタコに寄生するウミナガミナミシビレショクシユは主に海藻の群生地にすむことが多いが、群生態になることで、大型回遊魚や中型～大型哺乳類に寄生することでその生存域を拡大、さらに広がった生存域に適応する形でショクシユも進化する。

これらが作り出す器官は多種多様であり、さらに家畜化されることでさらに種類を多くすることになった。この進化と各種生態系の進化戦略、それとその人類への利用法の歴史もまた面白いものであるが、本稿のテーマからは外れる。そのため巻末の参考文献を参照してもらいたい。

ただ基本的にショクシユ目は進化においてただ寄生するだけではなく、ホストに各種器官を与えることで、その生殖力をたかめることで共存共栄戦略をとってきたことが特徴である。

また人類史においては、

(1) 第一次形態におけるセンチュウ類などを人体や家畜の有害な

寄生虫を捕食するという生態の利用

(2) 群体寄生による疑似器官のうち神経毒を与える触手器官の発達

(3) フエロモン器官そして母乳と精液増量 生殖機能の多様化

(4) (2)、(3)から発展した人類の第三の手としての利用

これらが最初期の触手技術の重要なものであることを指摘するにとどめたい。さらにこれらから発達して

(5) さらに畜産技術の発展に伴う各種疑似器官の獲得

(6) (1)、(4)、(5)を応用することで医療技術、海洋域における牧畜の発達

かくしてこのホストとの共存共栄戦略を持つことで、ショクシユ目はその生態は幅広くなり、植生限界があるかぎり広く分布することになつた。そしてそれはほぼ人類種のテリトリリーと重なるものである。

だが人類において家畜化されたショクシユの種は限られてきた。これは最近のショクシユのDNA解析においてもほぼ支持されている。

ここでなぜイヌやウシといったものと違つてショクシユの家畜化は遅れたのか。また現在のショクシユ種の広範囲な利用はどのようにもたらされたのか、そのためには各地での伝統ショクシユ技術と畜産利用型ショクシユの違いとその利用法の説明、そしてその確立も含めて次節で説明したい。

【原始的触手技術の成立——生態系の中で】

先に述べたように、ショクシユ目の広範囲な分布はなぜ起きたのかは、その優れた共存共栄戦略によつてである。だがすべてのショクシユが人類にとって利用可能なものであつたものではない。たしかにショクシユ類は基本そのホストとの共存共栄戦略をとるものが多いとしても、それらがいつも行われるわけではないのである。

しかもショクシユ類はある種のウイルスや細菌に侵されると、その

生態を狂わせられる。

とくに有名なものはゾンビ化と呼ばれるものであり、ひたすら寄生先に捕食と生殖行動のみ起こす。これらの病をもたらすものとしてのショクシユの存在のほうがその家畜化以前には顕著であり、石器時代の壁画にもショクシユに寄生された動物と戦うものが世界各地に描かれているぐらいである。

ただでさえ強力な野生動物がさらにショクシユ類の各種疑似器官によつてブーストされたわけであるから、その脅威は原始時代においては多大なものであつたことは想像に難くない。

さらに生殖増大機能はいつも恩恵をもたらすわけではない。ある種が繁栄することは生態系においてはバランスを崩す要因でもある。急速に増えた種を貽えるかどうかは、その生態系の豊かさによるのである。そして生存競争に敗れることで、その死体はその生態系や隣接する生態系に影響を与える。それは狩猟、採集など生態系の繁栄に依存していた原始人類にとつて死活問題であつた。

人類にとってのショクシユ類の出会いは、その生態学的競争者におそるべき器官を付与するものとして現れたり、各種疾病をもたらすもの、そして人間に寄生することで繁栄を与えるものとしてであつた。この両義性をもつた性質の中、どのように制御するかが、最初期における人類の課題だつた。

まず始まつたのは、触手コロニーの観察とその寄生先の見極めであつた。初期人類にとって脅威である大型動物に寄生するコロニーの駆除がなされる。さらに駆除できぬならば、それらは禁足地として保護される。

これらの判別は各地狩猟民族では重要なものであり、神話によつて伝えられたり、豊かな語彙によるショクシユコロニーの分類によつても窺い知ることができよう。

こうして人類が届く範囲で、限界がありながらも駆除が行われた。だが駆除することは、その生態に触れることでもある。寄生された際にどのように対処するかが次の課題であつた。

この課題は比較的容易であつた。実はショクシユの生存戦略であ

る共存共栄戦略にたいして、生態系は——特に植物は——手をこまねいていたわけではないのだろう。ある種の植物の成分がショクシユに対しても抗体になるように進化しわけであるから。

草食動物はこれらの植物を摂取することで、そのホストからショクシユ類を分離することが可能になつた。またこの成分は肝臓類や体脂肪に附属するが多く、それらを多く摂取した草食動物を食べることで、肉食動物にもその恩恵をもたらした。

このような複雑な植物の生存戦略と触手の生存戦略の抗争の把握こそが人類は次のショクシユ利用の次の課題となつた。

その成果は各地域の原始的な暦と経験則、人類の雑食性によつて得たショクシユ下しを起こす植物の把握という形で現れた。

この技術の普遍性は世界レベルで現れる。各種言語にはその基本語彙として薬にあたる言葉があるが、その語源を調べると虫下しとなるものが多い。わが国でも“クスリ”は、その原義は“下すものたち”であることからも、それはわかる。

このようにショクシユと人類は敵対しつつ、その対応という形が最初期のかかわりであつた。

原始時代のショクシユ技術は、前期の技術を踏まえたうえでの利用が行われた。これらの技術こそ、積極的ショクシユ利用のはじまりであつた。すなわち

- (1) 第一次形態におけるセンチュウ類などを人体や家畜の有害な寄生虫を捕食するという生態の利用
- (2) 群体寄生による疑似器官のうち神経毒を与える触手器官の役畜による間接的利用の開始

この技術は新旧大陸にまたがる技術であり、エルフ族や各種森林地域では高度に発達しており、そのゲリラ戦的利用は、本稿が書かれる十年前のナムユ戦争の記憶とともににある。

採集生活だけでなく狩猟をすることで、人類は生態系のトップにたつたわけであるが、それは別のリスクをもたらすことになった。と

くに食肉することは、人類にとつて有害なセンチュウや寄生虫を取る危険性と隣り合わせである。これらの寄生虫がもたらす苦痛と身体的被害は大きく、人類にとつて危険なものである。

だがショクシユの第一形態かコロニー群の一部を摂取することにより、センチュウ類を捕食、もしくはショクシユの体液成分によつて駆除することが可能になつた。このようにして食肉のリスクを減らすことにも貢献したのである。そしてある程度治癒すれば、虫下しを飲むことでショクシユ類を分離することでその副作用を抑え、治癒を完了させる。

このような原始的な触手医療が始まり、人類の生存確率が高まり、センチュウ類の進化との対応に追われながらも、この試みは現代にまで継続することになる。この分野の応用はさらに他の寄生虫の利用も含めて発展するわけであるが、本稿のテーマから外れるので、ここでは詳しく述べない。

だが第三の器官としてのステップアップとして重要なのは、群体寄生による疑似器官のうち神経毒を与える触手器官の役畜による間接的利用の開始であつた。

これらの技術の確立によるショクシユ目の生態のさらなる把握は、触手技術にさらなる普遍性をもたらすことになる。より活動的な、疑似器官をもたらす群種の判別である。

おそらくこれらの出会いはかなり偶然的なものであつたのである。というのもその技術が一番古く残つてゐる思われる旧大陸高緯度地方のシベル地域での狩猟を見ると、わかるであろう。

この地域では古くから、虫下しの木々とともに、目的に応じて触手コロニーの部族レベルでの所有権が発達している。そこで育つたシベルキタズミショクシユは高緯度のツンドラステップに対応した形で進化した。北エルフや古くからの原住民はこの触手を使つて狩りをする。その際に武器になるのが天然の毒矢発生となつてゐるショクシユを寄生させた犬たちである。このショクシユの分類も現地では様々に分類されている。

さてこれらの犬は大型獣を狩る時に使用されるか、もしくは野生の

大型獣を生け捕りにする際に使われる。

通常の犬と触手を寄生させた犬は別々に使われ、目標の動物を発見されたとき、あらかじめ飢えさせた上でターゲットの獣に近づき、その毒を与える。ターゲットの獣は追い立てられ、毒を使われた大型獣はやがて体力の低下と毒の使用により、倒される。

このようにしてショクシユ群体による疑似器官は、犬の利用とともに始まつたのが定説である。先ほど先史時代の壁画でショクシユに寄生された大型獣に立ち向かう人々の壁画を説明したが、人間たちの傍らにはショクシユに寄生された犬たちも書かれている。

現代の都市部の犬については、生殖機能の増幅や各種ファッショーンのためのショクシユを利用を目にすることが多い。だが古いパートナーである犬の力をより増すための利用がショクシユの家畜化の始まりであった。

さらにこれらのショクシユ利用は世界各地で発展した。有名なところではオーク族によ

る乗用イルカに寄生させたダイナミックな漁業であろう。かの民族はボートをイルカにひかせつつ、大型魚の集まる鳥山を探す。そして見つけるや否や、イルカに乗り込み、鳥山へと突っ込む。そこでイルカに寄生させたショクシユをターゲットに接触させ、大型魚を捕まえるのである。

この犬やイルカなどに代表させる狩猟パートナー動物にショクシユ目を寄生させるのは、新旧大陸とともに発達し、ヒューマンとアルト人種の成立史とともにあつた。だがこの段階においても、まだ半積極的な利用というべきものであつた。

というのもこれらの利用は複雑なものであるが、半野生化されたショクシユを利用するものである。しかもそのショクシユのコロニーを作るのは天然任せであつた。

そしてコロニー自身を作るとなると運まかせであつた。そして可能な犬に寄生するショクシユコロニーは発見されると、部族の秘伝として厳重に保護されていたのだった。

そして役畜へのさらなる利用——フェロモン器官そして母乳と精

液増量 生殖機能の多様化——は、古代社会の成立、とくにガンダ域の文明発達を待たねばならなかつた。

3 ガンダ文明による古典触手技術の成立、その文明史的位置づけ

さて生態系の中におけるショクシユ目と人類の関係と、その原始的利用法をこれまでに説明した。ショクシユ目もまた生態系の中の一員である以上、その利用への道筋は極めて纖細かつ困難なものであることは理解していただけたと思う。またショクシユ目 자체の生態系の位置から、食の恩恵を与えるものであると同時に、山に飢饉をもたらす両義的なものであることも。

ショクシユ目の利用は、原始時代古代以前には一部の例外を除いて人の目的にかなつたものを安定して作るのは困難であつた。これが新旧世界同時多発的にありながらも、普遍的には犬族に毒矢機能と与えるか、各種寄生虫や病気に対する抗体を作る技術がほとんどであつた。しかもそれは纖細な観察と語彙があるとはいえ、ショクシユ塊や動物の体内から得た第一成体などを基本採集することによつて賄われていた。

しかもそのようにして得た疑似器官も、安定したものではない。長くて一年、下手すれば数週間でその器官はホストから外れるのだ。新しく移植した疑似器官がヒューマン族に都合のいいものであるかは運しだいだ。しかも各種細菌やカビ類、ウイルスの疾病にショクシユが侵されることも多く、数日で離れることもありうる。

わが国のことわざである『触手に頼るより、猫の手借りよ』というものは、そういう運任せであったショクシユ利用だつたことの反映でもある。触手使いというのも山師とほぼ同じような意味で使われるのも同じ理由だ。

このような不安定なものであつた以上、各地でショクシユコロニーを加工した触手塊交易が広く行われるようになつた。ショクシユ目コロニーは、自然脱落前寸前にある程度乾燥したうえ塩水で加工すれば、第二形態の性質を保持したまま乾眠化する。

その調整は纖細でなおかつ、時間的制限もあるとは言え、土着した

ショクシユが都合のいい性質を持たぬ場合、交易を通じて得たこれらの触手塊を使って、人類は疑似器官を各種役畜に対し、安定して利用可能にした。原始末期から古代初期にこの加工は各地で発見された模様である。

この技術と同時に各種役畜を人類が手にすることで、各地で触手応用技術は発展することになった。

酪農技術におけるショクシユ目の利用は、この時代から発達したのである。とはいえそれに合うようなショクシユ目はなかなか自然で採取することは難しかったのは言うまでもない。その価格はとくにその寄生する動物と与える機能によつて変動し、ガンダの古典的触手技術が確立し広まるまで、高価なものであつた。

ガンダ域以外の文明では、ウシの生殖機能と母乳量を高めるショクシユ種の利用は、触手塊の重さに対して金の3～10倍の値がつくことは珍しくなかつた。さらに後代になつて発生したカイコなどの生物由來の素材を作る生殖機能を高めるものとなると、その価値は想像以上のものであつた。

またショクシユを使つたファッショնはこのころから始まり、髪の色や体毛を変える種も高く取引される。これもまた貴重なものであり、染料よりも安定して色を付けることが可能であつたから、高く取引された。だが人間に對して寄生するショクシユ目利用は、薬用を除けばまだメジヤーにならなかつた。

このように役畜を中心に多様に利用され触手技術は少しづつ発展し、古代文明勃興期へと突入する。

図に示したいわゆる各地発展した古代文明は俗に四大文明と呼ばれ、ハプト、アラン、ガンダ、三つの文明から東方に離れた神苑が代表的なものである。各文明の特徴とその文明が何を発展させたかは、このエツセイのテーマから外れるので書かない。だがガンダ圏と、それより遅れて神苑圏でのみしか古代ショクシユ目の利用は発展しなかつた。

そしてアマゾン文明はガンダ文明の辺境の技術的後継者である。その差異を知るためにもガンダ文明の特徴を、その触手技術に焦点を当てたうえで少し詳しく説明したい。

ガンダ文明は大きなガンダ亞大陸西部に発達した文明である。その文明の始原と発展の記録はは豊富な口碑や古典期再盛期にまとめられた宗教的書物、金石文から判明するかぎり、おそらくハプト文明、アラン文明興隆以後、神苑文明成立以前である紀元前1600年ごろに成立したと思われる。

他の文明と違つてガンダ文明はその豊富な植物資源を活用した葉や樹皮を記録メディアの風化によつて限られているため、同時代の記録は欠けている。またさらにアマゾン文明の南下によつて焼き払われたものもあるため、それがより一層この文明の起源を知ることを困難にしている。

ただ幸いなことにこの文明については後代の記録だけでなく、同時代の近接部の記録からわかる限り、ガンダ文明は宝石、豊富な香料、そして触手塊などをアラン文明などと海上交易を通じて行つた。

さらに数百年かけてその文明をガンダ亞大陸東部まで広げ、大ガンダ地域とよばれるユーラスタン東南部諸民族とそれらが作った諸國家との仲介貿易、鉄製農具などでさらに発達した。その始原時の文明の中心はガンダ亞大陸北東北西部の都市国家群であった。やがてその文明の東遷と同じくして領域国家が成立した。

この文明のガンダ亞大陸東岸到達にあつた諸国家成立時が、普渡教典やヴエーダによる24王国時代と推定されている。考古学調査によれば、さらにそれらに従属し半独立した国家があることはわかつているとはいえる。

これらの領域国家は豊富な資源と農業によつて得た人口、さらに相対的に安く手に入る触手塊を利用して交易と農業を発展させた。特にウシ類などの生殖、乳量増加させるショクシユ目の利用とその技術は、牛の品種改良と相乗効果を生み、大ガンダ地域の交易を通じて手に入れられたからである。

このようにしてガンダ文明は、ハプシ文明、アラン文明の後に成立

しながらも、文明を繁栄発展させてきた。第一古典期において東南ユーラスタンの豊富な資源の交易を独占したのが、この文明の発展の鍵であった。このことは触手技術において重要なことを記憶にとどめておいてほしい。

ガンダ文明は交易だけでなく、数学天文学自然観察においても優れた業績を残し、太陽太陰暦と時差も把握していた。しかも地域ごとの差異も韻文にして記録している。なにせ普渡教典とヴエーダ群を翻訳とはいえる程度抑えておけば、現在でもその地で不十分ながらも暮らせるとは、ガンダ南部で陸上種触手利用のフィールドワークしていた宮野君の弁である。

その社会は、宗教と階級階層が複雑に絡まり、地域差はあるとはいえ、大雜把に三階級による分業体制である。すなわち支配階層である神官層、武人層、庶民層である。基本このピラミッド構造を維持しつつも、その内部で抗争をし、対外的脅威には諸階級が協力してたるというものであつた。

古典第一期では司祭階級バルシアスを中心にその文明の知識教育が行われ、その文明の発展するにつれ、それらの批判と理論的整合性を求める知識人集団が現れる。現在ではマイナーなものも含めても、4から5、さらにアマゾン文明やガンダと隣接したザウル文明経由して残った2、3の流れを除けば、その主張はかなり散逸している。だがその自然科学的知見と哲学的知見は、ガンダ自由思想の中で世界宗教化した普渡教を通じて、わが国にも伝わっている。

さて触手技術の話に戻るが、ガンダ文明の触手技術は基本司祭階級であるバルシアス層によつて行われていた。彼らの古くからの記録と暦の知識が、安定した触手塊の性質の把握には必要だつたのだから、当然といえよう。そして文字記録と口伝は、彼らの聖性と権威をもたらすものであり、容易に他階級へと伝えることはなかつた。彼らが覚えた宗教文章はヴェーダと呼ばれ、その量は膨大なものである。しかも後代の解釈も重要である以上、現在でも伝承者の記録採取が続いている。

その中でショクシユ目は、天の楽園にあるマール神群の長の一人や

クスの部下であり、暴風雨神であるマール神群の共にあつて、地上にあるサーバに繁栄と罰を与えるものとして表象されている。

その世界を感じるために、宮野 智氏の翻訳でその贊歌の一部を見てもらいたい。

ヤクスの園は 天を満つ
その高台より 我らを見る

そのまなこ サーバの 砂の一粒も 逃さぬものぞ
いと高き 鷹のはらから ヤクスよ
われらを 怒れる汝が 長き武器に ゆだねるなかれ
香しき アーグの草々 その身にまといて
長き武器を 納めたまえ

その長き武器を 納めて 大いなる 薬杖と化したまえ
ヤクス贊歌第一より

マールは集い 雲の馬を 馬車で追う
その鞭は 汗とともに サーバを打つ
その神威 いかなるか
放つ砂土 いかなるか
馬水は（尿）いかなるか
我らを 哀れみたまえ ヤクスの子
汝の娘 サレイシヤの 仲立ちによりて
その鞭をおさめ、大いなる恵みを
アラヴァンの子に（牛） 汝の技を 我らにたまえ
生ける鞭を 大いなる 薬杖に変え
我らと牛に 恵みをたまえ

マール神群贊歌第12より

生ける武器は 汝が腹をも見るぞ

その長き手は 汝の罪も見逃さぬ

裁きの技は リンダの森も（ガンダの村の共有林） 卷き込みて

汝に罰を　与えるものぞ

裁きの歌より

まだほかにもショクシユ目を歌つた贊歌は他にもあるが、ここでは置いておく。ガンダ文明でショクシユ目は、ヤクスの大きいなる武器にして治癒を与える薬杖として表象されているのがほとんどである。この武器は自分の兄弟や子弟に分け与えられ、各地に罰と恵みを与えていく存在である。

その裁きは恐ろしく、連帶責任をも求められ、共有地をも荒らす恐るべき神である。しかしその力は癒しや恵みを自在に与える。この神は広くガンダ域を通じて信仰され、それらの神殿は今もなお信仰とともに生きている。

そして世界宗教となつた普渡教ともに、真眼薬王如来として信仰されているのである。いかに生活と密着していたかわかるであろう。

その神殿では、先ほどの贊歌にもちらりと書かれていたが、各種草木動物が擬人化されていた。それらの名称は基本的に口伝であり、ヤクスの鞭を避け、神の仲立ちする技や祭祀という形で記憶された。

さらに交易によつて得た様々な植物資源の知識も贊歌として、残されている。これらの知識の把握と暦による植生の記録は、やがてどのリズムでどの種類の植物と触手と動物が生き残るのか、より広く把握され、知識人層である司祭階級に共有された。

その蓄積は、最終的に各ショクシユ日の生態とそれに付随する動物、さらに一次形態であるショクシユ目が生み出す疑似器官の選別することに成功したのである。

複雑な暦と植生のリズム、さらにそれによつて発生する森林域の動物の増減、そしてそれに寄生するショクシユ目の把握がなければ不可能だつただろう。しかも相対的にコストを欠けずに、多品種の触手を入手できることは、その試行錯誤の種類を増やし、それが新しい品種を産む。

さらに乾眠形態に動物植物由來の薬物処理を施すことで、比較的高

確率で求める体外器官が得られることが、この時代に判明される。数百年経て、この技術は諸地域でも発見されるが、この時点ではガンダが独占している技術である。

こうしてガンダ文明は触手技術のセンターとなり、その体系化はテントタヴェーダという經典の形で結実する。この經典群はガンダ亜大陸東岸部で完成されたと思われる。というのも後代まとめられたアルトヴェーダの文体は明らかに東部ガンダ語圏の言い回しが残っていること、さらに大ガンダ地域と呼ばれた東南ユーラスタン域での植生を利用していることで裏付けられている。

さらにこの技術は、西部ガンダ域から東部ガンダ域へ経済と政治の中心へ動かすことになった。

さて思わずぶりに私は、これまでガンダ文明のみがなぜ触手古典的完成したのか、読者に問い合わせてきた。読者諸君も正直辟易したと思うだろう。

その答えは実に単純なものである。ガンダ文明は他の古代文明と比べて、亜熱帯である大ガンダ地域との接触が簡単に達成できたからである。この地理的条件と古代文明の知見と技術が合わさることで、古代古典的触手技術は完成したのである。

しかし他の文明でも役畜を中心に触手技術はあつたし、それは高度なものであると読者は反論されるかもしれない。だが他の文明とガンダ文明には、その後の技術的ブレイクスルーにはガンダ文明産の触手でなければ、不可能だつたからである。

そのことについて、これから説明しよう。

ショクシユ目それ自体は世界各地で地域に応じた形で進化し、定着していることは先に述べた。そしてホストに疑似器官を与えるという共存共栄進化戦略をすることで種の存続を図つたことも。

しかし一見広く分布しているショクシユ目だが、役畜や人間に一定期間寄生するショクシユ目となると激減する。例外は世界各地にいるイヌに寄生するぐらいのものである。

しかも数少ない人間に適合するショクシユ目も住んでいる地域となると、旧大陸南部に位置するチエルブ大陸といわゆる新大陸の一部

である南部ノヴァルス大陸、そしてユラスタン大陸となると東南部でしかその種は存在しないのだ。

触手塊交易網があれば何とかなるのではないかという意見があるが、それは儂いものである。ガンダ文明以外に存在したハプト、アラン両文明は相対的に乾燥地で成立した。そこでは牛や羊類に疑似器官を与えるショクシユ目はいることはいたが、そのコロニーは貴重なものであつた。それを安定して試行錯誤する余裕はこれらの地では不可能だつた。

そもそも触手資源が豊かだつたならば、ガンダ域やチエルブ森林域からわざわざ輸入する必要はなかつたのである。ショクシユ目は確かに普遍的に存在する生物だ。しかしその品種的多様性となると、熱帯亜熱帯産が今でも無視できない。ましてや古代においてやである。それに追い打ちかけるようにガンダ文明に先駆する両文明と豊かなショクシユ目を擁する地を隔てるものがある。砂漠だ。

ショクシユ類を人で運ぶには、この砂漠を超えてはいけなかつた。しかもいかにショクシユ目第二生態は乾眠するとはいえ、この砂漠を超えて生存するショクシユとなるとその確率は半分ぐらいだつたのである。

こうなるとショクシユ目を品種改良してその利用率を高めるよりも、その豊かな作物とそれを利用した役畜の品種改良をしたほうが早いのである。

こういうわけでガンダ文明は触手利用のパイオニアとして独走することになつた。古代にしては高い生存率の役畜、多様なショクシユ目の品種とその利用、さらに触手技術の黄金時代である。しかも広くショクシユ目に適合したウシやスイギュウ品種の誕生も含めてで。

これらの優れた品種の牛はその体重の銀で取引され、しかも買う人がガンダ文明ではいたのである！

さらに東南ユラスタン域でとれる靈長類に適合したショクシユ品種の誕生は、医学をさらに発展させた。その集大成がアルタヴェーダ経典群である。

ここではその豊富な医薬とそれを組み合わせた触手療法が紹介さ

れている。その世界は誠に豊富である、そして神経系の原始的な把握から麻痺などの機能改善、壊死した部位の回復、そして当時としては先駆的な麻醉を使った外科手術。

医療だけない、汗を快適な香りにする触手、各種髪の色の変える触手、そして疑似フェロモン感受器官、乳房の拡大、精液や乳液の増大、それに伴う貧血を避けるための栄養摂取を増進する方法という性的な技術も。後者の性的な技術はのちにアルタヴェーダから離れ、後世の知見も交えて再編集され、アマルヴェーダとして成立する。

こうして爛熟しつつ、ガンダ文明は発展しつづけるかのように見えた。

だがこうしたものは、対抗技術を持つた文明との対決を強いられることになる。この対抗文明こそがアマゾン文明であり、この爛熟したガンダ文明に危機をもたらすことになる。

いよいよこの本の主題であるアマゾネス文明の紹介となるが、正直ガンダ文明のような文明が崩壊するとは思えないかも知れない。

だがアマゾネス文明の扱い手たちは非常にシンプルかつ過酷な技術的ブレイクスルーを行い、その技術を得、覇を唱えたのである。そしてそのようなものを手に入れざる得ない歴史的、地理的背景の過酷さがあつたのである。

4 触手技術のガンダ文明からフタスタン、東部カソプ海域への伝搬

【ガンダ文明周辺域の触手技術の拡大と。プレアマゾネス文明の触手技術の発展】

前節で述べたように触手技術において独り勝ちしたガンダ文明であるが、その発展は、政治的にも経済的にも、様々な波紋を内外に起こすことになった。

たしかに農業技術の発展とショクシユ目を含めた役畜の改良はガンダの富を増やすことになった。だがガンダ文明内の諸国には、繁栄と勃興する領域国家の戦争という形でフィードバックされてしまった。

勃興する東岸域とガンダ文明搖籃の地であるガンダ亞大陸北西部の諸都市の対立、そしてそれらの戦役に巻き込まれる外国人奴隸と没落庶民たち。領域国家となつて規模が大きくなれども、これまでの都市国家とは比べ物にならない大規模な戦争が続く時代。それがアマゾネス文化勃興期前のガンダ文明域である。これに比較できるのは神苑文明圏のいわゆる戦国時代ぐらいなものであろうか。

そしてこの乱世の中、発生した流民や新天地を求める人々は各地方に散発的散らばり始めた。東部海岸域でこのような流民になつたものは、大ガンダ地方に移住、土着するものが多かつた。

一方で東部と争うことになつた北西部の都市の住民は、戦乱を避けてどちらに向かつたのだろうか。

まずはアラン文明の辺境域であつたガンダ域西部に位置するザウル高原地帯に移住するコースである。彼らは地元ザウル民と融合し、独特の文化と文明を建てる。その独特的地位を確立し、新たな覇権を握るのはまだ先であつたが。

そしてそれとは別に、人の流れは北西ガンダから、ダリアネ砂漠を

迂回しつつ、高原と盆地が点在し、やがてカスプ海東部大草原へと向かうルートで移動した場合もあった。

後世では薰り高き草原の道と呼ばれ、神苑圏にもつながるルートであるが、この時代でもガンダからアラン文明の中心であるテフネ河支流域へとつながるルートとして重要であった。

特にこのルートは山岳地帯を通過することから、ラピスラズリ、ルビー、ザクロ石、魔石などの宝石と現代でも名高いナーリーン織に代表される毛織物が盛んであった。これらの地域の富をガンダ文明の触手技術と食料、綿織物、優れた鋼鉄も含めた鉄器などと交換した。

またこの時代で最も重要な交易品は奴隸であった。戦乱で敗れた中小都市国家の住民は移住という形でなく、このような形でも根付いた。

乱世においても、いや乱世だからこそ奴隸は価値を持つ。特に各種技能を持つものは高価で用いられた。それらをガンダ域の都市国家住民は周辺諸民族による奴隸狩り、さらに敵対都市国家や集落を軍事的に屈服させることで賄つてた。

このような殺伐とした世界であることは次の考古学的資料からあきらかである。この時代と同時代のものであるガンダ北西部にあるナルーガ寺院遺跡は、この時代の地域信仰を残す貴重なものである。柱には多くの浮彫が書かれた柱で装飾された凱旋門が奉納されている。

その中には勝者の都市住民が敵対都市国家の女性陣を輪姦する石刻のレリーフが書かれ、凱旋門はその都市の守護神へと祭られている。さらにこの図には、異民族と思われる騎馬の民に引き渡されている姿も彫られている。

これらの柱には祈祷文が書かれ、これも貴重な同時代の石碑文資料としてある。その書かれている内容を見ると、都市の繁栄と奴隸がよく得られることを祈祷されている。そして同時にショクシユ目的の繁栄も並んで祈祷され、しかも奴隸と並び祈られるように定型化されている。

のことから東部ほど盛んではないが、西部でも独特的の触手技術が

このころから開発されていることがわかる。おそらく北西部に移住したガンダ文明の担い手たちは、そのため乏しいながらも技術を集め、様々な実験がなされるようになつたのだろう。

特にテントアリヴァエーダ以後、各種動物を利用した触手養殖技術は東部ではなく、西部でも発展する。後代に編集されたテントアリヴァエーダには、動物を利用した触手育成技術の記述がみられる。触手につける動物の種類と——ラクダなどにつける触手は後代である——、これは写本の比較や口伝の比較により、これらの技術は後代に付加された部分であり、その時代と地域は言語学的にガンダ北西部あたりに成立したことがわかつている。さらに後代アマゾネス文明の中心地の遺跡ナーリン遺跡粘土板群によつても裏付けされる。

このような触手技術の迂回的な発展に、読者は疑問を持たれるかもしれない。しかしこれは考えてみれば単純なことである。

たしかに東部ガンダ海岸域と違つて、西部ガンダ域の触手技術は、東部の豊富な植物資源や動物資源を利用することができなかつた。しかし、古典的触手技術の完成は、人間をも適合、接続可能なショクシユ目の品種を作り出した。このことによりガンダ西部の触手技術は、発展こそゆつくりにせよ確実に進展することができたのだ。

技術においては、環境や人的技能に依存する技術と環境に依存しない技術との差異が重要であることがわかる。

こうして、プレアマゾネス文明各種役畜の内、乾燥部に適した役畜用の安定した触手が作られた。具体的には当時としては希少で自然任せであつた羊、山羊の生殖、母乳增量、栄養摂取接触のための触手技術が発展させられた。

さらにアマゾネス文明以後ではウマとヤクとラクダの母乳增量と生殖用の触手がこの地で完成させられる。さらにサベル域で取られる特殊なキノコ類を使つた、より精密な神経分布がこの地域において試行錯誤され、アマゾネス文明によつて更なる発展を遂げることになる。

そしてフタスタン地域から静黙海域の技術と出会いうことで、新たな段階に至り、遊牧民との出会いで、結晶化するのである。

【アマゾネス文明の搖籃地であるフタスタン地方とアマゾネス文明までの文化社会】

さて古代アマゾネス文明はフタスタンから世界最大の湖カスピ海を中心し栄えた。とはいっても、これらの地域はなにせ大三島島域の住民にとつてはなじみの薄い土地なのは否めない。

そこでフタスタンからカソープ海域の気候と地形を中心に説明しておこう。

フタスタンはガンダモル山脈北西部部に位置し、階段状に高原と盆地が入り混じった土地である。典型的な大陸性気候で、夏は非常に暑く、冬は比較的寒い。昼夜の気温差も大きい。降水量は少なく、乾燥している。西部の砂漠とステップ地帯から中部の山岳地帯、そして東部平原域と、気候にもかなりの差がある。

東部平原域では高原域に降る雪解け水や山間部から地下水道を通じて灌漑がなされてるところもある。現代でもこれらの水路を利用したオアシス農業と、乾燥域でも育つ草を使つた遊牧がなされる地域である。

またガンダからザウル文明域を経由して、アラン文明と陸路と内水路をつうじて結節する。これは後代に生まれたユラスタン大陸西部のグラムス・レムネ文明の中心地にも通ずるルートにもなり、古代交易路として重要な位置であつた。

この時代のルートなら、アマス川を下つてカソープ海東部から湖を渡り、西岸のブーサンなどの河口港を経て、河をさかのぼり、そして山を下りると、アラン文明北東部へとつながる。

またガンダ域から北部シベルまでに至るには、一部のルートを除いては4000～8000メートル級の高いマーヤ山脈を越えなくて

はいけない。だがカスプ湖を通じて、北からも交易ルートが交わる。この北からの道は、いわゆるサベル諸国を経てリヤンモー高原を経て神苑圏に至る琥珀の道である。

ガンダ域にとつても希少なサベル森林域の産物、毛皮、そして触手塊などに代表される豊富な各種動物資源、医薬品、鉱物資源、金銀や魔晶石などがここから供給されていた。特にサベル北部のハービング海からとれる北クラーケンの材料は、ガンダでは取れないこともあつて、きわめて重要なルートであつた。またサベルの金は貨幣として重要であり、資源が豊なガンダ域でも取引量は少なく、各種魔法加工において必要な魔晶石の流通もこの道を重要なものとして挙げられた。

さらにこのカソップ海の恵み自体も十分に生活の恵みであつたことも書いておこう。後代になるが、アマゾネス文明の担い手たちは、ここからとれる淡水魚の河口と調味料をもたらした。さらに各種接着剤や寒天の元になる魚類に寄生するミニスライム種もここでは重要な加工品であつたことも指摘しておこう。

原始時代の遺跡やプレアマゾネス文明からの遺跡発掘からわかつた限りでは、フタスタン域で住民の生活基盤は、オアシス農業、カソップ海域にそぞぐ河川水を利用した農業漁業、から始まつたと、考えられる。

だが紀元前1200～1000年ごろ黒静海域で始まつた遊牧が、この地域をより新しい状態へと進化する。フタスタンの地に遊牧というライフスタイルが定着したのは、地理的にも近く、紀元前900年ごろであると思われる。

彼らは無文字社会であったが、各地に丘状の墳墓を残した。これらの発掘と骨角器や青銅器の遺留品によつて、彼らは黒静海沿岸のボリアーン文化を強く受けた社会であることが判明している。また聖なる木や豹や狼、馬、ドールなどをトーテムとし、これらにいけにえを捧げることもあつた文化であつた。さらに意匠ごとに深い意味がつけられていたことも、後世の資料——グラムスの文書と、ザウル文明の書類、さらにアマゾネス文明の首都ナーリン遺跡文書から——判明

している。

これらの資料によれば、フタスタンの遊牧民は王族ポリアーンに従う部族であったことが判明し、アマゾネス文明が成立したのちでも交易や朝貢などを送つていたようである。

かれらはその行動圏の広さゆえに、ガンダの西北都市国家群やザウルの群小王国などに雇われることもあった。この中には、前述したナルーガ遺跡に奉納するものが現れ、中には中小都市国家に従属する領主になるものもあつたようである。

また資料の言語から語族的にはガンダリザウル語族を中心であります、アラン語族の住民が混じつていて、言語混交地域であることがここではつきりしている。

しかしフタスタン本土はまだまだ安定したものではなく、後代明らかに荒らされた陵墓なども発見されたことから、下剋上の風潮がある社会文化であつた。

したがつてこの状況から考えると、アマゾネス文明以前のフターンの社会的状況はつぎのようになるだろう。点在するガンダ域から來た移民の独立都市か古くからあるオアシス集落が点在し、その間を遊牧民が略奪し、交易したりする殺伐とした社会。近代で一番近い社会状況といえば、かつての西部劇で書かれた社会のようなものだろうか。

このような中、アマゾネス文明が花開く。その花の勢いはすさまじく、その香りは強烈であつたが、その始まりは二人の賢人ともいわれる女性たち、それに付き従う人々の手によつて始まつたのだ。

古代フターンの地は、賢者集えるフターン 最果ての知恵の地という名前を後世まで轟かせ、中世の始まりであるハーラン教の到達まで、この地の文化的ヘゲモニーを保ち続けた。

5 アマゾネス文明の発見までの過程——少しの寄り道

今まで、いよいよアマゾネス文明がフタスタン、そしてガンダ域にまで台頭してくるまでの状況を語つてきた。読者諸君はその文明がどのようなものであるか気になるかもしない。

しかしこの文明がはつきりしてきたのは、前世紀80年代になつてからである。そしてその発見自体もかなり偶然に近いものであつた。今でこそアマゾネス文明のことは教科書でなら、高校受験で出題されたりすることもあるが、著者の受験生時代に25、6年ほど前に書かれた中学進学部の世界史の教科書すらのらなかつた時代が続いた。今でこそエウロス中心史観は批判されて、各地域の歴史も載せられるようになつたが、依然エウロスタン中央部の歴史はマイナーであり、読者にとつても不慣れであろう。

そこで少し脇道をして、アマゾネス文明はどのように発見されたかを、ここで簡単に紹介したい。これらの発見の道筋もエウロスを中心になるととはいえ、文献上の諸民族がアマゾネス文明という他者をどう見てきたか、また彼らがアマゾネス文明とどうかかわってきたのかも、おのずと見えてくるだろう。

この部分を回りくどいと思われるなら、次節のアマゾネス文明の概略と触手技術を説明するので、飛ばしても構わない。

ただ一つの文明が発見されるには、長い研究の蓄積があつたことを忘れないためにもこの寄り道は必要だと、著者は確信する。またこの分野の知識に深く興味を抱いたなら、各歴史の教養書から専門書のリストを巻末に書いておいたから参考にしてほしい。

【文献上のアマゾネス——同時代、他地域の文献群や考古学的資料から
ら】

まずはエウロス文明に強く影響を与えたグラムス文明の文献から

紹介したい。アマゾネス文明は初めての女権王国——のちに判明するが成文法も成立していた——の強大さ、その呪術、技術は圧倒的の存在感を放っていた。それはボリアーイーン国家を経て、遠くグラムス文明圏にまで聞き及んでいた。グラムス文明はアマゾネス文明よりも成立は遅いが、その流れは現代文明にまで及んでいる。この点でも、その文献によるアマゾネス文明の紹介は、簡潔ながらも重要なものである。またグラシア文明はアマゾネス文明の衰退の約270年後には、ケドニエのリッセンドル大王がフタスタンの地を短い期間とはいえた占領したこともあり、その流れを見る事ができるのも大きいだろう。したがつてアマゾネス文明の文化的な残光も見ることができたという点でも重要である。

その次にガンダ域の記録を各種宗教文献や金石文を中心に説明したい。とくにガンダ文明は、アマゾネス文明に直接侵攻を受けたために、その宗教的世界観に多大な影響を及ぼした。それまでのガンダ文明も乱世ゆえに伝統が崩れつつあつたが、古典的身分制の崩壊がこの時代になると決定的になつた。

そのような社会状況を歓迎するもの、呪うものなどの記録が考古学的資料間接情報とはいあふれている。その量は膨大なものであるため、それらを専門家の整理を経たものを紹介する。

最後に直接アマゾネス文明を滅ぼした、ザウル文明と交易圏となつたアラン文明の資料を説明したい。アマゾネス文明の発展とその影響は古くからある文明とその辺境域にある文明をも活性化させた。そしてそれらが合わざることで、アマゾネス文明の新たなライバルとなり、最終的にいろいろな要因が重なつたため、アマゾネス文明は最終的に故地を離れざるえなくなつた。彼らの文章も王都から発掘された粘土板文書と後世の宗教的文書から類推するべくしかない。だが男性中心の祭祀から男女共同の祭祀に移行したという点で大きな影響を受けている。これらも専門家から見た現時点での紹介にどどめておこう。

○グラムス文明から見たアマゾネス文明

まずはアマゾネス文明の崩壊から約100年後に書かれたグラムス文明の文献から見よう。グラムス文明はヘルカーハニス半島に紀元前600年から700年前に成立し、紀元前500～400年ごろ最盛期を迎えた。グラムス人は生糸の航海者であり、紀元前600年ごろには地中海経由で静黒海域と交易し、植民都市を作っていた。この植民都市の設立のため、ボリアーン人と戦つたり、またボリアーン人と同盟してアマゾネス文明やザウル文明の諸国と戦うこともあつた。このために間接情報とはいえ本土にアマゾネス文明の報告がある。それらをまとめたセンドニウスの「歴史」——紀元前480年ごろ成立——には、ザウル文明の周辺の諸国としてアマゾネス文明が紹介されている。

そこで書かれているアマゾネス文明は、次のようなものである。

『サカ族の北部、カスパーン（カソープ）海の東部、マツセゲタイの住む地よりさらに東部に女王が統べるアマゾネス人の地がある。

彼女たちはガーン人（ガンダ人）の風俗を持ったマツセゲタイ人から分かれた人たちで、大地母神の末、冥界神ハーデとペルポネーの子マゾネスの子孫である。」（中略）「この子孫の中に、この地に追われた動物と人の術を知る魔女ケーレンの子と交わつた子がいる。

この子孫こそアマゾネスであり、さらにケーレンから習つた人を動物に変え、動物の力を人に与える技術を持ち、場合によつては男性を女性に、女性を男性にする術も持つという。この術を持つがためにアマゾネス族はマゾネスに非ざるものと呼ばれた。ボリアーン人は、この部族をフターン人、その王都ナリーニーと合わせて呼ぶからフタナリニーと呼ぶ。（後略）

このあとは長くなるので要約すると、基本祭祀権を握つた女権も強いとはいえ、氏族と祭祀集団からなる選挙王政であることが書かれている。王は氏族集団だけでなく、王の官僚でもある祭祀集団に支えられている。この教団は宰相府に属しており、一定の義務を行えば外部でも入ることが許されたらしい。そして選挙で決められた王は養子という形式をとつた上で次王が決められている。以上のことをセン

ドニウスは記述している。

またその技術力の強大さとて完成された触手技術は、伝説的な魔女ケーレンや半人半馬のケンタウロスの賢人キトロンの弟子として作られたとして表象され、この獣を操る民としてのアマゾネス文明がイメージされている。

この政治形態は約130年後のリツセンドル大王の東征の頃でも維持されており、当時の資料はザウル帝国にくみするフタスタンの男女混交の遊牧戦士団が東征に来た大王の軍を迎へ討つた記録が残されている。そして占領後の記録も、魔王の系譜になつたとはいえ、今でも男女ともに平民会を持ち、巧みに“生きる紐”を操る様子が書かれていた。またそれらを有効に使つた細工物やその技能を持つた奴隸たちを、大王やその部下の諸将は連れて帰つたことも記されている。

このようにアマゾネス文明はガンダの地こそ離れたものの、その故地であるフタスタンの影響は長く続いたことがわかる。

しかしこの後エウロス地域の諸文明は、なかなかフタスタンへ訪れることが難しくなる時代が続く。というのもエウロスの諸文明はその歴史的経緯上、中継地であるアラン域、ザウル域の諸国家と対立することが多く、間欠的にこの地域を訪れるることはできても腰を据えてじっくりと研究することは困難だつたからである。

したがつて古代後期から近世初頭には、レムネ文明に書かれた博物学——これもあとで貴重なトーテム信仰や神話などの姿が書かれているので貴重な資料——怪物や人外のような空想上の諸民族と混合されるようになつた。

ようやくアマゾネス文明の近接地帯にエウロス文明が足がかりを得たのは、アマゾネス文明の崩壊から数えて約2100～2300年後の18世紀半ばと近世になつてからである。

大航海時代を経てエウロス圏諸国は、点状に植民都市をチエルブ大陸沿岸部、ガンダ亞大陸沿岸部に作った。その植民都市経営、のちには植民地経営のためにガンダ圏の諸文献を集め、ガンダ域の言語研究を進める。そうしてようやくアマゾネス文明に直接影響を受けた

歴史が見えてきたのである。

○ガンダ文明から見たアマゾネス文明

さて直接影響を受けたガンダ文明域ではどうなつたであろうか？先に述べたように、この地域は記録メディアを布や貝葉文書に依存したため、直接的な記録群ははつきりしていない。したがつてアマゾネス文明の記録も金石文などの考古学的資料や宗教的文献に頼るしかない。

しかし幸いなことに、この時代と断言できる祭祀的に埋蔵された各都市国家や小領域国家の戦勝祈願文や宣盟文、そして同盟を記念する石碑群などが明らかに増えていることから、そこから読み取れる。またアマゾネス文明の扱い手自体が書かれた墓碑や粘土板——彼女たちはその文明の後半期になると、基本的な条文や教育用の文書を粘土板に書いて残しておく風習があつた——が書かれていた文書からも、彼女たちの世界観がほのかに見えてくる。

まずはガンダ文明の直接の扱い手のガンダ人が残した記録を見てもみよう。それらを調べると、より切実な軍事的脅威や文化的脅威に対抗するための祈りやガンダ域概念の拡張というものが現れている。

彼らが祈祷と儀礼のために埋められた宣言文や祈願文によれば、アマゾネス文明侵攻期から、これまで祈願されていた戦勝による奴隸獲得とか財宝を得ることよりも、ともかく戦勝を祈願するものが多く書かれるようになつた。

また新しい神格がこの時代から現れ、半人半魔のアミアーンを呪殺したまえなど、手あまたある魔神を調略したまえなどの、切実な祈りが書かれた都市国家の祈りの文章が述べられており、その軍事的脅威が増えている。

また金石文からも圧倒的にこの時代になると、各種同盟や対応を書いたものが発掘されている。その中で有名なものになると、ペシャーイのサミダリーアンの石碑であり、特にそれまでの石碑とは比べると、かつてない規模の文章が書かれている。そこに書かれているの

は、当時の地名や各都市、各国家の系譜などが記され、当時のガンダ域全体——北部ガンダ亜大陸——の平和と安定を祈つたうえで、砂嵐渦巻く地より来る腕長き半魔の遊牧民マーンヤへの対抗、山岳の角ある猛馬の民ヤクトゥーの襲来と対応の必要などを書いている。そして現状分析として12～13王国ぐらいまで減つてしまつた大領域国家の状況を記し、これらの脅威に共同的に当たる意義や、かつて対立していた北東部と北西部の諸国家をまとめる必要性を述べたうえで、同盟を結んだことを記念している。

実際この同盟は非常に強力なものであり、アマゾネスたちは北西部のガンダ域に攻め込むことはできなくなつた。余談としてだが、サミダリーピンクは転輪聖王の一人として神格化され、北東部ガンダでも今でも崇拜されている。そして現代でもガンダナショナリズムのアイコンであり、紙幣の絵にも描かれているほどである。

また宗教的文献からも、この時代に成立したものになると悪神アミアーン、サーリフへの呪詛、崩壊したジエンダー柱や身分制を懷かしむ詩文、これらの状況を打破する王者、救世主への願望が述べられた詩文が産まれ、未知なる神々にどう対抗すべきか実存的な詩、社会的状況を残している。

その一方で、南部ガンダ域諸国中心に新しき王者、被支配層を解放した女神たちとして書かれ始めている。そこでは天より来るサレイシア、千手のアミー、薬王の娘サリーと呼ばれ、北西部の奴隸の身に墮とされた人たちを解放し、神々の技を伝えし人として崇拜された。またアマゾネスたちの字で書かれた碑文も南部には数少ないとはいえ残し、南部の苦しんでいた奴隸民の解放をサレイシヤの名のもとに行つたことを記念している。女性にも伝わった文字は、南部では広く権威あるものとして伝わり、その変形を含めれば、この地域の諸文字の基礎となつていて、そして後になると、大衆普渡教とこれらの神々は融合した。南部ガンダ域はのちになつて大乗普渡教などのセンターとしての位置をもたらし、アマゾネス文明が作つた交易ルートを経て、神苑文明にまで影響を及ぼした。

また彼女たちがもたらした乾燥域の優れた灌漑技術を記念する石

碑は多くのこり、これらが南部諸国の生産力を高めたうえで、相互メリットある交易と交流がなされた。具体的には、南部では人口余剰しはじめたアマゾネス文明の植民の受け入れと大ガンダ域への交易ルートの自由と保護を与え、アマゾネス人から南部には乾燥域に育つ各種役畜とそれに伴う触手技術と工芸などが与えられた。

このように既存の権益を持つ国家群からは脅威の存在であり、それらの諸国に抑圧された国々、南部ガンダ諸国などには解放者という両側面があつた。この地に移住したアマゾネスたちの子孫などの信仰やそれに乘じたガンダ自由思想の扱い手の流れも交えて、より複雑なものになつた。

この複雑さは後世にまでガンダの地に残つたアマゾネス人の三女神——アミアーン・ナリーニー——そしてサーリー——が、疾病不利益を起こすものとしてヴエーダ文献で書かれている。だが一方、彼女たちの文明の支配域の一部と同盟者の国々では技工神や役畜の守護者として信じられたり、女性信徒の権利を守る女神として信仰が残つたりしていることからもわかるだろう。

○アラン文明とザウル文明におけるアマゾネス文明の記録

このような文献整理を行いつつ、植民地と世界市場を広げたエウロス文明は、やがて近隣の旧アラン域とザウル文明域へと19世紀になつてから進出する。

この地域は近世初頭までは、ハーラン教による大帝国が成立したり、それらが分裂することを繰り返していた。だが間欠的な侵攻はあつたとはいえ、近世に至るまであまりエウロス文明に干渉することは少なかつた。とはいえる、香料など各種交易——奴隸も含む——もそれなりあり、グラムス文献もハーラン圏で写本されたものやハーラン教の異端がエウロスに至り、互いを研究することもあつた。

またハーラン教圏——この文明の範囲は広く、旧文明の二つ、ハプト、アラン、そしてザウルや一部ガンダ域まで及んでいる——の地域は長く先進地帯であつたことから、後世の戦乱に巻き込まれた。また

後世に成立したイシュク教やハーラン教の影響などで古代期から伝わる古文書が少なくなつた。写本化できた文献を除けば、グラムスやガンダ域の文献として仮託されたもの、神話上の人物を著者とするものが多々、古代文明それ自体の文献はどれなのかわからない状態が続いた。

しかし19世紀半ばから後半にかけて、帝国主義時代になつてエウロ諸国の発掘チームによつて、古代都市の発掘が行われ、粘土板などに書かれた古文書が見つかる。そのことで古代アランとザウル文明の中小の民族も含めた交流と交易の記録が徐々に明らかになつた。その中には明らかにアマゾネス文明のものもあつた。

アラン文明、ザウル文明から見たアマゾネス文明はどうだつたであろうか。まだ翻訳途中の文献や民族の同定など諸説入り乱れているゆえ、直接向かい合つたザウル文化圏の宗教的文章など簡潔にしか報告できないが、だいたいアラン文明では間接的に友好が結ばれ、ガンダ域の安定したルートの保護者としてのアマゾネスたちは迎え入れられたようで、中には明らかにアマゾネス人たちが残した記録も数少ないながら存在し、複雑な交易ルートの最終地点兼金融資本の運営などをここで行われている。

とくにアマゾネス文明の王室財産はアラン文明の賢者にして富豪のアルカドの保護を受けたことがわかり、遠くナーリン遺跡にも、アルカドの蓄財術の抜粋が翻訳されている。ガンダとアランの両方の結節点としてのアマゾネス人は、重要な位置にあつたことがここではうかがい知れよう。

しかもただ単に彼女たちはアルカドによつて保護を受けただけでない。アマゾネス文明が作り出した各種畜力機械による灌漑と井戸掘り技術が、アランの地にもたらされたことで、アラン文明とそしてザウル文明の生産力は向上し、アルカドはこの技術で大いに儲けたことが、金融記録からわかる。

また外交文章も書かれており、二代女王オカタリからの各王、各部族長の連名で書かれたものも発見され、対王族ボリアーンへの対抗と兵力の要請などが書かれており、アマゾネス人傭兵はこの地でも活躍

していたのがわかる。

そしてより直接な接触していたザウル文明になると、アマゾネス文明圏関連の政治的文書——同盟もしくは敵対への処理など、交易記録——がつぎつぎとザウル文明中心地であつたアシュマドから出土された。またそれらを記念する石碑群や外交文書が発掘された。

それらの文章によると、ザウルとアマゾネスは利害乱れる複雑な關係あつたことがわかつてき。そこにはかつてアマゾネス文明によつて駆逐された各氏族の保護やその要請による出兵の記録、捕虜交換などの取り決めなどが詳しく述べかれている。そして中にはアマゾネス人が書き訳したと思われるザウル語で書かれたアマゾネス文明の技術書の翻訳も残されている。

これらの発見は、先に述べたセンドニウスの記述の正確性とフタスタンにある幻の政治勢力としてのアマゾネス文明に対する幻想を書き立てる。

そして19世紀中盤、ザウルのタルニシュ碑文の発見によつてよりそれは、強まることになつた。この碑文はザウル王クルセンヌス大王ガンダ域への遠征とガンダ域諸国の同盟軍によるアマゾネス軍撃退を記念する碑文である。また当時の新興宗教だつたザーレー教の主神アーメルリマツトに捧げられている。

この碑文の発見は、写本を経て伝えられたセンドニウスの記述がほぼ正しいことを示した。センドニウスによれば、ザウル人とガンダ人の同盟軍との戦いによつてアマゾネス人は没落し、ガンダ域からの撤退とフターンの地に戻つたと記述している。

そして碑文にもガンダの良き同盟者、長き手持つアマゾネスの支配を解放するものクルセンヌスという敬称がなされている。おそらくこの戦いもザウル諸都市を経由する交易ルートの安定化とザウルのアラン文明の独立と同時になされたものであり、それゆえに特別な意義が碑文が作られたのであろう。

また19世紀に発展した批判文献学と言語学の発展により、ザウル文明辺境域の宗教分派によつて伝承されたアザーニー群が分析され、その成立年代がおよそのところ見当がつけられた。

アザーニーの言語学的語彙の変遷から分析された時系列と、その書かれている内容もセンドニウスの記述をも裏付けていた。そしてこのアザーニー文章 자체も、より古いと考えらえる贊歌集をのぞけば、ザウル文明の宗教指導者にしてザーレーがアマゾネス文明の仕組みを知悉したうえで宗教団体を作ったことが判明した。文章にこそ書かれておらず、口碑を後世書き留めたものに記述されている、ザーレーがナーリーンの地にて修行したか、もしくは修行した知識人の元で学問を修めたこともほぼ事実であろう。

またアマゾネス人の神々をザーレー教では、主神アーメル＝マットの娘や妹に配置することで、その信仰を一部認めたことも特記しておきたい。かれは後述するがザウル文明に初期魔術軍団を完成し、アルジヤニス朝によるザウルの地の統一、その後のアラン文明圏を吸収する原動力をもたらした。しかしそれだけに頼ることなく、巧みな宗教政策を行つて、アマゾネス人の技術や信頼をえることに成功したのである。

【考古学的発見に再現されたアマゾネス文明——ナーリーン遺跡の発見とその文献群】

こうして各種文献や伝承に書かれたアマゾネス人の姿を紹介した。この他民族から彼女たちの姿は、各文明圏の文脈や畏怖と好奇心、そして利害関係の歪みを持ちながらも、強大な文明を持つていてる存在として確実に現れていた。

後世のエウロス圏の文明は彼女たちの文明を、——その文献が少なかつた以上しかたないとはいえ——、エロティックなもしくは恐るべき野蛮な部族社会を想像してきた。だが実際の各国の資料からみた彼女たちの文明は、女系中心の社会とはいえ、優れた文明を持ち、各地域と利害まみえた交流をなした国家であることが、2～300年単位での研究で発見してきたことがわかる。そしてそれを可能にしたのは、——断絶期もあるとはいえ——2000年に及ぶグラムス＝レムネ文献群の研究の成果でもあつた。正直彼らの研究への粘り強

さは脱帽するばかりである。

そしてアマゾネス文明の侵攻を受けた地域や影響を受けた文明も、アマゾネスにただ単に屈服していただけでなく、かつてのアマゾネス文明同様、抵抗し、かつてあるもの、自分たちの比較的優位にあるものを利用して、より洗練された文明を作ってきた。

このような姿を文献や考古学的資料の各種学問的批判を経て、後世の学者は隴げな姿から、すこしづつベールをはがしていく。

このような比較を経たうえで、ほぼその文明があつた地域もわかり、あとは発掘するだけという段階にまで至り、20世紀前半によく、フタスタンの地に考古学の手が及ぼうとしたが、ここで停滞期に陥る。19世紀末から始まつた世界各国を分断する帝国主義時代に突入してしまつたのだ。

フタスタンの地は今でも低規模紛争がおこる地ではあるが、19世紀後半になるとガンダ域を占領したアルベン連合王国と東エウロス域の最大有力国家ミクヴァスク帝国との植民地分割に巻き込まれた。そのためこの地域の考古学的発掘は半ば閉ざされることになった。とはいっても、各地域でのアマゾネス文明が作つた都市遺跡は発掘され、彼女たちの粘土板文書や金石文も見つかり、おおよその姿が見えたものの首都ナーリーン——この時代にはもう首都名は判明していた——の発見もなしえなかつた。この政治的状況はミクヴァスク帝国の崩壊とその後に現れた国家群の内戦と再統一、そしてその後に起つた二度にわたる世界戦争などが続くことで、発掘すらおぼつかない状況であつた。

1970年代によつてフタスタン地域の政治的独立がなされたこととで、ようやくフタスタン共和国アカデミーやわが国やエウロス諸国の発掘隊が行われる、各種文献やその生活遺跡も発掘され、実に高度な技術、特に井戸掘削や畜力水力駆動輪の発見などから、技術史的記録を塗り替えた。

そして1987年、ついにアマゾネス文明の首都ナーリーンが発見される。発見自体は全くの偶然であつた、フタスタンの一地方都市マトウナリーナ郊外にある丘を工業団地として開発したときに、大量の粘

土板文書と鉄器類が発掘された。

この文書類は、アマゾネス文明の神殿書類も含めて発見され、アマゾネス文明研究だけでなく、関連する地域の歴史学、言語学的にも様々な実証を裏付け、現在でも研究が続けられている。

なおナーリーンの地がなかなか見つからなかつたわけは、一通り発掘のあとで判明したがナーリーンの地は、アマゾネス文明以後の大地震による山体崩落に巻き込まれた。それで発掘が遅れたのである。

ここで発見されたナーリーン文献には粘土板に書かれたナーリーン語で書かれたテンタヴェーダなどの翻訳、各都市のルート交易の安全性や風習の記録、その民族成立を歌つた叙事詩、様々な外交文書、そして塩やガンダ域の通貨、アラン文明の銀を中心とした金融記録などが書かれ、首都ナーリーンの姿が生き生きと描かれていた。それは最初の有文字遊牧民交易国家の姿にふさわしい、高度な文明そのものだつた。

そして大規模な祭祀もここでなされ、初代女王アーミヤ＝サーキー＝歴代諸王、宰相アガンダ＝サーリハを記念した神殿も見つかり、神話から歴史へとアマゾネス文明の人たちは姿を変えたのである。

そしてその歴史も神話も彼女たちの手で書かれたものへと変化した。次章で彼女たちの生活と文化、政治の姿、そして触手技術の高度さをもつて、どのように周辺諸国に覇を唱えたかを書きたい。

6 アマゾネス文明の勃興 ——そして政治体制と社会、文化と技術 社会、文化と技術

6 アマゾネス文明の勃興 ——そして政治体制と社会、文化と技術

【初期アマゾネス文明の誕生から勃興の歴史】

● 民族分布

● フタスタン地図

先に述べたように遊牧民族の交易とガンダ文明の接触の地、アマゾネス文明以前のこれがフタスタンの状況であった。そこに各種新技術の発展から、強力な王権と絶大な軍事を持つて現れた。アマゾネス文明の誕生である。この文明は周辺諸国に多大な影響を与えた。

政治勢力としてのアマゾネス文明がいよいよ誕生するのである。その中心となつたのはアーミヤと呼ばれたマイネウス氏族の一部族であった。

アーミヤ家の母体となつた遊牧民であつたマイネウス氏族は当時のカスプ海岸全域強い勢力を持つていたが、さらにその氏族の一つであるゾネス氏族がフタスタン域に侵入、さらに別れたのがアーミヤ氏族（以後アーミヤ家）であつた。基本的に祖母氏族であるマイネウス氏族と同じく、静黙海域を中心に活動していた最初の遊牧民国家であるボリアーン文明に朝貢を行つていたのがわかっている。

ちなみにアマゾネスというのは、おそらく“マゾネス氏族の”という形容詞形からきたと推測され、さらにマゾネスというのもマイネー氏族のゾネス部族が短縮された模様である。

アーミヤ家のリーダーであつたサーキーは、言語学的に見ても同時

代の資料を見ても、珍しいことに、おそらく確定できる限りでも、女性であった。アマゾネス文明がその治世を女王から始まつたことは、後世にまで影響を与える。この王権は乱世の諸勢力の思惑渦巻くフタスタンの地を統一し、当時としては相対的に強く女性の権利を認め、強い国家を産み、勢力を伸ばした。紀元前800年ころである。

同時代の資料によると、初代王家であるアーミヤ家は半牧半農の土豪であった。サーキーはその中のリーダーの一人としてガンダ域の諸都市に雇われる傭兵として活躍していたようである。その武勇は優れたものであり、叙事詩にはこのように歌われている

長き手のサーキー 山風の バイユ（サーキの愛馬）にまたがり
あまたある ガダの地の 埃舞える車らを
壊し崩せり 服につく 砂払う如く
長き生き鞭（触手） 舞い振るうこと
雅なことは ウルバーン（妖精）の舞
猛き勢い ダバス（天空神）の雷

またリーダーシップに富み、当時は家督争いに敗れ弱小部族にあつたアーミヤ氏族の勢力をのばすため、部族崩壊で難民になつたものを保護し勢力を伸ばしたり、積極的に外部の知見を広め学んだ。その知的好奇心はなんと、当時の遊牧民としては珍しく、計算能力やサインを書ける程度の識字能力を持つていたらしい。

そして傭兵として赴いたガンダの地で、奴隸として囚われていたサーキハと決定的な出会いをする。ガンダの地では珍しい女性知識人であるサーキハは、とある弱小都市国家の神官階級であるバルシアス層の娘として生まれた。だが乱世渦巻くガンダ諸都市の抗争に巻き込まれ、奴隸階級におとされた。そしてはるかかなたのフタスタン近くまで流れ着いたようである。サーキーに解放されたのち、公私にわたつて彼女の霸道をともにし始める。

サーキハの知識は医学、機械、政治、それに各種ヴェーダにも通じていたらしい。彼女たちが書いた叙事詩にも数学的能力も高いことが歌われた。

さときなるサーリハの 知略の数々 いかなるか

アメン河の幅を 座りて測り 正しく知れる

熱に苦しむ 母子らの 癒すこと

騒ぎうめく人も 笑顔を作る

彼女がしれる 歌と魔は

カスパの海の ごとくなり

その知略をもつて、サーリハは宰相に任せられ、彼女は生活面だけでなく軍事面でも政治面でも策略を発揮した。このサーキーとサリハによつて、フタスタンの地を武力と融和の硬軟交えた手法を使つて統一した。その統一期間は実に短く、当時のフタスタンの人口密度は低いといえども、10～15年ぐらいかかつたと思われる。

部族会議で権威と権力を認められ、統一したもののは、女性ゆえの王権の不安定があつた。当時のマイネウス氏族は、サーキーたちの支持基盤である女権勢力も無視できない勢力はあるとはいえ、男系部族もまた無視できないほど強かつたのである。つまり婚姻という形で、鳶に油揚げを奪うように権威と権力を奪おうとする勢力は多かつたのである。

そこでサリハは最新鋭の触手技術を応用して、一計を案じる。サーキーに触手による疑似的な性器をつけ、自らを性別超えたものであると宣言させたのだ。そして部族会議でアーミヤが形式上男性という形をとつた上で、当時としては珍しくアーミヤとサーリハは同性婚を成し遂げる。

なおこの風習は教団内でも認められ、本人と宗教団体との同意と後見人の保護と義務を得れば、女性ならば誰でも受けるようにした。後述する理由もあるが、この当時としては画期的な婚姻は現代でも大きく受け止められている。

また王の後継者はこれらの女王に対する各部族会議が認めた後継者と養子縁組をする選挙王政を採用することになつた。この王の権威と権力は絶大で、直接統治する食邑や各種連絡網や移動の自由を認

め、軍事的にも優位にたつ存在であった。

ただしそれとは別に部族会議と元老院の権威をも認め、その上位法の成文法を書き石碑を作り、各地に残した。そのうえ幹部層を生み出す知識人層を握っていたサーリハの教団と連携し、諸部族に影響力を高める。

初代選挙王が女性であつたこと、女性中心の教団の知的ヘゲモニーの確立、そして女系部族の支持、このような経緯ゆえに、アマゾネス文明は女性中心の文明となつたと考える。

その後、10年ぐらい間、ガンダ文明北西部の諸都市国家の紛争に多少介入しながらも、北西ガンダの地に影響力を伸ばす。こうした辺境域の強力な軍隊をガンダ圏諸国家が欲したのはいうまでもない。こうしてアマゾネス文明は内政を充実させ、当時最新鋭の技術である畜力機関や水車——アマゾネス文明の触手以外の最大の発明——を使つた灌漑、それを使つた井戸掘削や各種工作機械の発展などを行い富をためる。

この内政安定期の末期になると、サーリハの教団は、既存のガンダの宗教団体と対立することになつた。そこで北西部の一部都市国家はアマゾネスに奇襲に近い形で攻めることにした。しかしながらそれを先に察知したアーミヤたちによつてカウンター攻撃を受け、壊滅する。そのあとをアマゾネスたちはガンダ北西域に侵攻し、諸都市を占領し始める。フタスタン統一から10～15年後のことである。

こうしてアマゾネス文明は統一から25～30年後にして、ガンダ圏に侵入することに成功し、並み居る北西圏の諸都市国家やその母体である領域国家を攻めた。その勢いはすさまじく、統一ほぼ30年後の初代サーキー女王で軍事的占領、二代目オタカリ女王の治世でガンダ北西部を安定して統治することに成功する。

また強大になつたアマゾネス支部族を恐れた王族バイアーンの侵攻を、サーキー女王から二代にわたつて受けるが、アーミヤ家の郎党や将軍ヌーメンがこれらを撃退した。さらにアマゾネス文明の二代王後半から三代後半に至つては、王族バイアーンの本拠地である北西部の静海域まで攻め込むことで、ほぼ独立を成し遂げ、粘土板に記録

された。

こうしてカスプ海東部からガンダ北西部をも飲み込む大國家が誕生したのである。統一から実に45年後のことであつた。これが初期アマゾネス文明の誕生から勃興までの簡単な説明である。

【アマゾネス文明の政治制度と社会】

まずアマゾネス文明の政治制度と社会は、各部族の連合体の中に部族間を超えた宗教団体が包括する社会であつた。特にこの制度は古く、ガンダ域の自由思想兼宗教家がフタスタン周辺に布教はじめたころから始まつた。

のちにアーミヤ家の宰相になるサーリハとその教団とその文官も、この中から生まれ発達したものである。

基本部族長と20～30世帯ぐらいで集落をなし、中心となる部族が軍事的リーダーならびに交易品や各種生活必需品の配分と再分配を行つた。さらに重要な決定となるとリーダーだけでなく、長老会や各信徒会の決定を経たうえで決定し、集落内的一致団結した行動をする。これらが発展して、やがて選挙王政と部族議会と元老会を含む宗教議会による体制へと変化する。

次に、古代期には教育、社会保障などに重要な宗教的基盤はどのようなものであつただろうか？基本各部族や各家族はアニミズムから発展したトーテム崇拜と先祖への祭祀を行い、そのうえでシャーマニズムから発展した自然神崇拜は、ガンダやザウルの神々が習合し、混交されて信仰された。この後者の信仰は男女問わず参加することができた。このような信仰になつたのは、特に部族間のつながりである女性の信仰を集めしたことと部族間共有の財産を管理する必要性、特に地下水路管理や金融などの需要があつたために発展した。

また不安定な社会でもあつたことから、部族を超えた宗教施設はアジールとしての利用もあつたことは、付け加えておこう。利害対立があると、たとえ同族のものとはいえすぐに自力救済に走っていたのが、プレアマゾネス社会そして安定したとはアマゾネス文明の実態で

あつた。この時にたとえ目減りする可能性があるとはいえ、外部に金融資産を置いたり、高度な教育を受けた子弟を預けることは、部族崩壊のリスクを避けるために必要であった。この傾向は魔晶石貨幣や金属貨幣の塩の交換権から発展した補助通貨などがサーキー王など代々の王によつて発行され、貨幣経済が浸透するとより一層強まつた。

この宗教的団体と部族内の利害対立を調整するのが、数年に一度行われる大部族会議である。ここで行われた決定は各部族法の上位法+命令として扱われる。これと各宗教団体が行う宗教祭祀に参加することとで、結束が高められた。ここで大部族内の政治的軍事的負担の決定がなされるだけでなく、大規模交易のキャラバンやその利益配分なども行われた。

やがて祭祀場兼交易の場、もしくは各部族の拠点营地が100年ほどかけて小規模な都市となつたり、集落となる。これらの点を結ぶルートがいわゆる草原の道と呼ばれ、アラン文明域とガンダ域を結ぶルートとして発達した。

そして定住化するか、都市化した地域に住むのでなければ、ある程度の集団が拡大したら、その氏族から分かれてあらため新氏族として独立する。独立のパターンは様々である。まず遊牧生活に移行するか、宗教団体が中心となる灌漑事業に参加し、農地を与えられ、簡単な農業に移行するか、交易商人兼傭兵として参加することもあつた。

またアマゾネス文明が発達すると、次のような独立ルートもあつた。アマゾネス文明では、教団に従属する僧兵や部族や都市から一定数割り当てられた兵役者、そして王独自に与えられる独立した育成機関によつて鍛えられた王直属の近衛兵によつて、強大な軍事力を組織することに成功した。特に近衛騎馬軍は外国人も歓迎し、その部族の保護を名目に侵攻の口実としすることもあり、まさにアマゾネス女王の先兵であつた。この僧兵团や近衛騎馬軍も独立先として選択されたのだ。

こうして遊牧と都市文明の連結点としても宗教勢力が必要であつたことも、単なる祖先信仰やトーテム信仰と並立して、各種教団が

ニッチとしての位置を得た理由もある。フタスタンの地は遊牧文化と定住文化の混交の地であり、それに伴う文化的混交の地であることを最大限に生かして、遊牧民と定住民の長所をそれぞれ取り、発展した。それらの成果である文化と技術はどのようなものであるかを説明しよう。

【アマゾネス文明の文化と技術】

○文化と教育——文字と宗教施設を中心に

まずアマゾネス文明の特徴は初の遊牧民国家でありつつ農業をも組み込んだ最初の遊牧国家である。その文化は遊牧民の文化だけではなく、定住民にも様々な恩恵を与える文化と技術でもあつた。その中で特に重要な文化は文字記録と筆記メディア、そして教育機関の充実であつた。

とはいえて彼女たちは文字を駆使し始めたわけではない。アマゾネス文明の無文字社会の時点では、かなり高度な記録体系と内容を持つていた。これらの記録を担つていたのが、専門の部族もあつた吟遊詩人や神官層と、そして女性の刺繡や織り方を教えあう、結婚時の仕立て部屋で歌つた女性たちの民謡、求婚時に歌われる詩などであつた。アマゾネス民族はなによりも歌い踊る民族であつた。

この文化的性格はグラムス文明の記録でもはつきり書かれており、舞い踊るアマゾネス、女吟遊詩人の国と彼らの叙事詩にも歌われるぐらいで、伝説の吟遊詩人ケメネスはアマゾネスの子孫のシムネーと歌合戦の末結婚したというのが残されているぐらいである。

またそれを裏付けるがごとく、彼女たちの先祖や彼女たちが作った骨角器や、後には壇や木材にレーリフされた人物像、発掘された高度な刺繡で描かれた風俗図からしても、楽器を奏で、歌い舞う姿が生き生きと描かれている。

このようなメディアを駆使して、最初期の彼女たちのコミュニケー
ション技術や記録をもつていた。しかしアマゾネス文明が交易の結

果による先進地帯の文化接触の末、交易の記録や風習などを記録する必要性、さらに分派した部族の把握のため、原始的な数字記憶体系と部族記号を作り、彼女たち自体の表音文字の原型が作られた。アマゾネス文明の刺繡文化や彫金技術の発達は、このような必要性から発達したらしい。

やがて後代になると、ガンダ自由思想家やサーリハの教団は、象形文字指示文字それらを組み合わせた会意文字の部分などはアラン域の象形文字を名詞記号として借用した。音声文字部分は古アマゾネス記号の簡略したものとガンダ域の文字を補助的に利用し始める。最終的に、表音文字をベースにしつつ、名詞や重要な動詞は表語文字化させた、三島の文字表記体系のように混交した表記体系を作り上げた。

このようにまとめられた文字を使って、各種教団は叙事詩群や各種説話や教団の規則を書き上げ、そのことにより言語がより標準化されることで、アマゾネス文明は部族を超えた文化的アイデンティティが作られる。各部族社会とそれらを結節する宗教文化の混交形態というアマゾネス文明はこうして発達したのである。

また文字の発達はメディアの発達と並行関係にあるが、そこでも彼女たちは大いに貢献した。彼女たちは粘土板だけでなく——図書館や重要な行政記録はこのメディアに記録された——、複数の書記メディアも活用したり、開発し記録した。サベル域のカバノキを使った樹皮メディア、ガンダの貝葉、最後には羊皮紙の原型や樹皮布から発展させた紙の原型をも作り出したのだ。

このように記録するメディアの充実、ガンダ域の既存の権威体制と異なった教育体系、宗教施設による教育施設、さらにはサーキー女王時代後期になると、アラン文明で発達した生涯教育の場である知恵の学院の誕生によって、ガンダともアランとも違う文明を作り上げた。彼女たち的好奇心と知識の強さは、知恵の学院の跡に残された標語からも見て取れる。

汝の武は 鞭の如く鋭く 汝の役畜を守る

汝の知は 速き馬のごとく 知識の沃野へ導く

書かれたものは 浅い草場を持つがごとく 時に応じて使え

記憶されたものは 豊かな草場を持つがごとく 安らかに子孫を導く

そして汝とその友の武勇は この草場と富を守る

この成果は、当時としては先進的な人文知識が——特に語学と言語学、数学と論理学、後には哲学——充実され、記号を使つたテキスト分析と文法規則がなされるほどであつた。その知識は後世にはあきらかに名詞修飾と動詞修飾の区別の記号も表記体系に組み込まれ、明晰な論理構造と詩文を組み合わされた形式で文章が書かれている。このことから後期ガンダ文明の文法の高度化に一役かつたと、現代では推測されている。

その結果翻訳も多くなされ、ガンダ文明のヴェーダ群、アラン文明の技術書、数学書などが持ち込まれるほどであつた。これらの著作は知恵の学院の図書館で貸し出すこともあり、著者には借りられた数だけ一定数の礼金が送られる仕組みであつた。

このような施設がアマゾネス文明の及ぶ地にも作られ、これによつてガンダ文明の知識は神官層の秘伝から、一般的なものへと解放された。それがさらに新たな知的再構築を既存の上層階級とは違つた階層、階級が行い、新たな知的果実が作られる。

そのうえこれら知識を地方まで及ぼす制度を取つた、王の要塞兼学校兼集会場のネットワークである。駅伝制度とも組み合わせれたこのネットワークは、駅伝施設というだけでなく、王の支持を高速に伝えるシステムであつた。文献ではこのシステムの拠点は”触れ場”とよばれ、数年にわたる初等教育を行つたり、部族法裁判を行う場、そして部族間の定期的な祭祀、最初は祭りから、やがて冠婚葬祭を行う場へと発展した。

行われる祭りには運動会らしきものもあり年に一二回を行われた。そこで優秀な成績を取ると、大部族会に附属する運動会の出場権を得て、そこで勝つと大会を記念した石碑に名前が残されることになる。このような巧みな施設運営文化により、アマゾネス文明は最終的に

各部族の連合体の中に部族間を超えた宗教団体が包括し、その上を王族の権力と権威がある社会形態になつたのである。

教育機関としての触れ場は、儀礼、体育、文字の読み書きから始まり、やがて後半になつてくると本人の資質によつて叙事詩や楽器、武術や技能の基礎、数学や語学などの交易知識を教わる。しかも会話集や語彙がわからなくなつたらどう訪ね推測する方法も教えられ、このことが交易民族としてのアマゾネス文明をより完成された。特に地理については、東はガンダ北東部から山岳部ヤクティス圏、シベル東部、西はアラン文明圏、南はガンダ南部などが教科書と思われる文書に書かれていた。特に南部は人口が多くなると、この地にアマゾネス文明の人たちは移住した模様である。

また触れ場は交易の商館機能をも備えるところもあつた。とくに砂漠圏やガンダモル、それにヤクティス圏に向かう峠道や大河の渡し場となると、季節や天候によつてはその地にとどまらざる得なくなるからだ。そのような臨時の生活の場が必要とされた。そこで彼女たちは自らの技能や技術を生かしつつ、生活を営み、神殿に通つたり、その付属の図書館や写本屋で本を読んだり、吟遊詩人を雇つて集団で聞くようなことも行つたのである。まさに生涯教育を彼女たちは行つていたのだ。

○アマゾネス文明の技術

彼女たちは遊牧民から定住農業をもフレクシブルに行う存在であつたが、それを結節したのが、今から見れば原始的であるが高い機械技術とそれを活用した土木技術であった。

もともとフタスタン域は川はいくつか流れるとはいえ不安定であり、水力の恵みに乏しい乾燥地帯に生まれた文明であるため、それに適した技術を作り出した。すなわち地下水の利用と活用する技術である。深井戸を発掘し、それらをくみ出して水を蒸発させない地下水路と水道による灌漑、しかも点滴灌漑農法の原型らしきものも彼女たちは行つていた模様である。。

その際の土木工事の労力は初期は人力頼りであった。そこで畜力機関、水力機関による灌漑と井戸の掘削を行い、鉄器を利用した掘削技術を彼女たちは開発に成功する。特に大型車輪による畜力機関と水車の発明は、古代文明最大のものの一つであった。この技術は瞬く間にアラン文明、ガンダ文明、ザウル文明に取り入れられ、この技術の応用を各地で生み出すに至った。またマーヤ山脈北部、ヤクティスの地もこの技術によつて開発が進み、ヤクとヤツクルの導入も相まって生産力を産み、アマゾネスの同盟者としてガンダ東部に圧力をかける。

アマゾネス文明でのこれらの技術は、滑車とロープ、大型歯車による動力移動を通じて各種応用される。まず旋盤に代表される木材加工技術や、原始的な碾き臼に鉱石や穀物の加工、滑車の技術による重量物の引き上げによる土木工事、攻城兵器、そして深井戸の掘削とそれからくる水をくみ出す畜力によるロープポンプによる灌漑に使われた。それが古代の食料生産力の向上をもたらした。その掘削技術は後年になつて大三島上勢域で開発された井戸掘り技術に似ている。

さらに材料の加工だけでなく、完成した長育種の触手を得たことから、高度な加工が可能になり、木管利用の楽器や家具類を作り出した。発掘されたものでは、精密に加工されたテーブル、水路にくぐるロープを守る管、伝令に使われたメガホン、そして点滴灌漑の原型となつた容器がある。

先に述べたようにフタスタンの地は今も昔も毛織物が盛んな地である。そのような中で触手を利用した織物技術は発達する。最後の方になると触手使用前提の改良機織り機も作られ、複雑な模様が作られ、高度な織物がサベル、ガンダ、アランなどに輸出された。また文化依頼の伝統であるサベル域の金を利用した彫金、金細工の存在も発展改良される。

最後に遊牧民社会でもあつた彼女たちは自身の強みである、騎馬技術の向上も怠らなかつた。この技術こそアマゾネス文明の最大の特徴にして絶大な軍事力を作るに至つた触手技術と各種馬具や武器の

誕生である。これら技術を駆使して男性中心の戦闘文化を補い、その生産の特殊性から女性の地位をより高めた。これは別章で紹介したい。この技術こそ遊牧民社会の一大転換をもたらし、アマゾネス文明を世界史的な存在としたのだ。

7 長育種触手技術による軍事革命と生活革命

【はじめに】

さてアマゾネス文明の霸道を完成させ、各地にその技術を伝播させた触手技術についてだが、読者諸君はそもそも触手長育種の特徴というものを想像できないかも知れない。

現在主流となつてゐる触手は、軽薄短小化の技術の洗練によつて、直接長育種触手の姿と恩恵を見ることは見ることが少なくなつてい。また各種機械や装置によつて代替されてゐる部分もあるため、目にすることは少ない。例外は介護用の簡易筋力補助として使われる作業用触手、後述する生活改善機能としての触手ぐらいなものだろうか。

とはいへ伝統的にも、この長育種触手技能を持つものは古く大三島でも畏敬の念を持たれ、各種伝統医療から最新鋭の医療機関や伝統武術や軍事用にも欠かせないものだ。しかもこの触手の子孫が断絶に近い状態にあつたとはいへ、現在の触手技術の基本の一つになつてゐるのである。

そこでどう画期的であつたのか、長育種ショクシユの簡単な生物学的特性を説明したのち、その触手技術が世界史的に、軍事的にも、生活面でも革命的であつたことを説明したい。

【触手長育種の生物学的特徴】

この論文で扱う長育種触手とは、正確には大三島語で基本ガンドハラスミオオナガショクシユ科に属するショクシユ属種に代表される触手類のことをさす。生物学的分類では、長育種という存在は厳密ではない。というのも今では他にもエウロイキドロスマショクシユ科やその他ショクシユ科を品種改良され、形態が似たものがあるからだ。それらも含めて長育種という概念がある。そして形態的にも生態的にも似た特徴があるとはいへ、ガンダハラスミオオショクシユのほうがその歴史的利用がより古いことが、現在では判明している。

このショクシユが疑似器官を生成して、ホストに寄生するのはかわらない。ホストとなるのは靈長類——人間からサル類——と各種役畜などに寄生する。特に靈長類と寄生する特徴を持つことから、この生物がガンダ系の触手に分類される。

この触手は基本的な生態は他のショクシユ類と変わらず、卵を含む動植物や乾眠形態の成虫などを食べる、第一形態で鳥や動物に寄生する。そして群生第一形態が集まれば、ホストに適合する各種疑似器官を作り、付着し一定期間寄生する。さらに乾燥すれば乾眠期に移行するか、自然脱落することも変わりがない。

ただその成虫二次群生形態である疑似器官態と形状に、他のショクシユ類といくつかの、従来のショクシユひときわ違った生態と疑似器官をもつことになる。

まず身体構造である。このショクシユの疑似器官の構造は、——種類にもよるが—— 大きく育つことにある。それは、1メートルから場合によつては3メートルにまでに成長する。これらの種以外の野生のショクシユは品種改良がなされない限り、30cm～60cmの大きさ程度にしかならない。

また大きさだけでなく、この種が作る疑似器官の体組織は他の触手の疑似器官が作らない各種疑似組織を作るところにも特徴がある。とくに複雑な筋組織、腱組織、軟骨組織、基底部に尾骨をついた、より弾性をもつた構造を持った器官を作るのだ。このことはかつての触手技術で使われる触手よりも、筋力や複雑な作業を可能にしている。種類によつては筋力はかなり強く、20～30kg重にも達することもある。これらの品種の力を競う競技があるぐらいなものだ。

それだけでなく、それらの触手はホストと疑似器官を結ぶ疑似神経を持つことが多くなつていてることも特徴の一つであげられる。このことでより長くホストに定着する。

さらにある種の物質をホストが付着していると、その物質を伝達物

質としてホストと神経や魔法回路を共有する。ホスト自身に訓練と伝達物質の材料が供給される必要があるとはいえ、ホストの意志をショクシユに指示することが可能になるのである。この特性こそ画期的なものであり、疑似筋肉や腱構造の作成とあいまつてより能動的な触手利用を活用にする。

利用者が能動的に使える後天性の器官がここに誕生したのだ。これは人類やヒューマン種にとつて新たな意義をもたらす。無論一定の訓練が必要があり、疑似器官自体の寿命という時間制限はある。だが人体に相対的に悪影響を及ぼすことが少ない第三、第四の手を人類は得たのだ。そのことは各種加工技術や戦闘技術に多大な影響をもたらす。

この技術がいかにすごいか、現在でもつかわれている男性生殖器や女性生殖器官の機能再生と複製した場合を持つて説明しよう。

これまで述べたように、ガンドア文明は人間にも接続可能な触手技術を生み出した。そして野生のものも含めて、他のショクシユ科の二次群生形態でもホストに適合した疑似生殖器官は作ることは可能である。そして、それらの器官がホストの神経とつながることは珍しくはない。だがその神経の接続はやや受動的である。アマゾネス文明以前のショクシユがホストに生殖活動に与える影響はせいぜい睾丸の数が増えることで疑似精液も含む精液量が増えたり、排卵が活発になることはあつたり、脳内物質を増やす程度である。これだけでも性的快楽はだいぶ違うとはいえる、その利用はパツシブなことに変わりがない。とはいえ生活改善薬としては十分であるが。

だが長育種とその系統が呼ばれる触手が作り出す疑似男性生殖器になると、既存の機能だけでなく、勃起したり寄生させる疑似器官の種類と組み合わせによつては、射精を行うことが可能になる。また疑似女性器ならば膣内の快楽も得られる。これは接続する神経系列数が劇的に増えたことと、外部物質の補給による神経物質、脳内物質の増加によって、触手の接続さらに強まる。いわゆる魔紋術——性的刺激に限定すれば淫紋術と呼ばれる——の発達により、より精密な動きとフィードバックが可能になつてくる。神経結合、魔力回路結合の種

類によつて魔紋術を使えば、通常の生殖器官ではありえない動きも可能になることも付け加えておきたい。

これだけでも強力な効果を持つが、長育種触手の誕生により画期的だつたのは、人とスライムを介すれば、ウマなどの騎乗動物に安定して触手を接続可能になつたところにもある。これはのちには他の馬具にとつて代わられるが、より精密な動きをする場合でも衝撃から保護したうえで、現在でも接続される。安定して騎乗者の意志を伝えるにはこの技術はかかせないからだ。

さらにアマゾネス文明の第二形態であるショクシユ目の中でも珍しい乾燥地にも適応していた生態ことも、革命的であるといえよう。普通乾燥地にはショクシユ目の疑似器官は乾眠形態をとり、反応がなくなる。だがこの触手は、疑似器官においてもヒューマンを含む胎内に潜り込む生態をとつたりする。最初は胎内、もしくは一定の温度と湿度を持った疑似器官や専用の容器さえあれば、乾眠形態にならずに長育種触手は限界はあるとはいえ活動を継続する。この疑似器官を胎内に生息させるという特徴が、乾燥からの活動低下を避けているのだ。

以上、長育種触手の生態を簡単に説明したが、古典的な触手利用とは異なる能動的な利用が可能になることはわかつてもらえたと思う。この長育種触手はどうやらガンダ北西部に原種があつた。それにガンダ北東部のヒューマン族アルタ族に接続する役畜化されたショクシユと接触、交雑交配種したことで、誕生したものとするのが、現代の定説である。

さてそのことにより、可能になつた技術はどのようなものかを次からの節で述べよう。筋組織を持ち、なおかつ人間と他生物を結ぶ触手がいかに革命的なものであるか、わかるはずだ。

【アマゾネス文明における長育種触手革命】

アマゾネス文明が作り出した長育種触手の技術は、考古学的に判明しさらに現代まで残つてゐる技術から考査されたものによると、次の

通りである。

- (1) 馬術革命
- (2) 触手弓に代表される各種弓術の誕生
- (3) 触手武器 長鞭術 柔武器群の群れ それによる武術の誕生

(4) 補助武器 去勢された馬でも感じるフェロモン

その上に遊牧民の生活自体をより高める触手技術がさらに加わることで、軍事力を支える基盤ができたのも大きいだろう。

(1) ウマとヒツジとヤギ、さらに後代ではラクダとヤクに対応した触手技術の完成

(2) 簡易な入れ墨による神経節と魔法回路を結び付ける技術——魔紋術の高度化

(3) クラーケン技術とスライム技術による触手の固定化と複合魔紋術の完成

(4) (2)と(3)の応用的利用法 刑罰と交易品としての触手技術——ジエンダーの相対化

この技術の相乗効果の結果、アマゾネス文明は高い軍事力と生産力を得ることになった。これらの技術がどのように革命的なものであつたか、より詳しく説明したい。

○触手軍事革命——その中心となる技術

まずは(1)の馬術革命である。伝統的なポリアーヌ文明の遊牧技術は一部の騎馬を除いて、よくて毛布を馬の背に乗せ、大体は裸馬に直接乗るのが当時の風習であつた。このような騎乗方法では幼いころから訓練をしなければ、安定して乗ることは不可能である。またそのうえで騎乗のまま武術をこなすとなると、さらに難しくなる。現に残っているポリアーヌの騎馬兵を描いた様々な考古学的資料を見ると、その戦術は——勢いは後世のものと違つて軽いものであつたろうが——、ランス突撃を行う。もしくは槍を振り回すのがほとんどであ

る。これも大半の歩兵にとつて大いに脅威であつただろうが、まだまだ洗練された武術と呼べるものではない。

しかし長育種の技術が重なるとこれは一変する。乗馬靴の改良、ヨリフィットした馬具がこの時代に考案された。馬自体に長育種の触手を上手に絡ませることが可能となつた。それまで時代では特殊技能に属する乗馬技能が長育種の触手をつけることで、誰にでも可能になつたのである。

このことで騎乗者は馬上で安定して行動することが可能になり、当時ならば庶民と戦士階級にともすれば分裂しがちな遊牧民社会を皆兵組織にすることが可能になつた。この優位はすさまじく、ガンダ域やアラン文明域の戦車中心に発展していく戦術から騎馬による大量動員戦術へと移り変わることになつた。

この遊牧民族のフォーマットは地域差はあるども長く保持され、国民国家の原型である主権国家に至るまで長く遊牧民国家の軍事的優位をえることになる。

さらにこの技術は、騎馬の安定に伴う戦術を変化させた。騎乗弓兵の誕生である。高速で移動する騎馬兵は、触手技術と交易で得た資材を使うことで弓を改良、長育種による筋力増強も併せて、古代文明の射程を超える射撃武器を作り出した。

考古学資料で実験的に作られた、ガンダ、アラン域の弓の射程はせいぜい200メートル前後である。だがアマゾネス文明の戦士たちは、弓を改造して特殊な触手を絡ませることで肉体的限界を超えた射撃を可能にした。その威力は300～350メートルにも及び、後世に発達したコンポジットボウにも匹敵する。さらに明らかに滑車らしきものをつけた痕跡からコンパウンドボウの原型らしきものが考案されたとみられる。このことがより楽に強い弓を弾くことが可能になつた。これも女性陣が戦うのに有利になつたのである。

また近接武器としても長育種触手は驚異の存在である。触手は差異はあるこそすれ、間合いを取ることが難しい。大三島のオーケ武術やその系譜には居合触手術が今でも残つてゐる。そこでは間合いを取ることが重視され、長距離の居合術として一撃で仕留めることが重

視される。

その距離は槍とまでは言わないが、平均的なものでも短い槍ぐらいまでにはなる。触手技術ではない、居合ですら初見で見切るのは難しいと言われる。ましてや初めてこの触手を持つた騎馬兵と戦つて見切るのは難しい。こうして戦車に乗った兵は一方的に駆られることがある。

また触手 자체も恐るべき武器である。触手は長くなるほど扱いは難しくなるが、上手に使えば長鞭は音速を超える打撃が可能になる。音速を超えると空気の壁が発生するため、一回限りのものになつてしまふものの、それで打たれたものの打撃は耳や指ぐらいなら吹つ飛ばす。

そしてこの特性を持つた触手は、速度を落とすことも長育種の触手ならば可能であり、触手の先につけられた投石器や投槍器で放たれた一撃は連発性こそかけれども、恐るべきものである。さらに連発性を求めるならば、石や投槍や加工された弾丸を触手で手に持つた補助器に充填することが可能になつたのである。無論この技術は修練をするものではあるが。

またこの触手を絡ませた武器を持つことで、騎馬突進にも耐えられることになったのも大きいだろう。これにより、さらなる既存の武器の戦術が変化した。槍も武器も頑丈になり、騎馬の突撃をより強力にした。

しかも筋力が低い触手でも間合いがつかめないのは変わりない。このことは罠を設置する際により一層効果的になる。罠を遠隔操作することが可能にしたり、室内戦でも鏡を使って伏兵を発見することが可能になる。

この技術はより体系化され、アマゾネス文明が没落したのちのガンダ文明で触手を使つたバイ術がこと細かく書かれているぐらいである。

そのうえ生来の獣医とも言えたアマゾネス文明の住民は、疑似触手器官を使ってフェロモンや疑似性器を作り出す技術を開発したのは前にも説明した。それは宗教的儀式だけでなく、軍事的にも使われ

た。敵対相手に対し、疑似フェロモン機能をつけることで、様々な感情や性的興奮を起こすことが可能になった。

ウマの発情や人間の発情を起させる触手を弾弓を使うことで、敵の馬につけたらしく、壁画には弾弓を使うアマゾネスの戦士が書かれている。

この攻撃は強烈なもので、去勢された馬だろうが発情することが可能にし。ウマをパニックを起こさせたり、機能不全させて一方的に攻めることが可能になった。この技術の発展はさらにアマゾネス文明の崩壊をもたらすものであつたが、それは後述する。

この技術は人間にも応用され、生活面でも交易面でもアマゾネス文明を大いに潤すことになる。触手から作られた媚薬は貴重な交易品として用いられたのだ。この技術は現代でも各種薬品会社が開発に勤しんでいる。

次に触手の生活面での発達を書きたい

○触手生活革命の中心となる技術

このような強力な軍事面で威力を發揮した長育種触手であるが、それらだけではなく生活面生産面でも彼女たちは偉大な貢献を果たした。軍事的に優れた技術であろうとも、それらを支える兵站が機能しなければ安定しない。

しかしこれらを支える生活面での触手利用も高かつたことが、アマゾネス文明の覇権をより確かなものにした。

まずはウマとヒツジとヤギ、後にはラクダとヤクとヤツクルに対応した触手技術の完成が大きいだろう。

彼女たちは軍事力という鞭だけでなく、飴も持っていた。先の章で高度な機械技術を持つていたことを示したが、それだけでなく飴となる技術として高い生産力を持っていた羊、山羊とそれに適合した母乳の增量、消化補助、精液增量の触手を分け与えた。

後代になるとラクダと高原域のヤク、ヤツクルなどをも家畜化に成功し、それらの触手も開発された。

さらにガンダ域の優れたウシやウマとアラン域に発達したウマの品種を掛け合わせ、乾燥域にも強い繁殖力の強い品種をも彼女たちは作り出し、これらも歓迎された。

これらの乾燥に強い家畜は、従う国家に提供され、ガンダ文明独自の機械技術の応用も加えて、ガンダ南部、北西部の生産力を高めた。彼らは勇猛果敢ではあるが、少なくとも蛮人ではなかつたのである。

また彼女たちは医療用に毒用の触手器官を発展させた。このことが可能になつたのはザウルの乾燥に比較的強い触手を利用し、北方触手技術とガンダ触手技術を融合させ、熱帯域の植生に頼らない触手毒を利用した薬品を作り出した。そしてこれらを交易品としたのである。

この技術と医学の発展は、北部との交易により得たキノコ類による神経構造、魔法回路の把握をサポートする技術と融合するにつれて新たな技術体系の発展を促す。魔紋術もしくは、俗にいう淫紋術である。だが正確には刺青式触手親和技術と呼ばれ、これらによつて触手は人間により安定し、なおかつ長期間適合させることが可能になつた。魔紋術自体は各地域で独立に発見されていたが、アマゾネスたちはより精緻なものにしたのだ。

この技術はまず北部との交易により得たキノコ類による神経構造、魔法回路の把握をサポートする技術によつて完成された。アマゾネスたちは習慣として、身体に入れ墨を入れることが多かつた。それがより実用的な目的として使われはじめ、魔力増幅、筋力増幅、そして毒や病気の抵抗につかわれた。

次には触手を使って、疑似的な神経回路を作るという発想にまでに至り、ある種の纖維を触手薬で染め上げたり、触手毒に親和する皮革を加工し、クラーケンの組織やスライム族の組織など付着させるデザインが改良された。いわゆる触手服の技術である。特に革製品の触手服の完成は魔法技術者に保護を与えるだけでなく、魔法戦士の誕生を可能にした。

魔紋術による加護を着脱可能にした触手制御技術の精緻化である。この技術は当時としては高い薬剤や北方交易によつて得た素材など

を使うため、高度なものは専門職のものであつた。だが簡易なものは普及した。戦闘用の専門的なものに使用するだけでなく、各種工芸品を作るための触手服が作られた。それで高度な加工がより一般化し、現在でもうならせるような細工を見る事ができる。

この技術は先に述べたようにもどもとあつた毛織物の技術を高め織機の改良もあり、今でもナーリー織は高級絨毯の代名詞である。この技術は現代でも薬液の開発と紋章の形態は進行形の発展技術であり、複層魔紋技術やあらたな神経節結合方法は日々開発されてい。現在の特殊で高度な魔力制御はこれらの技術がないと成立しない。ぜひ魔法関係や科学関係に興味があるかたは勉強してもらいたい。

この魔紋術は様々な分野に応用された。まずは魔力増幅、筋力増幅、そして毒や病気の抵抗だったが、一番使われたのは触手技術と複合した人間や家畜の性的興奮や精液増量を増やす技術だろう。これによつて疑似神経回路を通じて特殊なフェロモンを感じし脳内物質を増すようを行う。アマゾネス文明の作つた祭器にはこれらを浮かし彫りにして交わる男女が書かれているぐらいである。

さらに快楽を高めるだけでなく、刑罰にもこの技術は応用された。刑罰紋である。おもに強姦罪などに適応されたが、性器身辺に特殊な淫紋を施し、同意なきセックスをしたら苦痛を与えたり、人間だけではなく長育種触手成育のための動物にしか興奮しないようにすることも可能にした。魔術化学的去勢の誕生である。もしくは刑罰として物理的去勢したのちに、刑期をすぎたら費用を払えば、改めて代替の生殖器をつけることも許された。しかも疑似性器でもキチンと生殖能力を持ち、男性は興奮することができたというから、非常に高い触手技術を持つていたことがわかる。

この魔紋刑は宗教罰として使われ、去勢だけでなく、男性の犯罪者には短期的に勃起不全させられたあげく肛門性交の感度を上げさせられ獸姦させられたり、女性の犯罪者には避妊技術を施された上で獸姦させられたという。

今でこそ魔紋術の利用が社会的問題になつたり、見えない魔紋術や

それに伴う専用の体内触手によるスポーツドーピング問題、監禁事件で無茶な魔紋を施す人など、たまに事件をにぎわす。しかしあともどは戦闘技術と刑罰などが起源である。

ネットでも魔紋術や触手育成方法が粗雑ながら紹介されており、そのことを利用する人が多いが、きちんとした教育や講習を受けてほしい。無論FTMやMtfのいわゆるトランスジエンダーのための技術となると専用の医学教育を受ける必要があるが、簡易的な触手利用は簡単なものから中規模のものになると、安い費用で受けられる。ましてやネットだよりで悪用したら、刑法上の犯罪だけでなく、魔紋触手安全法、医療法違反にあたるので注意してほしい。

ただこの時代では貴重な交易品であるクラーケンなどの北方交易品やスライム族の一部に簡易的な加工を施し、短期間魔力ブーストを可能にするだけのものであつた。強力な魔法を使うと魔晶石自体が燃え尽きてしまうからだ。

より安定した金属魔紋術の利用、魔法回路をも利用した恒常的な触手服、触手鎧、そして土木レベルまでの触手利用の完成形は、神苑文明とザウル文明、グラムス＝レムネー文明にならなければならぬ。神苑の絹を利用した触手服による魔術、ザウルの短触手とそれを利用した触手の要塞レベルでの利用、グラムス＝レムネーの高度な魔法鎧による重装歩兵と複合兵科戦術の誕生。これらの技術は使って各文明は新たに古代世界の覇者となる。だがここでは詳しい説明はせず、後述する参考文献を参照してほしい。

しかしこの服はこれまで高度な専門教育をして、魔法を使えるものから、より簡易的な魔法の使用を可能にし、生活面魔法の充実をもたらし、それらが彼女たちの教団によつてもたらされた。

彼女たちの触手技術は軍事的だけでなく、生活面の向上を又もたらしたのだ。

【まとめ】

以上彼女たちの触手技術を説明したが、これらを技術が、ガンダの古典的触手技術の上にを北方の交易の物資とアラン域の文明の吸収、先に述べた高度に組織化された教育機関、宗教機関などによつて増

幅した。

さらに北方交易から得られる資材もこのような覇権を可能にした。それらの上にガンダ文明の古典的触手技術が還流することで、アマゾネス文明は辺境域の文明からやがて、ガンダ西北部にかけて進出し、ガンダ域における最初の騎馬遊牧民族国家の誕生をなすことができたといえよう。

しかしながら、ここで一つの疑問ができる。アマゾネス文明は確かに強力な文明——文字を持った遊牧民国家であり、しかも交易によつてあらたな触手技術を得たが、どのようにしてそれらを得たのか。

特にガンダ文明における古典的触手技術は東部で成立し、発展したのは、大ガンダ——ユーラスタン東南部——の物資があるからではないか。明らかに辺境域にあるアマゾネス文明では触手技術が可能になつたのはなぜなのか。この疑問が出てくる。

そこで紀元前800～600年から時代を飛ばし、19～20世紀にかけてアマゾネス文明の技術の再現に挑んだ人たちの物語と彼女たちがどのように長育種を手に入れたのかの技術的再編について説明しよう。

8 何故アマゾネスは長育種を作ることに成功したのか？ その再発見に至るまで

【はじめに——長育種触手の再発見に至るまでの道】

このように強力な軍事力をもたらすことになつた長育種ショクシユ目であるが、先に述べたようにその力はすさまじいものであると実感できたであろう。

触手補助による筋力増強、それに伴う弓の改良、馬具以前にも可能になつた安定した騎馬技術と武術、軍事的に優位に立つてゐる。

この姿がはつきりしたのは、實に19世紀～20世紀後半であることは存外しられてない。というのも長育種ショクシユ目は中世後半13～14世紀にかけて再発見、再導入されたものであり、エウロスの文明でも長育種触手技術は、比較的新しいものである。

それゆえにグラシア文献によるアマゾネス文明の長育種ショクシユ目はあくまで伝説上のものであると考えられた。18世紀にはその非実在も唱えられることもあつた。

しかし19世紀になると、エウロス＝ガンダ語族仮説とナシヨナリズムの高まりの中、アマゾネス文明の触手技術再生は活発になる。

しかし19世紀中盤から始まつた帝国主義による世界分割に巻き込まれ、フタスタン地域の考古学的発掘は世界分割の最前線であつたことであり、その研究が進展することが難しかつた。

その最中にも学問的情熱に促された国境を越えた二人の女性アマチュア学者、サラ＝リース＝タッカーとアントニーナ＝アイラトヴィチ＝トロイノフによつて、アマゾネス文明の触手技術の考察と実験がなされた。この再現実験は、獣姦を行うスキヤンダラスな方法であり、当時の学会からの困惑と世間の嘲笑をもつて迎えられた。彼女たちの業績はの実験の再現性の困難さと統計的問題もあつて、一時忘れられる。

だが医学、生物学、その延長にある畜産学と触手学、それに考古学、

歴史学の発展によつて、その仮説は1920年代から再評価され始めた。そしてナーリン遺跡発掘とその文献群の解読により、ほぼ正確な方法であることが判明し、1990年代にはフェミニズム的にも先駆的研究であることも考慮された上でその学問的地位を確立した。

その発見に至るまでの過程をこれから述べたい。その過酷な発見のドラマは是非記憶されるべきであるからである。また彼女たちの業績の再評価には、大三島のとある医学上の発見がヒントになつてい。その縁も含めて説明し、その負の帰結としての第二次世界大戦の触手技術の戦争犯罪も交えた利用も解説し、その負の遺産と私たちがおうべき義務を考察したい。

そのうえでアマゾネス文明の担い手たちの過酷な触手育成法との発展の現時点で解説している部分を説明しよう。

再発見のドラマを読者がくどく感じられるならば、後半だけ読んでその技術を参照してほしい。しかし現代の定説とよばれるものは先に述べたように細かい学問の組み合わせで成り立つのであり、その過程には様々な歴史的な重みが確実に存在している。それを是非感じてほしい

【長育種触手の絶滅による、エウロス文明の古代触手技術の断絶】

軍事的にも強力な長育種触手であるが、この技術はエウロス圏においては古代の末期の時点で失われる。理由は後で判明したことも含めて複数ある。順に説明しよう。

まず長育種触手育成にアマゾネス文明の使つた方法は端境期というものが存在する。そのため安定した生産方法となるには、後述するが、サーリハの教団のように女性中心による宗教儀式の中に取り入れる必要性があつた。強力な触手を生産可能ではあるが生産効率が悪いのである。

さらに紀元前300年ごろ考案された、エウロス北部誕生したスライム利用苗床法による触手枝分け技術の完成がアマゾネス文明による方法を過去のものにしてしまつた。この方法は現代でもメインに

使われる技術であるが、北方エウロス域に広く存在するローパースライムを利用したもので、乾眠形態をとるショクシユ目コロニーをローパースライムを苗床にすることで、安定した触手疑似器官を作ることに可能にするものである。この方式の画期的なところは、親苗床から産まれた疑似器官を別の苗床に移植可能にし、親と同じ疑似器官を作り出せる点にある。この触手生産技術は大量に各種目的とした触手を作り出せる。

とはいってもこの方法には弱点があつた。ローパースライムか、ショクシユ目に病気が発生すると、一気に大量絶滅を起こし、各種触手利用の産業に支障をきたすのである。この問題は現代でも発生し、大三島域では20数年前に発生したキヨシマショクシユ種のウイルス性パンデミックによる大量死と、それに伴う海女による伝統漁業崩壊の危機が身近な事例であろう。

株分けされたアマゾネス文明の長育種触手は、グラムス・リレムネー文明では国家レベルの管理で生産されていたようである。だが馬具の改良と魔法技術による対長育種触手カウンター戦法の発展により、精密な作業用の触手——織物、医療用、魔法彫金技術などに使われた——以外では、軍事用触手は次第に生産されなくなつた。

3～5世紀ごろのレムネー文明崩壊期になると、そのころ発生した気候悪化と触手パンデミックによつて、一部の触手を残して品種が激減してしまつた。絶滅した品種の中には戦闘用長育種触手も含まれていた。

このようにしてエウロスでは歴史的経緯もあつて、長育種触手技術空白の地になつてしまつた。それが新たにやつてくるのは、未曾有の遊牧民大帝国であるリヤンモー帝国によるエウロス文明襲撃のことである。それは中世後半のことであつた。

【中世末期のリヤンモーショツクからルネサンス、近世までの触手技術の確立】

● リヤンモー帝国

リヤンモー帝国は地図で見ての通り、神苑圏に隣接した地域で生まれた遊牧民帝国である。この文明は13～14世紀にかけて、圧倒的な軍事力とその優れた騎馬技術、アマゾネス文明以来に改良洗練した弓を中心とした複合戦術でエウロスタン大陸を席巻し、一大帝国を作り上げた。その戦術は今回は説明しない。だがリヤンモー帝国の侵攻は、かつてのアマゾネス文明のガンダ域襲撃をより大規模に再現したかのようであつた。

この帝国はエウロス文明に多大な影響と文物の交流をもたらした。特に触手技術については、触手鎧の改良と長育種触手の株が手に入つた。また触手とも適合したウマも入手した。

これらの触手株は、ハーラン域、そしてリヤンモー帝国が間接統治したエウロス東部域に伝わり、やがてエウロス全土に100年程度かけて広がる。それと同時に触手に適合したウマの発展と各種戦争用触手技術も従来の技術と融合することで発展する。

そして16世紀の活版印刷と書物に伴い、より普及と改良が加速化し、折からのグラムス＝レムネー文明の再興運動によつて、改めて再評価、研究がなされることになった。そこで国家レベルでの触手管理も行われるようになった。

グラムス＝レムネー再興運動の結果、その周辺文明についても関心がより高まり、アマゾネス文明の地同定の試みをなされることになつた。再興運動と並行して発生した大航海時代の到来によるガンダ域到来は、よりその情熱を高めることになった。

しかしガンダ本土の触手技術は高度な技術で品種は多量であるものの、長育種技術となると、リヤンモー帝国と後代に発生したオーク族の海洋触手を利用した長育種触手がほとんどであり、アマゾネス文明の触手の原型は残つてないようと思われた。

また文献分析と言語学上の最大の成果である18世紀後半のガンダ＝エウロス語族の仮説により、言語学上の仮説民族が神格化された。その結果アマゾネス文明はこの仮説民族の末裔と同一視される

ことなつた。アマゾネス文明は古代とは別の幻想的な存在になつてしまつた。

そのような流れを汲みつつ、19世紀の科学と民族主義の時代へと、アマゾネス文明の研究は突入することになつた。

【19世紀触手技術者による再現の苦闘——ナショナリズムと歴史的再現——】

● エウロス諸国地図（19世紀）

19世紀になると、科学技術の進展によりその成果が触手学にも応用されることになる。とくに化学的薬品と生物学と細菌学の発展は、触手学にも恩恵をもたらし新しい品種や安定した触手生産を可能にした。それらの応用技術は人口増加に伴う食糧増加の需要を満たしたのである。また化学療法と触手療法を組み合することで、健康面でのケアや身体リハビリテーションの原型が高まるのもこのころである。美容用触手や医療用触手も数多く、生産された。

この発展は人文科学においても影響を及ぼした。考古学の発達とその分類によつて、技術再現が文献的資料に頼らずに、ある程度考察できるようになつたのである。再現可能になり、グラムス文明解明に大きな進歩を与える。それは現代の技術へとファイードバックされ、洗練させられることになる。

このような自然科学と人文科学の並行的な進歩は折から高まるナショナリズムの機運によつて大衆化させられ、新たな神話を作り出す。それはアマゾネス文明の触手技術再生にも及んだのである。それがある種の歪みを伴いながら。

18世紀のガンダ諸語とエウロス圏の諸語には共通の祖先を持つという、ガンダ＝エウロス語族仮説は、19世紀の歴史と考古学、そして人類学を席巻した。さらにガンダ域のヴェーダ文献解読やザウル域のザーレー教文献やタルニシュ碑文の発見により、確実なものであるとした。そしてナショナリズムの高まりにより、エウロス各民族

がわれこそ正当なガンダ^{II}エウロス民族の後継者であり、ほとんど神話の域にまで高められることになった。

この影響は、なまじつかフタスタン域がほぼアマゾネス文明の発祥の地の候補の一つであると同時に、ガンダ^{II}エウロス人勃興の推定地と近いことであることが、さらに問題をややこしくさせる。アマゾネス文明を正当なガンダ^{II}エウロス人文明に近いものであると想像され、エウロス各地に残っていた伝統的触手技術こそ、その正当な後継者であると主張し始めたのである。

アマゾネス文明の起源についても様々な仮説がなされ、中にはは超古代文明の存在を仮定し、しかも自民族の文化こそ正当なものと主張するものさえあつた。だが時間をかけるにつれて次第に淘汰され、二つの学説の再現方法に整理され、歴史学、考古学の主流意見になる。まずは東神苑圏やリヤンモー域の技術をベースに再現された東エウロスの学者が中心に提唱されたミクヴァスク学派によるアマゾネス文明の技術の再現である。彼らは特殊なコンドームに触手塊をいれて品種改良を行い、それらの中から長育種触手を作り出したと主張した。

もう一つは、グラムス^{II}レムニー学とその考古学的発掘とハーラン域の触手技術をベースに再現されたアルペン学派の触手育成法によるものであった。彼らはスライム族を利用した恒温槽を作り出した。それはのちの主流となる苗床法による触手株分け技術の原型であり、この方法によつて触手生産を行つたという仮説である。

実際両者の方法によつて、既存の長育種触手ならば生産可能であり、それゆえに蓋然性は高いことは確実であった。しかしこれにはウマもしくは人間だけ接続するショクシユならば生産可能であるが、スライムによる媒介をもつてしても両者に結合するということが難しいといふことも明らかになつた。

● グレートゲーム

アマゾネス文明の触手技術の再生は、こうして岩礁に乗り上げた。またこのころから活発になる帝国主義的政策によるミクヴァスク帝国とアルペン連合王国の対立——グレートゲームと呼ばれる——により、協調して研究することが困難になつたことも、原因としてあげられるだろう。

しかしある二人の女性アマチュア学者の研究によつて新視点が与えられ、不完全ながら過酷な実験による実証を行うことで、アマゾネス文明の触手技術の再現に確実な一歩をしめした。それがアントニーナ＝サラ仮説による触手培養法——通称獣姦法——である。この二人の女性学者の再発見とその方法は、一つの契機になるので、次節でやや詳しく説明する。

【アントニーナ＝サラ仮説　　スキヤンダラスな触手育成法の発見】

この仮説の誕生には、二人のアマチュア女性学者、アルペン王国のサラ＝リース＝タツカーとミクヴァスクのアントニーナ＝アイラトヴィチ＝トロイノフという個性あふれる経歴と人物によるものが多い。以上、簡単に両者の経歴を説明しよう。

サラ＝リース＝タツカーは1850年アルペン領南ガングダにて医者の娘として産まれた。サラは、1872～1873年クルヌス＝ポラン戦争の勃発と、それと同時に隣国アルスのレオ＝ディーンの呼びかけによる国家を超えた戦時救護団体呼びかけに、応じ看護婦兼獣医として参加する。そこで同じ呼びかけに賛同して参加したアントニーナ＝アイラトヴィチ＝トロイノフと出会う。

アントニーナ＝アイラトヴィチ＝トロイノフ、通称トーニャはフタスタンのクンヌウーズにて1852年に生まれる。大学の在学中レオ＝ディーンの運動を知り、一時休学。この運動に参加することになつた。そこでサラと出会つたのである。

両者の美貌と機知、そして知的好奇心と活動的な部分は互いに惹かれあうことになる。サラとトーニャは永遠の友情と、互いの学問を

磨きあうことを誓った。

その中で二人は過酷なクルヌス戦争の難民も含む医療看護活動を従事した。そこである決定的な発見をする。

ある戦争性犯罪の被害者の看護と医療活動中に、触手を胎内に付着する患者を多数発見する。この被害者は獣姦を伴う性的暴行を受けたものであり、この種の暴行を受けたものの中には触手を胎内に宿すことが多いという事例に気が付いた。

トニーはかつて見た獣姦の骨角器による彫像を思い出した。なぜそれが作られたのだろうか？今では忌まわしい獣姦であるが、過去では神聖なものであった。その産物としての触手があつたのではないか？彼女は惨劇の中でそのような仮説を思いついたのである。

逡巡の末、トニーはサラに仮説を相談し、獣姦もしくはそれに近い技術がガンダ域にないかと質問する。サラは困惑しながらも、南ガンダ域の民間治療として動物の精液を取り出し、それらを触手塊に浸す儀式を経たうえで養殖を行う事例を思い出す。南部ガンダでは民間風俗で儀礼的獣姦が成人女性の通過儀礼として行われているという、東ガンダ会社のレポートを読んだことを提示した。

この仮説はにわかには信じがたいものであり、両者は母国に帰つたら研究し、その成果を連絡しあうことを誓い、戦時救護団体に勤したことになった。

1873年にクルヌス戦争終結に伴い、両者は母国に帰ることになった。だがその後も頻繁に文通を重ね、その仮説を補強しはじめれる。

サラが気が付いたのは、アマゾネス文明同時代のガンダ祈祷文が明らかに変化していることであつた。奴隸とともに触手豊饒祈願の文が刻まれた金石文が多く発見され始めた。祈祷する対象も明らかに変わり始める。前期ヴエーダ群ならば、触手祈願はヤクスやその息子たちであるマルト、そしてサレイシアに対して捧げられることが多い。アマゾネス文明勃興以前と思われる時代になると、祈願対象者はヤクスではなく軍神イプドゥルとマルトと地域神に捧げられたものが多くなってくる。また自由思想家たちが信仰しはじめた世界法則

を擬人化したリートウ、知識を擬人化したアガーンなどの抽象概念に捧げられることも少なくない。サラはこのことで、古典的触手技術がガンダ伝統的なものと離れ、ガンダ文明北西部では奴隸を使用した触手養殖法が確立したと結論付ける。

一方、トーニャも調査をしはじめる。帰国すると改めて獸医学と触手学を学びつつ、先行研究やフタスタンやその周辺域の触手の民族習慣ならび伝承を集め始めた。その結果、過去のこの地帯には儀礼的獸婚がなされていたという例証をあつめた。さらにその風習があるあたりで発掘された骨角器は儀礼的な獸姦が彫られたものが多いことを分類する。中には番号らしきものがあり、どうやらこれらの彫像は安全に獸姦を行う手引きとして使われたのではないかと仮説した。

また触手学のほうでも、胎内に寄生するショクシユ目の存在を調査し、やがてウマやヤギに寄生虫を駆逐するショクシユ目を見つける。ガンダ域からフタスタンにかけて住むガンダハラスミショクシユはありふれたショクシユであり、やや乾燥域でも育つという特徴以外地味なものであった。過酷なフタスタン域でも生存可能なショクシユ目の存在は、彼女たちに自己の仮説を裏付けるものとして、サラとトーニャ両者を勇気づける。

そしてトーニャからとりよせたガンダハラスミショクシユの触手塊とガンダ北東部の触手塊を専門の触手学者に交雑実験したところ、長い触手が作られることが判明することで、長育種の原型に近いものが得られた。

この実験結果と各種先行研究と考古学、人類学的研究を二人はまとめたうえで、1875年『古代北西ガンダ域の触手育成法再現の一つの仮説』という論文を、匿名人物の名でアルスアカデミーズに提出する。

彼女たちの論文で実証し、示したのは次の仮説である。

(1) 触手の天敵である乾燥地帯であるが、一部のショクシユ目に乾燥域に適応すべく成虫第二次群生形態になつても胎内に寄生する種がある。

(2) さらにこのショクシユが多く生息する地域周辺は儀礼的獣姦の風習が残っている地域、もしくは風習があつた記録が多く残っている。

(3) また金石文の祈願内容と祈願対象の変化により、おそらくガンダの既存の知識人層である、僧侶階級とは別の技術者層が入り込んだことで変化した。それはおそらくボリアーン人のトーテム祭祀から来た技術であろう。

(4) ボリアーン人はおそらく儀礼的獣姦によつて、ショクシユ目を培養した。その際にガンダ域のショクシユ域と融合し長育種を作り出した。

(5) やがてこの方法が広まると、ボリアーン人と北西部ガンダ人は触手育成のため女性の性奴隸の利用し、広く乾燥ショクシユは根付くことが可能になつた。

(6) おそらくアマゾネス文明は既存の触手養殖法を改良改善し、それが原因で権力を握り、(1) のように遠く南ガンダまでその技術が残つた。

多くの人類学的知見と考古学的知見とヴェーダを中心とした文献など、豊富な資料提示、さらに触手学による再現した種の再現も含めて発表したものである。

論文を巡つてアカデミーズは絶賛と困惑をもたらした。新方法による触手品種の改良の発見と先行二学派にない視点は福音であつたが、当時のアマゾネス文明の想像された姿とはかけはなれたものである。

二つの学派を出し抜けるかもしけぬというアカデミズム的打算と世間からの評価を勘案し、アルスアカデミーズは次のような決定を行つた。妥協案として、ハラスミショクシユとガンダ域の伝統触手の交雑の研究の成果だけを評価して後は黙殺することとした。また彼女たちの方法でも人と馬とをつなげる触手という長育種特有の性質の再現にはいたらなかつたことも、減点材料になつた。

教授たちは二人のレディに老婆心ながらも、忌まわしい仮説を考え

ることをたしなめ、研究を断念することを勧める。

しかしこの二人のアマチュア学者は引き下がらなかつた。この仮説の実証をかなり正しいと確信していだし、なにより触手技術が儀礼的なものから始まつたものであれ、それは性暴力の痕跡を残した産物であることを無視されたくなかったのである。

論文の発表を契機にトーニヤはアルペンへ移住し、サラと合流する。二人は今後の研究をどうするかを考え相談する。そして苛烈な決断を二人は行う。安全性を考慮するとはいえ、仮説を確かめるべく、獣姦を我が身で試すことに決めた。

まずはサラ自身がこの実験を行い、各種実験パターンが試された。その細かく気の長い方法は、参考資料を見るとさまでるものである。途中からサラの弟エリオット——のちに医者兼触手学者になる——の協力を得、研究を続けること、2年ほど過ぎた。

ある日サラとトーニヤ、第二成体である疑似器官の形態に変化があることに気づく。その器官を作つた触手株は特殊な胎盤とともに月经時に排出されたもので、その経緯により関心をひくものであつた。その疑似器官は腱構造を持ち、自由自在に動きそうであり、しかもこれまで作つてきた触手よりも長かつた。体長は70cmぐらいであろうか。

おそるおそるサラはその触手を自分の手に寄生させると、馬上用の長育種触手にも似た感触があつた。さらに彼女はヤギにもその先端の先を接続させる。そしてそれは無事接続し、サラはヤギと接続しながら、触手を動かすことができたのである。

努力はこうして報われた、無事ガンダハラスミショクシユとガンダ域の伝統触手は獣姦法でも交雑し、なおかつ長育種の性質を持つことに成功したのである。

この新種の触手を専門家にみせると明らかに新種の触手であると太鼓判を押された。

さらにウマなどでも交配可能な実験器具を作り、ウマにも接続可能なショクシユを作り出した。その生産効率と再現性はやや低いとはいえ、各種役畜との接続可能なショクシユはこの原始的ともいえる

方法で生産可能になつたのである。

改めて二人は実験と方法をまとめたうえで、証拠として新種の触手を提出したうえで、1879年、『原始的方法による触手育成法と触手改良実験——人畜交配法による』という一連の論文を発表、匿名でアカデミーに提出する。

アントニーナ・サラ仮説とその実験は、あらゆる意味で衝撃的であつた。

まずレディともいえる一人が倒錯的な方法で新技術の実験を行つたこと、それ自体がスキャンダラスだった。当時のエウロス社会は強いイシューク教倫理に支配され、表向きは女性が学芸に従事するのは、緩められたとはいえ、憚られることが多かつた。各地域でも基本獸姦は倫理的にも禁止されている。それを破つたことは衝撃的だつた。ましてエウロス社会の当時の価値観は、表向きは性的なものを生殖にのみ限定し、その快楽を得ることは厳禁であつた。

その研究結果は当時の半ば理想化、神格化に近いエウロス・ガンド人幻想を打ち碎いた。当時のナショナリズムのアイコンであつた、彼女たちの突き付けたアマゾネス人は、野蛮な方法を持つたこの時代の異なる、他者としてのアマゾネス人を彼女たちは突き付けた。

科学論文としての手本として出していいぐらいの冷静な文体と、その煽情的な方法が同居したレポート内容を、アルスアカデミーズは二重に困惑しながら査定した。そして不備の少なさに舌を巻き、論文に示された改良再試方法を行うこととした。

そして明らかに、既存の長育種触手に似た触手の品種を作り出すことに数は少ないとはいえた。こうして、しぶしぶながらもその実験の確かさを認めた上で、評価をどうするか、議論をかさねた。

前回と同じように議論は紛糾した。保守的な学者は、このような方法が認められてしまつたら、色物学者が増えるから拒否すべきだと主張。一方で新進気鋭の学者は、その過酷な実験とその自己犠牲的精神を評価し、またその視点の革新さを評価した。議論を重ねた末、匿名

ながらも民間博士号——アマチュア学者の最高権威——を与えることにした。実験の無謀さを批判しつつ、二人に一定期間（具体的には死後まで）の発見者を匿名にすることを条件にして、民間博士号を受けることになった。トニー・ヤとサラは匿名筆者の代理人として賞を受け取った

改めて、危険でない実験方法を確立してほしいと教授たちにいわれ、彼女たちも同意した。こうしてこの実験はスキヤンダラスながらも、アカデミズムの中で事件はおさまった。サラたちも教授たちの支持に従い、改めて安全な品種改良法をどうおこなつたのかを考察しつつ、中層階級の女性の義務を果たしつつ、正当な触手研究を続けた。

しかし発表から2年後、このアカデミズムが隠した実験を思いがけない形で発見され、スキヤンダラルとして騒がれることになった。その経緯は省くが、当時の世間はこのような実験があり、なされたことには避難殺到した。とくにエウロス・ガングダ語族を神話化した各種民族団体は、尊いアマゾネス文明はこのような野蛮なものではない。それを貶める女性科学者は民族的にけがれていると主張した。

このスキヤンダラルによつて、実験の再試の困難にさらされた。このような実験がなされることを知つて、アカデミズムも含めて実験協力者が現れなくなつたのである。また数学者による論文の統計面での不備も指摘された。たしかにこの実験データを当時の主流の検定法で見ると、やや有意でないのである。こうして再現性でも疑われるところになつた。

世間的にも、また実験的にも限界が来つた。そして二人をして決定的にエウロスからの離脱を考えざる得ない事件が発生する。トニー・ヤへの殺人未遂事件とその裁判である。その裁判の結果は、明らかに被害者であるトニー・ヤやサラにとつて不當なものである。

身の危険から逃れるため、ガンダ省の嘱託医として赴任することになつたエリオットに二人は同行し、南ガンダへとひきこもることになつた。

もつとも単純にひきこもつたわけではなく、トニー・ヤもサラもガンダ南部の農村医療と獣医技術を教えたり、地元民のアルペン語教育を

行つて、長いこと過ごす。

そしてそのスキヤンダルが忘れられたころ、三人は連れ立つて1900年に母国に帰国する。

二人の先駆的な女性学者の再発見は、その学問的スキヤンダルとそれ巻き込まれた関係者たちの意欲低下もあって、表にでることはなくなつた。

思い出されるとするならば、ミソジニーにまみれた煽情的な本や、自民族中心主義の中でも愚かで変態学者の事例として扱われる程度であつた。

関係者もまた、別の問題に直面していた。事件のほどぼりがさめた15年後、三人は帰国した。首都カンターヴの外科触手医として病院勤務になつたエリオットを中心に行生活を共にしていたが、研究を再開しなかつた。

というのも三人は、触手労働者も含めた労働者運動やその生活改善事業に精力を傾けていたのである。彼女たちはその運動に偽名を使いながらも参加してたが、そのような多忙の中では実験は行われようがなかつた。彼女たちの10年以上に及ぶ運動はそれだけで興味深いが、それは参考文献を参照してほしい。

とりあえずの運動の成果と後継者の引継ぎをしたのち、サラは1915年にトーニャは1921年に没することになる。

サラとトーニャの死後、ようやくエドワードは彼女たちのテキストや自分たちが行つた実験記録を編集したが、積極的に行動することはできなかつた。家族にこの実験の意義と目的を教えつつ、自分たちの死後公表することを子供たちの自由意志に任せたうえで、1928年にエリオットも愛する妻と家族の元へと旅立つた。

残された家族は想像していたよりもスキヤンダラスな関係と実験に驚いたが、故人の遺志に従い、公表はともかくその文書と記録群を保管することになる。

こうして、人畜交配法による触手技術は表向き忘れ去られたのである

9 何故アマゾネスは長育種を作ることに成功したのか？ その原理とナーリン発掘から明らかになつた姿

【彼女たちの業績の再発見とその原理の解明——ショクシユ目改良の方法とその暗黒】

● 大三島帝国

忘却の中、科学や学問は一步一歩進んでいく。その間にエウロスを揺るがした第一次世界大戦やその復興などがおこり、階級社会から大衆社会へと移行し、エウロス以外にも学問の成果が各地で実を結び始める。

そのような発見の中には、胎内リズムの発見とそれに伴う生理的现象の関係もあつた。それは、大三島帝国の一人の町医者とその協力者たちによつて発見されたのである。

我々の人体は生命活動を行いながら、各器官のリズムによつて体調が維持したり、変化したりする。生殖活動もそうである。男性の睾丸内の精液の生殖活動もそうであり、女性もまた排卵リズムがある。また睡眠リズムの変化を下手に変えて体調を崩し、風邪になつたことは誰しもあるだろう。

だがこのリズムと人体との厳密な関係は、第一次世界大戦後の時点では今一つわかつてなかつた。そのことは触手技術にも関連する。どのタイミングでどの触手をつけるのは、それまでは経験則によつていた。そのタイミングを間違えると当初の目的が達成されないことが多い。この経験則の解説が望まれたのである。

特にヒューマン種アルト種の妊娠不妊のリズムはなかなかわからず、ある人は多産、またある人には不妊という結果に陥ることが多かつた。

それは結果として、下層階級の生活に悪影響を及ぼすことになる。多産の家庭は成育費が家計を圧迫して、貧困におちいることが多く、不妊の家庭はそれが原因で離婚となることが多かつたのである。

そしてその悩みは、新興近代国家である大三島帝国には重くのしかかつていたのである。そのような中、一人の町医者が部下をつれて町の片隅で研究していた。萩原 久である。

萩原 久は1887年に生まれ、煌衛帝国大学医学部を卒業すると、1912年北部三島の荒潮市の私立病院の婦人科部長に就任し、基本荒潮市で生涯過ごすことになる。

荒潮市は当時でも農業地帯であり、その活動上不妊や多産に苦しむ女性が多かった。そこで彼は当時解明されていなかつた排卵時期の研究を行う。数年の歳月をかけ1923年に論文を完成させ、学会誌に発表、反対意見もありながらも学会賞を受ける。さらにこの研究を広めるべく、アラン語に翻訳した後に1929年地球の裏側にある工ウロス大陸へ渡り、生体リズムの複雑な関係の重要性を広めることに成功する。

この研究は当時としては画期的なものであり、ほぼ同時期のアルスの生物学者のアルマン・ノットの研究の発見と同時期のものであり、なおかつそれを補強するものであつた。後年判明したことだが、科学の最高権威であるロヴネル賞の候補者に二人は挙げられていたぐらいであつた。というのも、その研究はヒューマン種やアルト種だけではなく、様々な動物にも適用かつ応用可能であるからだ。

また宗教的にも避妊具の使用を忌避しがちなイシュク教の主要な一派にとつては、重要な技術たりえたことも大きい。萩原たちの発見は避妊法としても宗教的権威があるものとして認められたというのも、ロブネル賞にノミネートされた理由だろう。実際現在でも萩原の名前を知る人は、ハギワラ式避妊法からだろう。本人は不妊治療をしていましたから、彼自身の当初の目的からすればまことに不本意であろうが。

なおこの方式での避妊するのは、重要なものであるが確実性にはかけるので、きちんとした避妊具を特に男性や触手を性的に使うこと

を、感染症を防ぐためにも勧める。

話を戻すが、この発見はすぐに各種役畜の生体リズムと胎内リズムの考察に至る。それと触手の疑似器官の影響も各国で各生物のごとに調査がなされた。

かくして新発見レースが各国の研究者の中で展開されることになる。そのレース参加者の中には新興国ボームのヴァーツラフ・アダミツキーという学者がいた。

●ボーム地図

ヴァーツラフ・アダミツキーは、ボームの獣医学者兼畜産学者である。彼の赴任したナジバート大学は、ボームの平野部の美しい都市であるが、近代的な畜産業が盛んなところである。そのため高い畜産学と触手学の研究がなされていた。

彼もまたアルス共和国に留学し、アルマン・ノットを指導教授にしていたことで早期にこのレースに参加することになった。特にヤギの生体リズムを調べていた。彼は先行研究を調べるべく、アルスの論文概要を漁つた。そこで彼は、否定的な研究として『アントニーナ・サラ法』の研究が紹介されるのを見つけた。

そこで彼は、何に導かれたのか分からぬが、この研究を改めて生体リズムの観点から統計的に有意でないかを調べ始めた。一説によるとこの時点では彼はミソジニー気味の男性であり、女性の研究の愚かさを証明するために行つたのではと考えられている。

人間の排卵リズムとヤギのあるリズムと一致したときに、触手を一定環境下で繁殖されると、安定して新種の触手を作り出すパターンが判明する。そのうえで、人間とヤギが部分的に受精したときに、長育としての性質を持つ触手が高確率で発生することを突き止めた。1933年のことである。

ヴァーツラフは、彼女たちの研究の先駆性を示した上で、改良人畜交配法を考案し、さらに触手の成体リズム、ヤギの生体リズムと人間の生態のリズムが重要なポイントであることを示し、その詳しい条件

をまとめた論文『新人畜交配法における触手品種改良の研究』学会に提出した。そしてヴァーツラフは彼女たちのデータを使つた上で、数十年前に自分の発見した事実のあと一步まで近づいていたことを驚愕した口調で報告した。

彼は後にこう語っている。

『彼女たちの研究は無謀でした。倫理的にも、実験的にも粗削りでした。そしてデータ数があともう少し多ければというところで、統計的な問題と実験協力者の拒否という問題が重なり、彼女たちは自分が発見した事実を見つけられませんでした。

しかしそうであろうとも、確実に私たちに学問の進歩の一歩をなしたのです』

余談だが、彼はこの発見により自己の女性に対する知的偏見を改め、ナジバート大学で積極的に女性研究家を育てることにした。後年、彼の業績を称えて、彼の死後にフェミニズム同盟者としてフェミニズム関係者から評価されている。著者も彼のようにおのが偏見から自由にあり、フェアでありたいものである。

このようにして、はじめは彼女たちの研究は、生物学触手学の観点から再評価され、復活したのである。この方法を利用して、各種触手新種を相対的に手早く安定的に行えるようになつたのは、間違いなく進歩の一歩である。

だがそれは暗黒をももたらしたのも事実である。特にこの時代は戦間期であることから、軍国主義とそれを支える各種食料生産技術の高まりとして、悪用されることになる。

各種新種触手がこの方法によつて応用されたのは、先に述べた。戦間期の復興のために食料増産は必須のものであり、それらを可能にする医療用と獣医用触手、そして細かい作業を可能にする使い捨ての産業用触手——当時勃興しつつあつた電子技術や高度な魔法回路を作るには必須だつた——の生産が急ピッチで行われる。

そして重要な触手新種はパテントで守られることになつた。だがこれらの恩恵をまともに受けられない国々が現れた。新興近代国家群——エウロスの第一次世界大戦で大きく被害を受けた国々とスタ

ニア東部の近代国家であった大三島帝国——である。

これらの国では、戦勝国から産業用触手の品種をパテント料払つて買うにしても、他の産業による触手大量生産はおぼつかない状況にあつた。しかも一次世界大戦で負けたことで触手技術による食糧増産による復興も至上命令としてのしかかる。このような中で触手増産の要請がなされた。その結果、その生産方法は次第に歪み始める。

はじめは、障碍者や犯罪者を触手苗床として利用するところから始まつた。だがそれによる触手新種開発でも間に合わなくなると、植民地の住民や開発途上国の民族、被差別されたマイナーな民族を使用した違法な触手生産がはじまる。その中にはわれらが大三島帝国が参加することになった。

かつてのサラヒトーニヤが仮説として提示した触手改良のための奴隸獲得の新しいバージョンが、大規模に発生した。そしてこの種の犯罪は国家をも巻き込み、第二次世界大戦で最悪になつた。全体主義国家によるシステム化された絶滅政策とそれに伴う触手増産がなされたのである。この被害は多数の民族に多大なダメージを与えた。その具体的な描写はさけるが、是非参考文献を参照してほしい。

現在でもわが国では特に植民地の女子をだますような形で、触手苗床にさせたような蛮行を否認する人たちがいるが、それはわが国の愚かしさを繰り返さないためにも忘れ去られるべきではない。またその種の実験レポートも残っている。そこでは猿と書かれていたが、明らかに人間かアルタ種でしかない反応が書かれているのである。

この事実を知るとサラヒトーニヤの評伝を書いたユリア・グラニエの次の言葉を筆者は思わず得ない。

『彼女たちはその無鉄砲さと学問的情熱により、当時としても現代としても狂気ともいえる性的逸脱者となつた。周囲の男性学者は彼女たちを嘲り、変態文學者よばわりをした。たしかに彼女たちは狂気だつたかもしれない。だがし彼女たちの指摘に目をつむり、そして後世になつて彼女たちの指摘した過去の北西ガンダ諸国のように国家的レイプやそれに類する事業を進めた各国に狂気にくらべると、どちらの狂気がましであろうか?』

戦争がおわり、各国で触手生産に頼らない化学肥料の誕生とそれに伴う食糧と飼料増産技術、精密作業を可能とする生産機械の発展の結果、この国家的犯罪は表向きには終わりを告げる。

こうして触手開発レースはゆっくりしたものとなつた。先の大戦の反省もあり、開発倫理コードも作られて、戦後から現在に至るまで各種犯罪や文化的現象を除いて過激なものは身をひそめるようになる。

触手技術史もゆっくりと確実に各種仮説と実証がなされ、ナショナリズムとつかず離れずの関係を持ちつつ、研究がすすめられた。またサラたちが先駆的に示した実験考古学や民族医学の方法は先駆的なものとして評価され、触手技術史にとどまらない影響を与えた。

そういう中で、1987年のナーリーン遺跡の発見と発掘がなされる。そしてその姿ははるかに想像を超えたものであつた。その高度な触手技術は、2800年前に1930年代に発見された身体の発見をすでに認識していたのである。

この脅威の事実を、改めて説明しよう。

【再現されたアマゾネス文明の長育種触手育成法】

1987年に発掘されたナーリン遺跡は古代の情報の宝庫というべきものだつた。地方都市遺跡とその発掘からは明らかに無文字社会ではないことは判明していたとはいえ、各神殿や王宮に残された行政文章や失われた写本群の数々は重要なものである。ガンダ域アラン域では失われた写本の数々、アマゾネス人が取り扱った文物はアマゾネス文明だけでなく周辺文明の情報をももたらした。そして触手技術史においてもそれは変わりない。

1990年代より発掘されはじめたサーリハ神殿は触手学の研究の宝庫というものであつた。アマゾネス人はこの偉大な宰相とその教団によつて触手を生産していたらしく、その細やかな生産方法や記録、そして各苗床になつた女性のカルテまでも含めて厳密に管理していたらしい。その記録群はまるで近現代のカルテの先駆けというも

のであつた。

それによつて彼女たちの触手生産技術の改良と、それをどう運営したかがわかる。それを時系列によつて説明しよう。

○第一期 人畜交配法とその改良。

まずアマゾネス人が最初に手に入れた触手養殖技術は、アントニー・ナ・サラ仮説で提示したような人畜交配法によるものだつたらしい。しかもその方法はまだ洗練されたものではなく、野蛮といつていいものである。まず苗床となる女性や男性の生殖器、肛門などを輪姦、もしくは薬液で消毒保護した後に、触手のホストとなる動物と交わるのが基本作業である。この交わりをなしたのち、一定期間を置いたのち、触手下しの薬を飲むことで第一成体の触手を集め、第二成体にする。単純かつ安定した方法である。とくに乾燥域に育つガンダハラスミショクシユ目の仲間とその改良には力を発揮し、これによつて乾燥域に育つ触手が完成した。

しかしながらこれだと、当然の如く人的ソースを多く必要とされる。また多少は衛生というもののが概念があつたものの、不衛生な環境でこれらの作業が行われることも多く、感染症などで奴隸が死ぬことが多かつた。

またこの時点では、人間や役畜の胎内リズムなどは今一つ解明されていたとはいえば、下手な鉄砲数打てば当たる方式で生産されていたらしい。

したがつて敵対部族を奴隸化したり、外部から奴隸を購入したりすることでの苗床となる女性を増やすことでアマゾネス人やガンダ西北域はこの問題を対処した。

このような方法で触手生産を行つていたら、人的資源という点ではタコが自分の足を食い合うようなものである。資産をふやすために奴隸を買うのか、奴隸をふやすため資産を増やすのか、わからない状態である。

また奴隸として狩られる部族も黙つてはいない。この方式は当然ながら政治的結束をアマゾネス人にもたらすことになりし、ガンダ域

の植民都市は彼らの襲撃と防衛に努めることになる。

また当然ながら各都市各地域で改良が求められ、それらの記録と方法をサーリハやそれに先駆するガンダ植民都市の知識人によつて記載され、それらをナーリンでは写本にしている。

そしてサーリハの時代になると、直接性器をつけることなく人畜交配法をより洗練させることに成功する。アーミヤ家躍進にはこの方法を最初に独占的に成功させたことが大きかつたらしく、サーリハの宗教的権威とサーキーの軍事力、政治力をさらに増大させた。

まずサーリハが行つたのは、萩原 久やヴァーツラフ・アダミツキーが行つたように各種動物の成体リズムの把握だつた。このことにより、触手を安定して作るための母体の安全とそのリズムに合わせた交配が行われた。そしてその精度はかなり正確に、ハギワラ式のリズムにのつとつたものであつたことが、神殿の記録として残つている。

また直接性交するリスクを減らすため、サーリハはどうやら木製の管を使用したピペットを開発し、直接性器を接触することなく衛生的な人畜交配を行つたらしい。

サーリハとその周辺の人物は、他にも発明の才があつたらしい。天さがる知恵のサーアイなどと協力してこの種の道具を考案し、より安全でおかつ安定した触手生産を目指したことが、神殿の記録に残つている。

そのあと、サーリハの教団が開発したのがコンドーム法と呼ばれる方法である。これは生産性は前記に劣るものとの安全性という点では、大分考慮されたものであり、男性も触手生産に可能にしたという点で画期的なものである。

原理としては精液だまりを糞をつけた二重底にしたコンドームに動物の経血、もしくは、ピペットや触手から取り出した動物の卵子などと少量の触手塊を入れる。第一の袋と第二の袋には糞が付いており、男性器を感染症にならないために保護する。そのようなコンドームをつかつて自慰もしくは性交を行う。その後コンドームは女性もしくは動物の膣内に入れることで保温させる。一定期間すぎたら、性

交し胎内に入れる。そうして第一形態の成体が手に入り、それを集めて第二成体にして、目的に合わせた触手を手に入れる。

もつともこの方式だと男性にファイットする触手が手に入るものの、安定して作ることにはかけていた。それらの課題が残されることになる。

こうして長育種触手の安定した生産は、サーリハを中心とする女性教団の手により完成した。その秘術はかつての伝統宗教と並立する形で普及し、その教団に帰依するものによつて広まり、さらに応用技術が開発されたのだ。

○第二期長生種育成法 疑似器官法

その次に完成させたのは、後でオーク族などによつて再発見された疑似器官法と呼ばれるものである。

人畜交配法でもシヨクシユ目の品種改良は可能であつたが、とくに性器のサイズという点で限界があつた。儀礼用の人間にもファイットするサイズの動物の開発はガンダ北西部でも行われていたが、それは希少なものであり、生産を増やすとなると限界があつた。

そこで彼女たちは発想の逆転をする。人間の性器でも目的とする役畜の精液をだせるようにすればいいのではという発想をしたのである。

幸いなことにアマゾネス人たちは刺青の風習とそれから発生した魔紋技術と経絡回路の知識に——アマゾネス人は灸を利用していた——優れた民族であった。これらとガンダのアルタリ・ヴェーダなどの高度な医療知識と組み合わさることで、第二成体で人間の性器機能と目的とする役畜の睾丸をつなぎ合わせ、射精することを可能としたのである。

この技法の開発は、ガンダの自由思想家の教団とサーリハの教団と共同で行つたものらしい。この技法を使う場合の報酬の契約書がナーリン遺跡から発掘される。

またこれらの方は応用が効き、性的不能の治療や不妊治療にも使

われ、サーキーの性別を超えた存在として扱われたのも、この方式が確立したことが大きかったらしい。

その性器の立派さを称える歌詞が——本人はどう感じたのか不明なのだが——残っている。

さらに刑罰としてこの技法は応用され、任意の期間の去勢などが可能になつた。刑罰として獸姦することを義務付けたり、一定の魔法と薬品によつて一定期間科学的魔法的去勢が可能になつた。

この技術は役畜のバースコントロールにも有効である。当時はまだ自然環境に左右された畜産であつた。したがつて去勢馬だけが生き残り、他の馬は死んだ場合でもこの技術を使えば、生殖機能が再生する。現代では人間のインポテンツ回復やFtMなどの性器付与に使われることの多い技術であるが、もともとは遊牧民の死活問題にかかわる技術なのだ。

さらに肛門部周辺に魔紋を施すことや、専用の疑似器官をつけて安全かつ衛生的に性的快楽を作り出す技術もこのころに開発されたらしい。エリオット・リース・タッカーと姉のサラの実験に付き合わされた淫靡かつ悲喜劇的な記録は現在でも残つてるので、参考文献に挙げておく。

またこの技術は、魔紋術専用のインクの開発と需要の増加、各器官をつなげるスライム族の原始利用が始まつたことで可能になつたのも大きい。このことは北方域の交易をさらに重要なものとしたのも、歴史的に重要である。このことはアマゾネス文明の東域への分布を起こしたという意味でも重要なものである。

○長育種育成の活性保存　恒温槽利用とスライム族の利用の開始

さてこのような方法で作り出された長育種触手であるが、その株を増やすとなると残念ながら心もとない。乾眼形態にして保存することも可能であるが、その場合だと復活させるのに手間暇がかかつてしまう。必要に応じて触手を活性化させたままで保持する技術が求め

られた。

この点でも彼女たちは偉大な発明をなした。恒温槽方式と原始的な温度計を利用した触手保存方法を生み出したのである。

規格化された金属容器や木製の箱を作り、周囲を革もしくは金属製の箱で覆い、湯を入れることで温度調整をし、触手が育ちやすい温度と、原始的な水鉄砲や霧吹きを使って湿度を調整するという技法を編み出したのである。

今一つイメージしにくいという人がいるかもしれないが、わが国での伝統工芸である漆芸の際に必要とされる漆風呂の中に湯たんぽなどがおけるスペースがあると想像すれば、当たらずとも言えど遠からずである。わが国でも伝統的にこの方式で触手の株分けを行っていた。

この恒温槽の下には、一定の処理をされたスライムを置き、これらに触手第二成体を株分けすることで安定して触手を維持することが可能になつたのである。その際おそらくアマゾネス人は消毒の重要性をこの時点できつていった。消毒作業をしたうえで特定の薬液や血液をスライムに与え、触手が乾眠期にならないように調整したことが記録で判明している。触手育成におけるスライム利用の一番原始形態であり、彼女たちの優れた機械技術が融合して、この方法が確立したと思われる。

この方式はポリアーヌ人を経由して、各文明に伝播し基本的な技術として瞬く間に普及する。そして紀元前200年ごろに成立したローパー種による大量触手培養によつて触手技術はよりメジヤーなものになつたのだ。

とはいえたこの時点では北方エウロスにあるこのスライム種を手に入れる術を彼女たちはない。彼女たちはカスプ海のミニスライムを使つた寒天と、比較的大型のスライムを輸入することでこの技術を維持したようであり、また高度な維持技術をもつてしまつても、数本を保存することが限界だつたようである。

このような技術的優位を駆使して、彼女たちは触手を安定的に手に入れたのだ。

○これらの技術を維持するサブシステムとしてのサーリハ教団を中心とする知識人層

このような高度な知識を駆使して、アマゾネス人は触手を育成、品種改良を行い、維持した。これらの技術を維持するための人的システムがなければならない。その点で活躍したのは、ガンダ域の知識人層、特にアーミヤ家、ひいてはアマゾネス文明の王の宰相や官僚層を排出したサーリハの教団などであつた。

サーリハは巧みな宗教政策を行い、各部族のトームをガンダ域の宗教と習合させた。そのうえで低い女性の地位の改善ルートとして、この種の技術を彼女たちに通過儀礼、宗教儀式として取り入れ、安定した触手生産に成功する。

また触手自体も部族によつては——アーミヤ家も含む——神からの贈与という形で信仰されていたため、この宗教観の移行は比較的スマートに行われた。

また人畜交配法による触手は、主に女性に適合することが多く、それがアマゾネス文明を当時としては珍しい女性中心の武力勢力を作り出したといえる。そのうえ触手生産面でも女性の協力が一時期では必要であつたため、そのことも女性にさらなる権威を与えたのである。女性にそっぽ向かれたら、触手の生産すらまらないのだ。

この傾向は全体としてアマゾネス文明全盛期によつて維持され、女性中心の官僚層と武人層、さらにそのシンパの部族に担われれたのだ。

しかし100年以上その体制が続くと腐敗が始まる。そして遊牧民帝国の崩壊のパターンもこの部族が最初にとることになり、やがて西南ガンダ域からアマゾネス人は撤退する事態に陥つた。その長い没落と崩壊は次節以降、詳しく説明し、彼女たちの遺産とその現代における意義も含めて説明しよう。

【まとめの考察】

以上彼女たちの技術とその失伝、それからの再生に至る長い道のり

を経て、改めて彼女たちの高度な技術がどのようなものであったのかを説明した。

読者はその過程の長さと、一部の学者の狂氣ともいえる活動も含めて驚かれたと思う。そしてその仮説から導かれたアマゾネス人の置かれた過酷な環境とそれから脱するための努力も。

彼女たちの技術の誕生には、強制的な獸姦や輪姦というすさまじい野蛮と、その野蛮さの一部を自らのものとして引き受けて、武器にした人たちがいたというのが、これまでの記述やそこから考えられる古代の技術成立の過酷さがあつたのである。

その再発見がスキヤンダラスかつ淫靡でドラマチックであることから、つい彼女たちに興味本位で語られがちである、そして後世に再発見された、これらの技術を利用した犯罪がなかなか収まることも含めて、ついこの種の技術に批難されやすい。

しかし彼女たちがこの技術を作ったのは、その過酷な環境と運命を乗り越えるために作ったのだということは忘れてはならない。そしてそれらを防ぐために彼女たちは様々な試みをなしたのだ。彼女たちはその過酷な運命を受け、逆手に取り、女性にだけその技術を独占することで、安定した女性の地位を作り出し、性暴力など不当な暴力を守ることに成功した。彼女たちの高い技術は、より高い倫理をなすためにおこなつたのだ。

それを忘れた技術開発はかつてのガンダ域北西部の都市国家が彼女たちの先祖になしたように、大いなる野蛮を意味する。そしてそれを忘れた文明はかつての私たちの先祖であるように何度も再帰するだろう。

つい高い技術を持てば私たちはその全能感によつて、高い倫理を得たかのように勘違いすることが多い。しかし高い技術を安定的におかつ人々の幸福のために使われるには、その使用者にもおのずと高い倫理的リテラシーが必要になつてくる。

また技術というものはもうろい。彼女たちの技術は高度であれば高度であるからこそ、その維持に注意を払つてきた。そしてそれが維持することができなくなつたとき、あつさりとその技術は失伝する。

そして一度失われた技術は復活するには、場合によつては2000年以上かかることがあるのだ。

その点で、私自身は決して技術万能主義的である単純な進歩主義をとることはない。進歩は技術さえ高めれば必然的にやつてくるものではないのだ。高い倫理と高い自然科学的知識とそれを維持する諸制度が合わさつてようやく進歩というものはやつてくる。

そしてその中には過去の先祖のなしたことを見れない義務が入ってくる。触手技術が関心がある読者ならば、このことを見れないで欲しい。

私の親愛なる隣人にして、先の大戦の戦時犯罪やその賠償のための運動を担つた、触手医でもあつた大父の言葉を思い出す。

『大いなる力には大いなる責任が宿る。それから逃れるものには進歩はなく、大いなる野蛮が回帰するだろう』

10 アマゾネス文明の発展と爛熟～そして分裂と改革

【アマゾネス文明の滅亡に至るまでのまとめ】

こうしてカスプ海東岸域という地政学的条件とサーリハに代表されるようなガンダ自由思想家やその影響を受けたガンダ知識人を活用して、アマゾネス文明はアーミヤ家やその後継者にもめぐまれ、数代の繁栄を極めた。その全盛期ともなると、東部カスプ海から北西ガンダの主要な都市を占領、南部ガンダまで手を伸ばし、開発さえも行つた。

だがここにきて、あまりにもフタスタン本国域の人口で制御するのに上回る領土を手にしたため、アマゾネス文明は膨らみ過ぎた風船を維持するがごとく、四苦八苦することになった。そしてこの問題は、ガンダ圏や神苑圏や、ザウル、アラン圏に進出した遊牧民国家が繰り返し受ける問題であり、最初のケースだつた。最初の交易遊牧民国家ゆえにその歪みは盛期から数代は現れず維持はできたが、アマゾネス文明の最大の宿敵である北東ガンダ諸国群とそれを束ねるサミダリーアン王の登場により、その巧みな戦略と外交でとうとう、アマゾネス文明は南部と北部に分裂してしまう。

これらを束ねるべく何度も北アマゾネス文明は南征を行うが、補給線の長さゆえに失敗に終わることが多かつた。

その中でかつてのアマゾネス文明の自由闊達な空気は失われ、アマゾネス本国人とその従属都市国家や同盟国家群との亀裂も北部アマゾネス文明圏を中心に起こり始めた。

北部アマゾネス文明もこの問題に手をこまねいたわけではなく、最後の改革というべき宰相マンジエーの改革が行われたが、既得権益層となってしまった各教団や外戚を中心とした貴族勢力が抵抗を示した。その結果マンジエーの改革は挫折し、マンジエーとその協力者は肅清に会うかもしくは国外に亡命せざるえなかつた。

そうした人材を使ってかつてのアマゾネス文明のように、勢力を伸

ばした国家があつた。アルジャニス朝ザウルである。おそらくナーリーンで教育を受けたザーレーを宰相兼大神官として迎えたアルジャニス王は富国強兵策をとり、かつてのアラン文明域の諸国を征服、帰順させた。この古くからの同盟国家を救うべく、北朝アマゾネスは東部ガンダ諸国の妨害に苦しみながらもアルジャニス朝と勝負に出る。

しかしザーレーとその神官たちは、対アマゾネス軍の対抗戦術を完成させていた。それにより北朝アマゾネスは軍事的に大打撃をこうむつた。もはや彼女たちは、その膨らみ過ぎた領土を維持することはできなくなつた。フタスタン本土を守るために北西ガンダから一部の都市国家を除いて撤退を行い、北朝はフタスタンだけの領土となつた。

この状態のまま半ば属国に近い形でアルジャニス朝ザウルと同盟を結び、一地方王権として長くフタスタンの地にとどまることになる。

また踏んだり蹴つたりというべきか、このころナーリンの地に大地震と各種パンデミックが襲い、首都は壊滅状態になつた。そしてその10数年後、その傷が回復するか否かのところ北朝はリツセンドル大王の東征に遭遇し、幾らかの戦いを行つた。多少は勝つたものの、最終的には敗れることになり、政治的なアマゾネス文明はここに滅亡するのである。

以上が簡単なアマゾネス文明の滅亡までの流れである。古代遊牧民国家としては比較的安定した国家体制だつたとはいえ、結局強大な文明も崩壊するときは崩壊するのである。

この章では、アマゾネス文明の繁栄からその分裂までを説明し、どのような脆弱なポイントがあつたのかを含めて、その歴史を追つて説明しよう。そしてこの崩壊パターンは各遊牧民国家の崩壊の原型ともいるべきものであり、後世の歴史を理解するのにも役立つはずである。

初代アマゾネス文明の創始者であるアーミヤ家とその集団は先の節で説明したように、その高い戦闘力と様々な技術革新、多くの人材を登用して、フタスタン地方の霸者となつた。またその技術は食糧増産技術を増し、フタスタン域の開発と人口を増やし、一大強国へとフタスタン域を変えた。

また彼女たちは自分たちの戦闘を弱まつてゐる奴隸の解放を大義名分として、戦つたことで支持を集めめた。この方法はガンダ諸都市や有力遊牧民による奴隸狩りに会う弱小部族や集落の支持と保護を集めたのだ。アーミヤ家躍進にはこのような背景があつたという。

しかしそれは母体ガンダ諸都市との対立を意味する。そこで彼女はサーリハの進言によつて、没落ガンダ都市の復興を掲げて、対立する諸都市に協力を求める。このようにしてガンダ諸都市や領域国家の紛争に介入し始めた。そしてその復興がなされた暁には、自分たちの息がかかつた指導者と、交易ルートの優先的使用を求めたのはいうまでもない。

かくしてフタスタンの軍事力の利用したいガンダ諸国の中をアマゾネス人たちは狡猾に立ち回り、どんどんヘゲモニーを握り始める。さらにサーリハの教団が女性保護などを行い、ガンダ域の宗教にも影響を与えて始めて、奴隸解放や金融業による経済的介入、開発を行うことで既存勢力の力をそぎ始める。そしてそれで紛争がおこれば、真っ先にアーミヤ家がやってくるという寸法である。

次第に北西部ガンダ諸国の中にもアマゾネス人やアーミヤ家に保護を求める者たちが増え始めた。このことに危機を覚えたガンダ北西部諸国は同盟を結び、対抗し始める。人海戦術的な戦いで、圧倒しようと考えた。そこで行つたのが、アグランの戦いであつた。

●アグランの戦い

アグランは北西部ガンダの現在でもある都市である。そこを襲撃すると、フタスタン域の交易ルートを遮断することになる。そこなら確実にフタスタン勢を釣ることができるので。

だがそれはアマゾネス人の掌の上のことだつた。わざとアグラン周辺をがら空きにし、巧みな偽装敗走で終結した同盟軍をつり出し、それらを各個撃破した。最終的にはアグランにたどり着いた同盟軍は半数近くまで——それでもアマゾネス人よりも多かつた——減らした。

正面から対峙した同盟軍をアマゾネス人は翻弄し、同盟軍の大戦車群を圧倒する。とくに彼女たちの使つた投槍と触手弓の前には、射程距離と威力もあいまつて同盟軍は壊滅状態に陥り、敗走する。そして帰還後もアマゾネスの分隊や彼女たちの同盟都市群が襲い掛かり、かくして同盟軍の兵は10人に一人しか故郷に帰ることができないという結果に終わつたのである。もつともこの戦いで負傷したサーキー女王はフタスタンに帰らざる得ず、次期後継者であるオタカリにガンダ北西部の侵攻を任せることにした。

こうしてガンダ北西部の霸者としてアマゾネスたちは君臨しはじめた。その勢いは8代王アイ Yun の時代まで続き、そして北東ガンダ諸国の霸者サミダリーライー賢王の登場までとどまることがなかつた。

【ガンダ西部の霸者として～南部ガンダ進出と開発】

アマゾネス文明は、霸者となつた。当時としては画期的な触手騎馬弓兵は、ガンダの戦術を確実に超え、フタスタンや外国人奴隸獲得に励む北西部国家群を滅ぼした。アマゾネス文明は2代目以降になつても、3代王レイマーネー、4代女王アンタルシーと名君が続き右肩上がりの成長の時代が続いた。

この頃の記録は税収と各部族からの貢納金、王領からの税収など王族は莫大な資金を誇り、アラン文明からの金融資本からくるキャラバンの利益と農地資産は膨大なものであつた。

これらの権益をめぐつてもとの宗主国である王族バイアーンと対立することが多くなり、襲撃を何度も受ける。しかし国境域にできた要塞群や城塞都市で守られたアマゾネス文明が作つた植民都市を攻略することは難しく、逆にバイアーンは本土にまで攻め込まれたその結果、アマゾネス文明とバイアーンは対等であることを示す条約を示し、相互不可侵を取ることになった。

同じ騎馬民族でも止められないアマゾネス文明はもはや敵となるところは、ほとんどなかつた。しかも先に示したように、彼女たちは決して野蛮人ではない。人口差の問題があるため、基本現地での慣習法を優先しながらも上位法では彼女たちに重要な決定をなすという、そのような法的支配を行つた。

また基本農耕民族に対しては定期的な賦役や税を課すことをあつても、軍事的賦役は成長期、全盛期では課すことがなかつた。それに支配した層からの志願兵を得る方法を巧みに作り、それらと地元の軍事貴族を対立させることで付け入るスキを作らせなかつた。

●アマゾネス帝国の拡大

先に述べた資金力と王の親衛隊とサレイシア信仰を中心とした僧兵団の兵力は、ガンダ北当部各国の各國を擊退しつつ、4代アンタルシーゴロから始まつた南部ガンダ植民を行い始める。

この事実は断片的に、19世紀より発見されていたアマゾネス文明の影響を受けた碑文からわかっていた。だがその詳しい内容は、2011年テルジヤミット碑文の発見によつてあきらかになつた。この碑文はもともとはガンダ南部海岸部にあつたものらしく、古代の津波で流された碑文である。先のガンダ洋大津波の復興の最中に発見された。

この碑文の内容は多岐にわたるが、次のような内容である。

(1) アマゾネス文明の親衛隊になつたガンダ兵とサレイシアの僧兵一団がおそらく海岸域の地域の周辺に土地を賜つた事実と植民都

市建設のスポンサーである王とアマゾネス文明の貴族層への感謝

(2) 無事交易と土地開発が実り、金主への借金を返せたことの神への記念して作ったものである、そのうえで子孫に對して王族や貴族に義務を果たすことを誓う。

(3) それに続いて、オーク族にたいする記述がある。南ガンドから大ガンドを中心に交易を行つてゐる海洋民族オーカーたちは彼女たちの同盟者として書かれてあり、宿敵の北東部域のガンド諸国に共同してあたることを誓つてゐる。

この碑文が重要なのは、石碑が比較的初期入植者のアマゾネス文明が作られたこと、オーカー族が彼女たちと重要な同盟を結んだこと、その事実まで書かれていることにある。このことからアマゾネス文明以外の歴史をしるためにも重要である。

おそらくアマゾネス文明が南部ガンドへの移動と植民の開始は、慣れぬ海岸圏にまで至つた。そのうえで領土の防衛とそのノウハウを学ぶために始まつた。やがて全盛期から爛熟期になると海上交易の権益を得るためと開発のためより積極的になつたと考えられる。

さらに4代王～5代王あたりになると、ラクダとヤツクルの家畜化に成功した。このフタスタン域産の家畜は南部ガンドの砂漠域を乗り越えることができ、各地にキャラバン都市とガンド特有の土木建築も相まって、南ガンドの人間の生存圏を広めた。これらを南ガンド諸国に貸し与え運用させることで、新しい交易ルートを作り出したのだ。

これらのルートは交易面だけでなく、軍事的にも重要であった。海路ではオーカー族によつて北東部諸国群へ侵攻を行う。陸路では南部ガンド砂漠域を突破して襲撃を行う。このように相手の国力を低下させるゲリラ的戦術を取つて、敵対国に向かつたのだ。

散発的に発生する各地域の小規模紛争を除けば、相対的に平和な時代が5代～8代王の50～60年の間続く。南部ではこの治世を神話化され、女神サレイシアとアンマーの楽園と呼ばれ、豊かで暮らし向きがあり、次々と都市が作られていた。人と美しき半魔は交わり、

新しき英雄を次々産んだともいわれている。

このようにアマゾネス文明は最盛期を迎えた。不毛な砂漠地を含んでいるとはいえ、その大帝国はほぼガンダ亜大陸を二分し、このままガンダ亜大陸を統一するかのように見えた。だが神苑圏の言葉にあるように、亢龍悔いありである。様々な内的要因と矛盾を絶頂期の頃から問題になり始める。

【繁栄の陰り——サミダリーピークの暗躍とアマゾネス文明の分裂】

●ガンダ地図 チンジエー国

各種技術と戦術に裏打ちされ、しかも広大な領土を持つアマゾネス文明は、一見ガンダやザウルとの優位を崩しそうに見えなかつた。まるで、かつての触手技術を独占したガンダ文明のように。全盛期のアマゾネス文明だつたが、10代、11代、12代と短命な選挙王政が続くことになり、この時期から統治に綻びが出始める。

この短命な王朝を支えるべく、急遽外戚家と各種僧兵団の協力が求められ、これまで以上に特権が認められ、一時の政治的安定をもたらした。

とはいものの、アマゾネス帝国内部に領土拡大派と安定派という対立がこのころから出始める。このアマゾネス文明の国家戦略の方向性の対立は、激化はじめ、かつてあつたような王家と貴族と僧兵团の連携を崩し始め、首尾一貫した国家戦略が取れなくなつた。

外敵に関してはそそここ連携をとれ対応こそできたものの、それ以上の侵攻となると対立が生じた。そして、12代のころには各地域で派閥をたがえた集落同士で紛争が起こり始めた。

そのような内乱時にいよいよ東ガンダの霸者ともいすべきサミダリーピークが登場する。

サミダリーピークの業績は、半ば神格、神話化されている。だがそれらを抜き取つてもまさに英雄としか姿を見ることができる。

サミダリーアンは北東部ガンダ海岸域の中規模の領域国家チンドジエーの人である。ハクロウン王の三男として産まれ、大ガンダ域の諸国と交易路を開きつつ、植民都市とも交易し、海軍を駆使した戦術をそこで学ぶ。

だが兄ハクロウン二世のアマゾネス文明との戦いで戦死を受けて、チンドジエー王に即位する。そこで優れた技術者ヨオウ・バーリー、植民都市から引き抜いた将軍職ティ・トックー、武将クロノイ・シグウルドラー・ポイイーなどの人材を集め、富国強兵に勤しむ。

巧みな外交策でアマゾネス文明とは直接対峙することはせず、オーク族の重要な拠点地であるランビア島を攻略し、そこから南部アマゾネス同盟国や諸国家を攻めることで勢力を弱めさせる戦略にする。

後には、主要なオーケ族を屈服させたのち、優れた航海術で陸路を使わずにザウル諸国にたどり着き、彼らとの秘密同盟に成功する。その巧みな弁舌は後代に成立した宗教詩にも引用されるほどである。

またヨオウラ技術者集団は船団建築だけでなく、馬具改革と短触手による騎馬技術をも確立し、これらを船に乗せ、海軍を利用したゲリラ戦を行う。

かくしてアマゾネス文明とその同盟国は混乱に陥る。また大将軍であるティ・トックーは、防諜にもすぐれ、アマゾネス文明本国の敵対する派閥に金を分け与え、対立を煽るという謀略も行つたらしい。国力弱体化したとはいえ、ようやくチンドジエー国の存在と東部ガンダ諸国の同盟の存在に気づいたアマゾネスたちは、東部ガンダ諸国同盟軍とカンブーあたりで大規模な戦いを行う。

戦いは長引き、ほぼ互角で両者引き分けだと思われた。何も得ることなく、フタスタンへ帰ったアマゾネス軍は衝撃の事実を受け取る。南部諸国家のいくつかの同盟国が反旗を翻し、その他同盟国を滅ぼし始めたのだ。これらへの対応を迫る連絡が次々と舞い込んだ。

こうしてアマゾネス本国はアマゾネス系南ガンダ諸国という国々が現れ、ほぼ南北に国家が分裂してしまった。戦略面で見えた実質サミダリーの圧勝であつた。

このような事態になつたのも、アマゾネス文明の人口に対しても、ガ

ンダ域の人口の差というのが原因であった。

というのも飴と鞭とガンダで取り込んだとはいえ、南部ガンダを中心に有力部族は定住社会に逆に取り込まれ始める、またそれは、植民元の部族の利害関係にも影響を与える。これはアマゾネス文明の人口の絶対量のたりなさから仕がないことであつた。そして植民地での協力の元、彼らを支配する以上、各部族は既存の有力層からの影響を各部族は受けざるを得ない。

そのうえ時代が立つにつれて、ガンダ文明は、アマゾネスの安定した平和の元で、かつての中間層が担いはじめ、かつてのガンダ社会とは違った形で再編しはじめた。彼らはアマゾネス族を新しい神話に取り込むことに成功し、南部ガンダ社会の中にアマゾネス文明を取り込み始めた。

こうしてアマゾネス文明の没落が決定的になり始めたのである。そして彼女たちはそれに対応すべく苦闘する。その最後の輝きがサレウの改革となる。

〔内部改革の試み——サレウ＝マンジエーの改革〕

サミダリーアン王以来、南北に分裂したアマゾネス文明は13～17代の間、より激しさの増した外征派と内政派の対立の記録がナーリン遺跡から判明する。外征に至るリスト、少なくなつた王領の収入を嘆くメモ、各教団の僧兵の私闘などの裁判記録などが発掘されている。

それでもなんとか北部アマゾネス文明は——フタスタンと一部北西ガンダ域のを領土とする——南部を取り戻そうとする動きを止めることはなかつた。

しかし平和の間に人口が増えたフタスタンといえども、それ以上の人口を持つガンダ域の諸国に押され始める。ヤクティス経由でのルートや王族パイアーンを撃退する程度の勢力は持っていたものの、もはやかつての勢いは彼女たちはもたなくなつた。

13～17代の間、北東部ガンダの諸国攻撃と南部ガンダとの領地回復などを繰り返し、領土を取つたり取られたりが続く年月だつた。

当然それらは全く負担がないというわけではないのは、当然である。王領や植民都市からの税収の低下、貴族層となつた大部族、僧兵を擁する教団、それらの利害調整をしながら戦争をするため、結果として下のほうに負担がかかる形になつてきた。勃興期から絶頂期のような成長サイクルはもはや望めない。

かつての体制とは別の組織構造を作る必要に、北朝アマゾネス文明は迫られた。かつての遊牧民主体ではない形での軍制と中央集権化が望まれる。

そして18代王サーキー三世の時代に、この難しい課題に宰相サレウ・マンジエーは挑むことになる。

サレウ・マンジエーはサーリハとサレイサの大神官を兼ねた人物である。アマゾネス文明の屈指の知識人であり、その知恵は17代王の頃から知られていたようである。主要な教団のリーダーであることを利用しつつ、反発する層を半ば強圧的に鎮圧しながらも次のように面で改革を行つたとされる。

その改革はアマゾネス文明史の専門家でも諸説あるが、共通した見解に基づいてまとめれば次のとおりである

- (1) 農業先進地帯や定住先進地帯の外国人知識人層の活用——アラン域を中心に
 - (2) 法兵の育成を僧院に依存するのではなく、最終的に人事権を国家に帰属させる
 - (3) 触手技術に頼らぬ方法を模索
 - (4) 税制改革、貨幣改革など
 - (5) 農民層にも徵兵開始、貴族層の各種徵税。
 - (6) 各種再分配組織の再編成
- もはや遊牧民主導というより半ば定住民の王国のそれと変わらなくなってきたのがわかる。戦乱に続くアマゾネス文明知的ヘゴモニーの低下と悪しき保守化、そして新たな知識への道を探り、活用した上で、既存の強さに依存しない戦術を可能にする改革をメインに定住民族にも相応の負担をとり、それに対応した軍制の作り替えがなされている。

それと同時に安定した中央集権化したうえでのそれらを支配、被支配層双方のメリットのある形での利益還元を行う。大体このようない改革であつたであろう。

この兵制改革と中央集権化は一時期は成功し、サーキー三世の新たな軍隊は、対ガンダの戦争にも勝率を徐々にあがりつつあつた。

しかしこの改革は、サレウと18代サーキー三世王の協力があるからこそ成り立つものであつた。もしこの改革を安定したものとするならば、一時期とはいえ部族会議を閉鎖したうえで改革しなくてはならなかつたかもしれない。つまり改革の基盤は脆かつたのである

そしてサーキー三世の治世が病死によつて終わりを告げると、かつての既得権益層は黙つてこの事態を逃すわけがなかつた。

サーキー三世の改革に反発するアマゾネス中心派とも言うべき一派は、これ以前より外戚を出していたジワラーン家を中心に集つていたらしい。

ジワラーン家はかつての王族ポリアーヌを撃退したアーミヤ家の將軍の血筋である。7—8代王の同時代であるクシヤン＝ジワラーンの頃に、2代続けて選挙王の王后や配尊者（女王のパートナー）を出していた。そのため歴代のキングメーカーとして、君臨し、息子たちも大将軍として配置などしつつ力を持つていた。とはいへ、基本的に勢力面では古くから対バイアーン域の守護を担つていたため、安定的してその地位にあつたことも勢力拡大を可能にした。

とはいへ先代ジワラーン当主も、基本的にマンジエの改革には賛成していたため、軋轢は少なかつたため、サレウの改革は安定して進めることができた。

だが、徐々に権威を失い、負担が増えたジワラーン家若手やその他有力貴族家は、サレウによつて強化された王族のあり方に反発を持つていた。そしてサレウの教団以外の僧兵も魔法兵養成などに反発しきれらと合流することになる。

そして先代ジワラーンが亡くなり、フトゥニー＝ジワランが当主になると、あきらかに王族への反抗をみせはじめたらしい。

そしてサーキー三世の死にその憤懣が爆発する。この辺の記述は、

後世のザーレー教の記録とナーリンの記録から類推するほかはないのだが、どうやら王の死を見舞うところをサレウは襲撃され暗殺されたらしい、その後どの王の擁立するかで、対立が発生し、内乱が首都圏を中心に勃発する。

サレウ自身もサーリハとサレイスーの大司祭兼宰相であり、武力面でも僧兵を握つてはいたが、ジワラーンとその他の勢力が団結して攻めてくるのに対抗できるほどではなかつた。

当時ナーリンに留学していたらしい後のザーレー教の始祖であるザーレーは、おそらくサレウ派に属していたと思われる自分の師匠ともども、この内乱に巻き込まれた。アマゾネス人の友人ともども故郷のザウルに逃げるしかなかつた。

こうしてアマゾネス文明は改革の芽を自分でつぶした。また内乱の傷も大きく、その傷をいやすための時間が必要とし、短命な選挙王ができてはリコールされた。混乱の回復に必要とは言え、貴重な時間が費やされてしまつた。

だがそのような時間の中で一つの国が勃興しつつあつた、それはサレウやそれに連なる師匠の無念を引き継いだザーレーと、一人の王の出会いによつて起こされた。それが次世代の霸者、アランとザウル域にまたがる大帝国アルジヤニス朝ザウルの誕生である。

彼らの戦術は、皮肉にもまさしくサレウが目指した最終系の軍隊のあり方を完成させ、アマゾネス朝に対して牙をむいたのである。次の節での説明をしよう。

11 アルジャニス朝の魔法軍事革命と政治的アマゾネス文明の崩壊

「アマゾネス帝国からアルジャニス朝ザウル帝国へ、そしてアマゾネス文明の滅亡」

アマゾネス文明はゆっくりとした没落をしつつ、その領土を維持することができなくなつた。特にサミダリーアイー賢王の登場によつてそれは加速し、とうとうアマゾネス文明は南北に分裂するまでに至つた。

そのうち南部アマゾネスは諸国に分裂し、東部ガンダ諸国や北アマゾネスの干渉を受けながらも、独特の文化と文明を作り上げていく。それらの文化的アイデンティティは後世にも影響を与えるのだが、それは後にゆずる。ただ北西部と南部に影響を及ぼすアマゾネス帝国はここにきて、はつきりと没落の道へと行くことになつた。

無論、それを対抗すべく北アマゾネスはサレウ・マンジエーの元、定住民の取り込みや触手弓騎兵に頼り切らぬ軍制改革、内政改革をおこなつたが、それはもはや遅きに失した。

その結果さらなる混乱を北アマゾネス朝にもたらすことになり、その隙を諸国が見逃すことなく、内政と軍事改革に励み、皮肉にもサレウ・マンジエーがおそらく描いていたヴィジョンを完成させる。それを最初に完成したのが、アラン域ザウル域を完全統一した帝国、アルジャニス朝ザウルである。

この帝国はグラムス・レムネー文明最大の敵であり、後のリツセンドル大王の東征によつて滅亡する。知名度のわりには、アマゾネス文明同様はつきりしなかつた。しかもその実像を探るには、後世まで残つたグラムス・レムネー文明の文献に頼らざるを得ないため、エウロスにおいてそれらで書かれる東方の専制国家像で語られることが多かつたからである。

しかし19世紀半ばに発見されたタルニシュ碑文や、その他金石文解析から始まる彼らの研究、ガンダに移住したザーレー教徒の子孫の文献と口碑の調査は、エウロス伝統的な見方を徐々に変更されてい

く。

さらに王都アシュマドの発掘と各種文書群の発見、グラムス文献やアザーニー系文献などの再解釈や研究によつても更新され、そしてナーリン遺跡の文書群の発掘などにより、その成立時の姿を改めてみることが可能になった。更新された彼らの姿は初步的な体系的な魔法を駆使した帝国の姿である。それは新しい定住民帝国の形に新たなパターンを作り、宗教面でも、触手技術史の面でも興味深い存在だつたことが判明する。

この節では、アルジヤニス帝国の成立と、彼らが作りだした軍事革命はどのようなものであつたのか、北アマゾネスの崩壊と政治的独立の喪失に至つたマルタブルの戦いとタルニシュ碑文に示された、北アマゾネス朝の地方王権に至るまでの過程を通じて説明したい。

【アマゾネス文明とザウル圏の文明の関係】

アマゾネス文明に大きなダメージを後に与えたザウルは、初期アマゾネス文明同様にあまり恵まれた国ではなかつた。

ガングダ文明圏とアラン文明圏を結ぶルート、そしてアマゾネス文明やパイアーン文明や彼女たちに開発された北方交易ルートのアラン文明を結ぶ道があるという以外は当時は目立つたところのないところである。

ただアマゾネス文明が基本遊牧民が定住民を飲み込んだ上で、彼らを巧みに統治をした文明形態をとつたのに対して、ザウル文明はカソプ海南部の平原域を活動範囲として持つていたこと、そして山岳移動で遊牧民の技術が必要であつたことから、平原民が遊牧民の文化を取り込む形で発展したというのが、アマゾネス文明との差異を産んでいる。また侵略や植民という形でより強くアラン文明の影響下にあつたのもこの文明圏の特徴である。アマゾネス文明と似て非なる文明、それがザウル文化圏である。

とはいえるアマゾネス文明が産まれるまでは、小さな領域国家ができることもあつたが、アラン文明、後にはアマゾネス文明が加わり、ザ

ウル圏の国同士が長く争う関係が長く続いたのが、アマゾネス文明があつたころのザウルという状態であつた。

しかしアマゾネスの平和や、アラン文明が各種文明勢力に押されて相対的にザウルへの影響力が弱まり始めると、一気に複数の領域国家が作られる。

また彼らはアマゾネス文明やアラン文明に人材を使わし、留学させることで富国強兵の道を取り始める。彼ら自身の文明を開発するためにも先進地帯の文明やまた交易のための世界情勢を知るためにも、これらの活動は有効だつたからである。

そうした中で、新しい知識人と宗教的要請が産まれ、それらにこたえる知識人も必要とされる。彼らが受けとつた技術は多岐にわたる。

まずアラン文明からは高度な経済運営と金融知識、発展させた魔法と、その応用である各種農業技術と冶金技術などを受け取った。アラン文明はザウル圏の資源と交易ルートを得るためにザウル域に干渉していくからである。こうしてザウル文明は徐々にその技術を受け取り、理解した後、留学という形で体系化して学び始める。またザウル人は文字もアラン文明の楔形文字を発展させた独特の文字を使い始めたのも、この動きを加速させた。

そしてアマゾネス文明からは、乾燥地に適合した作物や触手技術、さらに畜力や水力を利用した各種器具や機械を受け取った。アマゾネス文明では畜力中心であつたが、彼らは主に水力を利用し始め、安定した動力源で各種建築や鉱山運営を行い始めたのである。特に原始的なクランク利用と馬車の改良、アラン文明の技術も入れた触手技術は本家アマゾネス文明を超えてはじめ、最終的に彼女たちの文明にどめを刺すに至つたが、それは後述しよう。またアマゾネス文明の高度な人文知識は、彼らの後の代に成立する世界帝国を作るのにも役立ち、分割統治を可能にしたことも付け加えておこう。

再編された国々はもはやかつてのように他の文明に従属するような関係でなくなつた。そしてザウルの山がちな地形——新規造山活動と古期造山地帯に入り乱れた地形——に由来する鉱物資源の種類と量の豊富さと、各種文明から来た機械や技術革新を受けとり、それ

らをさらに発展させることで富国強兵の道を邁進する。まずはこれらの資源をアランやアマゾネスの文明に売り込むことで、これまでの従属的な立場から脱却した。各文明圏で長引く戦争は、ザウルの傭兵や鉱物資源を必要とせざる得なかつたのである。

そうして得た富をさらに投資し、長大な地下水路工事による農業地帯の拡大、山間域の開発をおこし、さらなる繁栄をザウルにもたらし、各領域国家を繁栄させた。平和的であれ戦争という手段であれ、国々が合体することでさらなる開発を加速させる。

その結果アマゾネス文明衰退期のころになると数か国の領域国家にまで減少し、それぞれが強大な勢力になりつつあつた。そのなかに、ザウル文明の最終形態を作り出すアルジヤニス家によるパルス国があつた。そしてザーレーというこの時代最大の知識人の登場で、この国の霸権が固まつた。

ザーレーと彼が作つたザーレー教は、その教義は後代の宗教にも影響を与えたが、ここでは詳しく触れない。ただザウル各地に散らばつて発達していた宗教と魔法をさらに体系化したという点で、彼は魔術技術者、軍事技術者として宗教改革者として歩んだ。そして故郷のパルス国の改革を成功させ、最終的にアルジヤニス家によるアランとザウルの統一に成功したことで宗教的権威も絶頂に達した。

彼の行動もまたサーリハ同様、後世に半ば神格化され、その実像はなかなか見えない。しかし歴史的人物であつたことも確かであり、口碑や後世成立したザーレー教の文献、アザーニー群を比較検討して、その実像も見え始めた。

このような作業を経て現れた歴史上の彼は、自分の信念と信仰を作りながらも、柔軟に他国の文明を取り入れ、異邦人にもその徳と知恵の豊かさを慕われる人物である。そして故郷を愛する気持ちが強い彼は、迫害にも耐えて忍耐強く王や人々に諫言し、丁寧に説明したうえで、他者に間違いを悟らせる一級の教師であり、宰相であつた姿である。

彼がいなくてもザウルは統一され、强国にはなつたとは私には思われる。しかしながらアルジヤニス朝を世界帝国にしたのはまさしく彼や後

繼者の手腕と人徳によるものであろう。

このような彼も、最初からその知恵を得たのではなく、手本となる人物を通じて完成させたらしい。最近アシュマドで発掘された一番古い形で現れたザーレー伝の叙事詩によつて歌われた彼は、アマゾネス文明のサレウリマンジエーの改革を直に見てきた可能性が高く、その挫折が彼をして宗教的な苦悩をもたらし、そして新たな宗教へと導かせた。

以下この政治的にも宗教的にも劇的な、ザーレーの生涯を通じて、アマゾネス文明の没落とそしてザウルの勃興を見てみよう。

【ザーレーとサレウリマンジエーの改革】

●ザーレー生存時のザウル周辺とフタスタン地図

ザーレーこと、ザーレー＝スピーダーンは紀元前600～610年ごろザウル北部、カスプ海南部の港町ラシユピーン近郊で生まれた。この地は古くからアルジャニス家のパルス国が支配しており、戦略的にも重要な都市であった。

スピーダーン家はその中の神官階級であり、そのための専門教育を受けることになった。彼は記憶力と語学的センス、読書家であつたらしく、アザーニーでも“八思いのザーレー”、“耳あまたあるザーレー”、“板書を事解くもの”というぐらい、知的早熟なものであり、好奇心旺盛であつたらしい。

やがて“新たなる神々の技”を知るべく20才になると、賢者集えるナルンの地すなわちナーリンへと旅することになったという。

様々な困難を経て、大いなるナルンの地で基礎的なものを改めて学びなおしたのち、最終的にナルンの語られざる女賢者ティティネーという師と決定的な出会いをし、その門下に入った。

発掘されたザーレー伝によると、

かの賢者 正しき道に 至れども

過つ人は まことの姿ぞ 悟らざる

それゆえ人は かの女賢を 語らずと

ああかの人を 知るは大神 アーメル＝マツト
はたまた神に 導かれたる 良き友か”

どうたわれている。

この叙事詩から見た当時のアマゾネス文明の知的状況は、首都ナーリンは知的センターの地位を失つていなかつたものの、かつてのような外国人知識人をも活用するような時代はすぎ、悪い意味での保守化が進んでいたらしい。

このことは発掘されたナーリン遺跡の神殿や知恵の館のリストからも裏付けられている。勃興期から全盛期のこれらのリストには、サレイシア教団や自由思想家たちの教団の構成員にはアマゾネス文明の子弟だけでなくガンダ文明やザウル、アランなど各地からならではの人名が記載されていることが多い。

だが8代女王あたりからは外国人留学生の知恵の館の報告者や、各教団の外国人雇用枠が少なくなつてくる。この時代は平和で拡大することが可能にも関わらずである。そして11から12代目になると、各教団幹部はサレイシアやアーメルなどの一部を除いてアマゾネス人や帰化したガンダ人などしかならなくなつたりする傾向が続いた。

そして各技術の権益を守るべく、各宗派は些末なことで分派することが多かった。

この知的退廃と停滞を嘆く歌もサーリハ教団は残しており、
ふるきガンダの 一つ衣の 灰を食べ
すごせる 炎の熱さ いづこにか？

火の末裔たちが あがめるは 炎にあらず
灰と炭のみ いたずらに 集め遊べる
麦とキビは どちらが勝るか 知ることは
貧しき人の 時にあわねば 何になる？

自由闊達であつたかつての空氣をしのび、ライバルの教団の体たらくを告発している。

話を戻すが、当時のガンダのマイナーな知識神アーメルの司祭にして魔法学者ティティネスとの出会いは、それまで個別的だつたザーレーの知識を体系化し、より深い解釈をもたらしたらしい。それは彼にとってアラン魔術とガンダ魔術の融合をもたらした。そのうえで医学など各種知識を学び、より知識を深めていた。

そういう充実した日々の中、マンジエーの改革に出会う。

マンジエーの改革は外国人留学生にも福音だつた。彼らは知識を学ぶだけでなく、より積極的にアマゾネス王とも接触し、その技術を生かしたり、アマゾネス人と交流を深めた。そしてザーレーも二人の妻を、この地で娶ることになつたのだ。

また師の兄であるペニサネはアーメルの神官だけでなく、マンジエーに抜擢された文官でもあつたらしい。そのこともマンジエーの改革をより詳しくザーレーはつぶさに見ることができ、そして二人に協力した。その日々を彼はこう歌つた。

塔の高さの 文読む日々を 見るたびに
数多見聞きし 知恵持つ人の まつりごと
そのふかきこと アーメル知らざる 我が身には
小さき枠で カスプの水を 計るかごとき
されとて海の 慈悲と恵みで 導くは
アフルの言葉 それを読み解く あまたの師

ザーレーは多忙で充実した経験と師の家族との有効な関係を結んだ。そしてかつてのアマゾネス文明の外国人のように、出世もあり得たかと思われた。マンジエーはザウルとの協調路線をとつていたため、このまま改革が続けばそれもあり得ただろう。

だがジワラーンのクーデターによつて、状況は一変する。マンジエーは暗殺され、その協力者も私刑かさもなくば捕らえられる事態に発展した。“終わりの日とは かくのごときか”とザーレーをして言わせるほどの日々だつた。

また師の家族もこの動乱に巻き込まれた。留学生や新興技術者を守りつつ、ティティネーは最愛の兄を探し、敵対勢力に捕らえられた

のである。ザーレーと仲間は決死の覚悟で師を救出するが、拷問などの結果、彼女は瀕死であった。そしてティティネーは死の間際に、各種秘伝と隠してあつた書の場所をザーレーに教え、死去した。

もはやザーレーとその仲間たちにナーリーンの地に留まる理由はなかつた。留学生仲間と救えるだけのアーメル信徒を導き、苦難と冒険の末に、ナーリーンから故郷ラシュピーンへと帰国した。

帰国後のザーレーは沈み込むことが多く、師の運命をめぐる様々な考察を重ねた末、アーメルと地元の神を習合させたアフル・マードという神格の存在を確信するに至つた。そして悪しき力によつて神々は堕落したがゆえに、正しき知識を持つた神々はその迷いを解きほぐす義務を持つという普遍主義的善惡二元論とガンダやアマゾネス文明そしてシンクレティズムに基づく教義を確立し、その教えを弟子や友人に説き始める。

教義ができるまで、最低限の医療活動などを別として、彼は世俗の誘いを断つていた。だが教義とそれに伴う魔法技術の体系化に完成すると、改めてアルジヤニス家の宰相に就任し、その知識と経験を生かして、アルジヤニス家の霸道の手助けするに至つた。

〔アルジヤニス朝ザウルと北アマゾネス文明の対決——ムルタブルの戦い〕

アルジヤニス家が支配するパルスは元々は、カスプ海南部平原域を支配する王国であつた。ザウル諸国の戦乱の中で台頭し、国を占領、吸収しやがてザウル湾南岸まで達する南北に長く伸びた国へと発達する。

そして海岸に達したころに、チンジエー国の船団と接触し、直接ガンダ東部と外交的接触に成功する。このアマゾネスを介さぬ仲介交易は、この国に交易面でも優位をもたらし、ザウル統一の原動力となつた。

そのうえで、北アマゾネス文明の改革を見てきたザーレーとその仲間たちを迎えたことで強国への道へとひた走り、アラン文明の後

ろ盾を持つ当時の強国であつたセレウン国を圧倒し始める。そして前550年、セレウン国を滅ぼし、ザウル統一をなす。この国の誕生によつて、はじめてザウルという地域は政治的にも統一されたものとなつた。

このザウル統一を可能にしたアルジヤニス朝の軍事はどのようなものであつたろうか？

まず彼らの戦術は、魔法兵と王の道と呼ばれる高速軍事道路を駆使したもので、当時改良された4輪馬車を使うことで歩兵の高速動員と騎馬兵を展開したものである。

馬具もこのころから改良され、鞍やハーネスをメインとして長育種触手を補助とする騎馬隊もこのころから現れ始めた。また既存の権益から外れたアマゾネスたちの協力を得て、馬の扶助技術も改良され、アマゾネス文明ほどでなくとも周辺国を脅かす騎馬技術をアルジヤニス朝は手に入れた。

しかしながらアルジヤニス朝の軍隊を特徴づけたのは、ザーレーによつて改良された魔法軍である。かれの魔法体系は、より強力かつ簡便に身体や武器を強化することができた。そのため軍事面での魔法については呪術に近かつた他の国々を圧倒したのである。

ザウルの金属加工技術もザーレーの技術の恩恵を被ることになり、魔法彫金技術をより一層発展、応用させた武器、防具が作られた。

このように歩兵、魔法兵をメインにしつつ、補助的に馬術を応用したのが、アルジヤニス朝ザウルの基本戦術であつた。とくに高度な魔法兵は歩兵と騎馬兵の戦術を柔軟にしただけでなく、工兵技術も高速化した。

それに加えて、触手技術においてもザーレーは改良を行つた。交易と改造を通じて、アマゾネス文明も使えなかつた象やライオンや熊などに寄生する人間にも接続しない大型化したシヨクシユ目とそれらが作り出すシヨクシユを利用したのだ。

このような技術をどのように駆使してザウルが戦つたか、北アマゾネス朝の没落を決定づけたムルタブル郊外の戦いがわかりやすいだろう。以上そのあらましを述べよう。

● ムルタブルの戦いの関連地図

ムルタブルの戦いは、北アマゾネス朝に従属する都市国家ムルタブルのアルジャニス家に帰属する意思をみせたところから始まつたらし。それらに反発した周辺都市群はムルタブルとそれに同調する都市群に攻めよせる。窮地に陥つたムルタブルは救援をザウルに送つた。

ザウルはこの情報を同盟国である東ガンダの影響下にある領域国家に送り、攻め寄せている親北アマゾネス朝の国々を攻めさせることに抵抗する。

一方、ようやく国がまとまり続けた北アマゾネス朝は、これらの地域の影響力の低下を憂慮し、ムルタブル一帯の占領をも見込んだ兵力を送ることに決定する。その数は数万以上とザーレー伝では示している。

このように攻め込んできた北アマゾネス軍に対して、ザウル軍は適度に消耗させつつ、撤退を繰り返し、ムルタブル郊外の平原にアマゾネス軍を誘導させた。

もしかつてのアマゾネス軍ならばこれが偽装敗走であることに気づいただろう。しかしもはや持っているものが多くなつていた北アマゾネス軍は、この都市国家周辺を占領するしか勝利条件が残されてなかつた。でないとザウルの軍隊が次々と押し寄せてくるからである。そうなるともはやアマゾネス軍は徐々に後退の結果しか残されていない。このことから、おそらくザウルは情報網を駆使して北アマゾネス朝の政治的なタイミングを見計らつて、この決戦に挑んだ可能性がある。

決戦の地、ムルタブル郊外に到着したアマゾネス軍は、ところどころに散らばる丘陵におかれた砦を見て安心したかもしれない。壁が重なつたところがあるところがある以外はおかしなところがない平凡な砦である。

アマゾネス軍はアルジャニス軍の馬上弩による狙撃で挑発を受け

ながらも、砦を各個撃破すべく、立ち向かつた。

そこで異変が起きた。強い風が町からアマゾネス軍から吹き付けられると、アマゾネス軍の馬は操作を受け付けず、バラバラに砦に突進はじめた。混乱する中、慌てて制御し改めて壁に突撃したところ、次の異変が起きた。壁の隙間から自分たちの持つ触手よりながい触手が伸び、襲い掛かつた。

アマゾネス軍は落馬するもの、壁の長触手にからめとられ悲鳴を上げるもの、大混乱に陥った。その姿は一本の長い触手が、別の太い手に握られ、引き千切られてかのようであつた。

完全に戦術行動ができなくなつたタイミングで、ムルタブルの城門が開き、混乱したアマゾネス軍を討ち取りはじめる。あとは撤退しか残されてない。アマゾネス軍は素早く決断する。

自分たち以上の誇る弓かそれ以上の射程距離を誇る弩の狙撃、馬があれども敵対地の中での落ち武者狩り、そして退路にあたかも用意されたかのように攻め寄せる東ガンダ同盟軍の兵、6割近くがこの戦いでアマゾネス軍は命を落としたという。

この戦術の種明かしは現代からすれば非常に単純なものである。まず軍馬やショクシユ目に有効な触手が出すフェロモン物質を——これは既存の触手技術の延長上にある——風魔法や自然の風を通じて流すことで、アマゾネス軍馬につなげてある触手や軍馬を砦付近に誘導させる。突進しようとするれば、今まで利用されてこなかつた猛獸や大型獸につく触手を培養させた人間にはつかない長触手を使つて、兵や馬を固く絡める。それらを肉盾にしたところを弩などで狙撃するというものであつた。

基礎的な魔法による誘導と高速築城術、新しい武器と触手を使った対触手戦術の完成がなされたのである。

定住民ならでは可能になる高度な魔法兵と触手騎兵に頼らぬ弩の強化による射撃武器の改良、対触手騎馬兵の専用大型触手の使用などが、アルジャニス朝が生み出した対触手騎兵の対抗策であつた。この魔法という兵科の体系的な利用のはじまりこそがザウル文明の軍事的特徴であつた。

また一触手技術者からすれば、既存のアマゾネス文明の触手生産方法だと、触手の生産の関係上、端境期がうまれることも指摘しておきたい。触手が活性化する気象条件は結構限られている、フタスタンの触手学者ゲーンミヤ女史によると、確かに再生されたアマゾネス人の触手は乾燥域で活動するが、理想的な動きをするとなると季節が限られ、その状態のときには、触手は外的な要因で制御を失いやすいことが報告されている。この現象はわが国の触手技術でもしられ、ウデナエなど各種方言やそれがおこる条件を警句として残してある。

こうしてアマゾネス文明の必勝策である触手騎兵は、彼女たちが利用しない触手と魔法によつて敗れ去つた。散発的に襲撃をすることはできても、もはやかつてのような圧倒的優位を作ることはできなくなつたのである。またこの時、アルジヤニス朝が作つた戦術形式は対触手兵戦術の基礎となるものであり、これ以降対抗策をめぐつて、遊牧民や定住民のいたちごつこがつづくことになる。その歴史もまた興味深いが、それは参考文献を参照してほしい。ムルタブルの戦いはそのはじまりであつた。

ムルタブルの戦いの後も、北アマゾネス文明はザウル東ガンダ同盟軍との交戦はつづいたものの、戦略的優位をくつがえす方法はもはやなかつた。

南ガンダ諸国の仲介の元、タルニシュ碑文に書かれた北アマゾネスはザウル・東ガンダ同盟軍の講和に応じ、北アマゾネス文明はフタスタンの地方王権としてからうじて認められ、アルジヤニス朝に従属し、フタスタンの地にザウルの総督を置かれることになつた。

この歴史的な講和を記念して建てられたのが、タルニシュ碑文である。碑文のそばには、クルセンヌス大王とガンダ諸王の前にひざまずくアマゾネス人の王と女王が摩崖に彫られている。その滅亡の年は前538年の夏のことであつた。

この碑文はアルジヤニス朝の人々を誇らしく見下ろし、アルジヤニス帝国の繁栄をも見続けただろう。しかしリツセンドル大王によるアルジヤニス朝の滅亡後、王都アシユマツドに続く街道沿いの山にあるこの碑文は長く忘れられることになる。そして19世紀に再発見

するまでこの地を見下ろし続けた。この碑文ができてからの北アマゾネス文明もまた、アルジヤニス朝に従属したため、忘却された。だが忘却されたとしても、彼女たちはそのまますつと消えたわけではない。そこで地方王権になつたアマゾネス朝の動きとリツセンドル大王の東征による滅亡、残光とその影ともいべき周辺域への彼女たちの文明はどのような影響を及ぼしたのかを次節で説明したい。

12 アマゾネス文明の残光とその影。（1）

前節で述べたように、アルジャニス朝ザウルに従属する形で北アマゾネス朝は王朝の存続が許された。これによつて独立した政治勢力としてのアマゾネス文明はなくなつた。とはいえそれは、完全な滅亡というものではなかつた。

負けたといえども強力な騎馬軍団を持つアマゾネス文明をアルジャニス朝ザウルは先行文明として敬意をもつて迎えることが多かつた。またアルジャニス朝の期待に答える形で、アマゾネス人は、アルジャニス朝ザウルの軍事力の一端を担い、時には影響を強く与えることになつた。消えたといつても、その文化や人々はすぐになくなつたわけではなく、その後200年ほど続いたのである。

最終的には、紀元前400年の危機の波とその対応に追われ、とどめとしてリツセンドル大王の東征に抵抗することで、地方王権としてのアマゾネスは滅亡する。だが滅亡までにもアマゾネス人は各地に移住し、その文明の残影というものは伸ばした。その触手技術や制度などを各地に定着し、東西の触手技術や騎馬技術を更なる発展させていつた。その影は長く、遠くわが国まで及んでいる。

この節では地方王権としての北アマゾネスの動きとその滅亡までの流れを紹介し。そのうえで彼女たちの文化と技術が他の地域に直接的であれ、間接的であれどのような影響を与えたかを簡単に示したい。

【アマゾネス文明の残光——地方王権としてのアマゾネス朝とその崩壊まで】

アルジャニス朝は北アマゾネス朝を屈服した。しかし主力は負けたとはいえ、残存勢力は依然強大であった。そこでアルジャニス朝は妥協と名誉をある程度与えつつ、敵対勢力はつぶすなどして、勢力に巧みにとりこんだ。

その証拠として、先の節で述べたように、ザーレー教はアマゾネス

やガンダの神々を一部残し、主神アーメル＝マットの娘や親族という形で再解釈しなおした。アマゾネス文明の神々もその娘として教えられ、神話の中にも一定の地位を与えた。これはザウル域の神話が原ガンダ＝エウロス語族の神話をよく残していたからこそ、できたのだろう。

また文書にも妃として明らかにアマゾネス系の名前が書かれていること也有つたので、その位置配慮に苦心したことが明らかである。

その結果、文化的な一つの中心地としてフタスタン域はまた再興した。政治的中心は新都市サーメルに総督府がおかれたこともあつたが、ナーリーンの文化的威信はいまだ強く、そこで様々な文化的な交流と、アルジャニス朝の強力な騎馬軍団の供給地としての役割が与えられた。

また軍事的にもアルジャニス朝は対王族パイアーンの戦いにアマゾネス王国は動員した。王族パイアーンに同調する部族とアルジャニス朝に従属する部族と戦わることで、その勢力をそぎつつ、巧みに従属させたのだ。この過程で、アマゾネスの一部は再びパイアーンに属し、そこでグラムス＝レムナーと接触し、中には通婚し、グラムス本土まで行くものもあつた。

アマゾネス文明は政治的にはすこしずつ分裂しつつ、一定の文化的地位を保ちながらも各地の文明と融合しつつある時代であった、地方王権としてのアマゾネスの200年を言い表すことができよう。

しかし紀元前400年ごろになると、フタスタン地域は動乱に巻き込まれる。この時代急激な寒冷化と飢饉が発生し、それに伴う北部異民族の南下がおきたのだ。この動きはエウロスタン大陸全土のものであつたらしく、少しの時間差こそあれ、飢饉と異民族の襲来が各地の文明で記録されている。

この時代はアルジャニス朝全盛時代であり、宿敵ハップスや小スタニア半島の帝国を下した。グラムス文明の遠征こそ、その対魔法重装歩兵による新戦術に負けたとはいえその勢力は絶大であつた。しかし各地域の異民族の同時侵入には対応するには、偉大なこの帝国をしても限界があつた。さらに広大な領土を維持すべく、各軍団が散らばつ

ていたことも、この災厄に対応することが困難にしていた。

フタスタン域もこうした侵入に抵抗したが、ザウル人由来やアマゾネス由来の各都市は陥落、略奪されるものもあつた。

このカタストロフは原因は定かではないが、おそらくエウロスタン造山活動の一時的活発化による火山の活発化が現在としては主力の意見である。

大体このカタストロフは200～300年続き、各民族の撃退こそ成功したもの得るものはなく、その結果アルジヤニス朝に多大なダメージを与える。

さらに追い打ちをかけるように、紀元前360年ごろフタスタン域を中心とする地震が発生する。おそらくマグニチュード7.5～7.8クラスの地震がナーリン周辺で起こり、旧都ナーリン域は山体崩落に伴う地滑りによつて埋まってしまう。こうして文化的中心もアマゾネス人は失つた。もつともこの地震のおかげで、アマゾネス文明のかつての栄光とその歴史をタイムカプセルのようにしたのは皮肉なことであるが。

そしてどどめとして、この弱つた帝国を崩壊させる最大の存在が現れる。グラムス＝レムネー文明最大の軍事的天才にして征服者、ケドニウスのリッセンドル大王の東征である。

この大王の業績はここでは詳しくは述べない。このグラムス文明最大の戦術的天才は、完成された混成歩兵技術によつて圧倒した。魔法戦に持ち込もうとするアルジヤニス朝に対して、優れた金属細工と対魔法障壁、それにアーティファクト技術で身を固めた重装歩兵を圧倒した。カタストロフの混乱によつて精兵を使い果たし、アルジヤニス朝は数任せの兵で抵抗することができなかつた。また騎馬兵についても、リツセンドル大王はポリアーンと同盟、交流することで質も確保してあり、対抗できていた。なにより両者は決戦せざる得ない状況に追い込まれ、この大王は戦略的に決め、場所も時期決定を完璧に行つたのである。

そしてフタスタン域について述べるなら、決戦で敗北し、逃走した王族をアルジヤニス朝のフタスタンの総督はかくまつた。このよう

な行動のみせしめとして、ザウル諸都市とそれに連なるアマゾネス系の都市に対して、その部将を使わしフタスタンの諸都市を破壊、あらたにグラシア人が作つた都市に移住させ、そして優れた技術者であつたアマゾネス人をグラシア本土に送つたという記録が、東征記には残されている。

こうして、アマゾネス文明は各種災厄にまみえたうえで、その東征によつて文化的にも消えていき、幻の文明となつたのである。

【アマゾネス文明の落とした影——アマゾネス文明の各地域へ伝播されたもの】

地方王権として続いたアマゾネス文明も、寒冷化による民族移動とリツセンドル大王の東征によつて、フタスタンからも姿を消すことになつた。

だがアマゾネス文明が作り出した文明的意義は完全に失われるわけではなかつた。無論中心域であつたフタスタン域での勢力が衰え、なくなつたのは事実である。それは後代になされた考古学的発見からも後付けされる、

とはいゝ、彼女たちの文明は遊牧民族ならではダイナミズムでその技術を各地に伝えたのである。この技術は多様な地域に溶け込むことでさらなる触手技術的発展をとげた。まさしく彼女たちとその文明は、古代世界に触手技術の派生を作り出すことになつた。

そして地域や歴史的条件がそろえば、後代になつても、かつてのアマゾネス文明のような女性戦闘技術は現れ、各地で活躍することもあつたのである

無論各地に散らばつた彼女たちの運命はどうなつたかはまだ完全に明らかになつていいがたい。その中で確実に彼女たちが影響を与えたものを、ガンダ、アマゾネス文明西方、アマゾネス文明北方と東方への影響を紹介したい。

彼女たちの駆け抜けた音は、各種後継者、対抗者にひきつがれ、東西南北に響いてゐるのである。

○ ガンダ域への影響

● アマゾネス文化のガンダ経由の移動地図

アマゾネス文明最大の影響を受けたのはやはりガンダ域であろう。ガンダ北西部、南部にいう及ばず、北東部にもこの影響を与えた。まず政治的影響という点では、ガンダ域の特徴である北東、北西、南部という枠組みがアマゾネス文明後では確立することになる。これはアマゾネス文明がガンダから撤退した後でも続き、これ三大地域の代表が他の二地域と戦くというフォーマットを作り出した。この形式はアマゾネス文明の南部域の植民とその領域国家化という動きがなければ、仮にこの枠組みができたとしても遅れることになつただろう。アマゾネス文明は確実にガンダ文明の領域を増やすことに成功したのだつた。

また前期ガンダ文明を作り出した社会的構造を破壊したことで、社会的流動性をさらに加速させ、既存の身分制階級制は崩壊し、アマゾネス人も含むあらたな中間層を作り出し、新たな宗教や文化を作り出した。その文化の説明はあとに譲る。またこの動きは敵対する北東ガンダ諸国も巻き込み、東南スタンニアにさらなるガンダ文明の交流発展を加速させた。その最終形態がサミダリーアー賢王の大同盟であり、北部ガンダの文明的、文化的結束ももたらした。

ガンダ圏だけでなく、アマゾネス文明はガンダ周辺民族の生活圏の拡大をもたらした。それはさらなる歴史的プレイヤーを増やすことを意味する。アマゾネス人に直接影響を与えた民族の代表としては、南ガンダのオーラ族とガンダ北部から北東部の山岳部の辺境の民族であつたヤクテイス人があげられる。

まずヤクテイス人は、その地政学的位置によつて北東部ガンダ諸国への圧力としてアマゾネス文明は期待された。アマゾネス文明最盛期になると、ヤクとヤツクルの遊牧がはじまり、この地の生産力を増すことに成功する。そのうえで寒冷地にも強い大麦やウマの誕生で

さらに強力な勢力となつた。

またこの地帯は、神苑文明とガンダ文明の境界でもあることから、重要な交易ルートをこの文明は持つことになる。そして仲介貿易による両者の文明の成果を取り入れて独自の文明を作り出すことになる。そのはじまりがアマゾネス文明との接触であった。後代にはヤクテイスの遊牧民帝国は、両文明の首都まで押し寄せたり、逆にガンダ文明のでは非主流となる後期普渡教の護を行う役割になるが、それは他の書物に譲りたい。

ただヤクテイス土着の宗教であるパーラ教の創世神話には、天帝の娘サリフやアーンミはそれぞれ知恵の神武の神として、地上に馬と生き紐をもたらすものとして現れている。そしてヤクテイス人の先祖であるヤディゴと結婚することでこの地に人が満ちたと伝えられている。またサリフの娘は天帝に交渉して、人々にヤクとヤツクルと生き紐を与えていた。この神話の陰にアマゾネス人の姿を見ることは可能である。

この神々は後期普渡教と習合して、薬王如来の妃としての砂玲天と羅索阿未弥明王という騎馬多羅索男女両面の明王像が作られ、現代でもヤクテイスから神苑、そして大三島でも信仰されているのである。次にアマゾネス人に多大な影響を受けたのはオーケ族であった。彼らはアマゾネス人の触手技術などを吸収、発展させた点でも重要である。東南スタニアの多島海域がルーツであるこの種族は、生粹の海洋民族である。彼らは優れた造船技術と海洋に関する知識を持ち、紀元前700年ごろには、ガンダ南部までその活動範囲を伸ばしていた。そこで南下したアマゾネス人と接触した。アマゾネス人は北東部ガンダに対する傭兵として彼らを雇い、また彼女たちが手に入れられない大ガンダ域の産物を彼らから手に入れた。

そしてオーケ族は彼女たちから触手技術と魔紋術を手に入れることになつた。当時から蟹手型帆カヌーで航海していた彼らは、補助動力として小型イルカに牽引させる技術を持つていた。彼女たちの触手技術はイルカの騎乗を可能にした。そこでカイギュウやアシカの仲間であるクティーカなどを回遊しながら養殖する海上遊牧民とい

うライフスタイルをこの地で発展させた。

また北東部ガンダとも接触していた彼らは、古典的触手技術も手に入れた。彼らは二つの先進触手技術と魔紋術を発展させ、海洋種ショクシユの利用を多岐にわたって開発することになる。

その過程で、大ガンダ域から神苑南部、そして太平洋諸島へと勢力を伸ばす。最終的には太平洋域の海上交易帝国を作るまでに至った。もしアマゾネスとの接触がなければ、この地域のヒューマン種の進出は遅れることになつただろう。彼らの技術を最終的に受け取つたわが国の触手技術にとつても。

さらに間接的に彼女たちがガンダ域の文化面とくに宗教面に与えた影響を書いておきたい。

古来ガンダ域では、自由思想家が出たとはいゝ、司祭階級バルシアスによつて信仰が担われた。フタスタンでは彼らの異端である自由思想家が活躍していたが、彼女たちはそれを保護し、特に普渡教など新興教団を重視した。そのうえでサーリハの宗教団体が成立し、各教団に対してリーダーシップを取つた。この教団はかなり先進的なものであり、各教団をその組織形態と教義の一部を取り入れた。

その結果、単なる植物神の代表であつたサレイシアは、アマゾネス人の信仰形態によつて戦う大いなる知恵の神へと変貌し、北西ガンダと南ガンダ域一体、後代には北東部ガンダにつたわり、ガンダ一体に広まることになる。

新しいサレイシア信仰の詳しい内容は地域ごとにも変わるので、ここでは詳しく述べない。ただシスター・フッド、ボイ・イフッドの団体を作ることで、既存の氏族の神々とは別の、氏族感を超えた連帯と、それまでにない女性を保護する専門の宗教の誕生に至つた。

また政治的思惑はあつたとはいゝ、アマゾネス人は口伝などを積極的に記録し公開、教団を通じて既存の階級以外にも教えた。

このことでガンダの伝統的社會と組織構造はアメーバ状の組織された社會構造がとりまく形へと変換することになり、より柔軟で流動性の高い社會へと変貌した。これはより一層の自由思想をガンダ域へともたらされ、その元より多神教が強いこの地にさらなる思想と文

化を発展させることになった。

とくに女神サレイ信仰は南部ガンダに土着し、現在でも強い信仰として集めることになる。彼女たちの教団は女性が不当な目にあがると立ち上がり、近代ガンダの独立運動、被差別民虐待があると、武力闘争も辞さぬ形で活動しているのである。

現在では有名な活動家兼信仰者は元女盗賊からサレイ信仰に帰依し、最終的に国會議員になつたプラヌ＝サレイイ＝レヴィンだろうか。紀元前から続く彼女たちの信仰は今も生きている。

12 アマゾネス文明の残光とその影。（2）

- フタスタン域西部への影響
- エウロス、フタスタン地図

一方西方へ移住したアマゾネス人はどうであつたろうか。このルートで移住したものはおおよそ二つの流れに整理することができる。パイアーン人に付き従つたアマゾネス人とフタスタンのグラシア人と道を同じくしたものである。これらの流れを順に説明しよう。もともとアマゾネス人はパイアーン人を祖として、その文明に従属していたことは先述した通りである。王族パイアーンから独立して、アマゾネス文明は成立したが、当然ながら敵対することはあつたとしても、完全に交流が途絶えることはなく交易などは続いた。

そのルートを通じてアマゾネス人の交易商人は静黒海域へと交易し、グラムス人やパイアーン人の都市などに雑居していた。その地区で、グラムス人とパイアーン人はアマゾネス人の触手苗など各種交易品を交換し、アマゾネス人は食料や工芸品を中心に受け取っていたのである。この交易の物的証拠としてグラムス人のアンフォラがナーリーン遺跡から発掘されていることから明白である。中にはグラムスまで通婚したアマゾネス人の記録も残つていてことから、比較的平和な民族融合したのであろう。

平和な時代でもパイアーン人はアマゾネス人に付き従う部族の切り崩し工作は進めることが多かつた。勝てぬなら懷柔する手を考えるのが人の常である。そしてアルジヤニス朝の地方王権に北アマゾネスがなると、その動きは加速し、部族の中には元の鞘に収まるものが増えた。フタスタンの地はガンダとパイアーン人抗争からザウルとパイアーンの抗争の前線へと変わつたのである。

またその頃には、パイアーンもアルジヤニス朝やグラシアの技術を手に入れたことで、アマゾネス人の技術的優位は消えていた。そのた

めフタスタンの地は再び諸民族が相争う地になつた。この騒乱を逃れるための移住を第一次アマゾネス人西部移動と呼ばれている。

しかし前470年の危機がおこる。それはアルジャニス朝だけではなく、パイアーン人をも直撃した。そこで援軍として、グラムス本土を制圧しつつあつたケドニウス王国に援軍を求めることになり、なんとか王国を維持することに成功した。その代償として半ば従属的な同盟を結ぶことになつたが。

このケドニウス王国のパイアーン圏の進出は、アルジャニス朝を刺激し、小スタニアの反乱をきつかけに、全面対立となつた。その結果アルジャニス朝は滅び、征服されることになる。

しかしここで、思わぬことがおこつた。リッセンドル大王の東征の途中、後継者を誰にするか決めないまま病氣で急死してしまつたのだ。その獲得された広大な領土をめぐつて付き従つていた武将たちが王の後継者を自称して、互いが争うようになつた。

アマゾネス人も故地から離されたとはいえ、騎馬技術を買われて後継者国家各地に移住することになつた。

大体この戦乱ではアマゾネス人は、フタスタン域に再び帰還するためにフタスタン近辺の大小グラシア系王国に付き従う流れと、先祖を等しくするパイアーン人に合流する二つの流れができた。この流れを第二次アマゾネス人西部移動と呼ぶ。前者はアラン域とザウル域を手に入れたセレティオス朝にしたがうことが多く、後者はグラムス本土と静黙海域の一部を手に入れたネムステネス朝に従うことが多くつた。

その結果前者ではグラムス人と通婚することが増え、その文化と融合した。セレティオス朝から分離した大小王国の残した遺跡には、サレイシアと大地母神ゲイナーと融合した像が残つてゐるぐらいである。300年後、この地を旅したレムネー人の記録によればグラムスの風俗は残つてゐるとはいゝ、現地人と変わらないと書かれている。そのころにはアマゾネス人の影はこの地から亡くなつた。

一方ネムステネス朝に従つたアマゾネス人は、さらに二つの流れに分離した。まず先にグラムスに移住した同族を頼つて、グラシア本土

に移住した。そのうえでグラシア人都市の政治の影響で親都市へ移住するものもあつた。とくにラデーヌ島とダイケー島に帰属するものが多く、アマゾネス人の技術である触手投槍術や投石術は大いに畏れられた。アマゾネス人の後期触手技術が伝えられたのもこのころであつたとされる。

もう一つの流れはネムステネス朝に従つていたアマゾネス人とハイアーン人は静黒海域で通婚、民族が融合する。しかし新興のレムネー共和国にネムステネス朝が押され始めるに、再び民族移動を開始し始める。彼らが向かつたのは、静黒海域北西部にあたる未開拓の東部エウロス森林地帯であつた。

最終的にカルベテイス山脈のあたりに移住した彼らは、先住民との対立抗争を経ながらも、民族的には同化し、新たな民族が産まれることになる。スリネ人である。スリネ人のDNAを分析すると、あきらかにフタスタン人にも多いY染色体のハプログループを持つており、彼らの子孫であることがわかる。

フタスタン域とは違つた寒冷な地で育つショクシユ目をアマゾネス人の子孫は育て、発展させ、とうとうこの地でも役畜用触手などを作り上げた。

こうして森を開拓しつつ、定住半農半牧の生活をするうち、河川交易民族であつたゲルヌ人と出会い、そこで新たな、しかし決定的な触手技術を作ることに双方成功する。すなわちロー・パースライム触手養殖法である。このスライムは自身の細胞を使って、ショクシユ目の疑似器官を大量にコピーすることができ、大量に同種の疑似器官を作り出すことが可能になつた。また触手の別品種の疑似器官をこのスライムに埋め込めば、別品種のショクシユを作ることも可能になつた。

この技術は北上したレムネー人と接触により、全エウロスに伝わり、各地の触手養殖技術のメインとなつた。

とはいえた年、この技術はパンデミックに弱いことが明らかになり、エウロス本土は長育種触手技術空白地になつてしまつたのは先に述べたとおりである。だがこの寒冷な地でも育つショクシユ目の開

発は、エウロスの地にゆつくり確實に触手技術を進歩させた。科学革命によつて、世界の主流となつた。

○北東部ルートへの影響

● サベル、リヤンモー地図

アマゾネス人の中には中央サベルとの交易を通じて、マーヤ山脈を迂回する形で東部へ行くものもあつた。このルートをたどつて移住したものは、おそらくフタスタン中央部の勢力争いに負けたものが多くたどつたルートであり、一種の追放刑として使われた節がある。

それでも彼女たちは、サベル各地の狩猟民族と遊牧民族と混交しつつ、その高い触手技術などをもたらした。最終的にはこの民族の中に消えたとはい、その痕跡は各地に残つてゐる。とはいへ文献的証拠は、彼女たちが残した考古学的資料に書かれた金石文しかない。これらは17世紀から収集され、19世紀から考古学の進歩と発展から本格的に調査がなされる。その成果はサベル金石文群という分厚い本になつてゐるぐらいである。このテキストで書かれた謎の文字が、アマゾネス文字ということが判明したのは、20世紀になつてからであり、その解読がなされた。そこから彼女たちがどのように過ごしたかを推測を交えて書きたい。

サベル西部から中央サベル域までの彼女たちは墳墓を残してゐる。墓碑銘がそこには書かれている。その名前や業績を見ると、狩猟民族化しつつ定住して牧畜を営む生活をしていたようである。またこの地域から神殿跡やあきらかにアマゾネス人の神像が残されているため、文化的アイデンティティはまだ保つっていた。

しかし中央サベル域になると、円墳などの墳墓の習慣は残つてゐるもの、墓碑銘や神殿を作ることが珍しくなる。また墳墓の分布も東部から北へ向かうものがあり、このあたりでアマゾネス人は枝分かれしたとされる。

そこから東部に向かつたアマゾネス人の動きを見てみよう。彼女たちは文字を失いながらも、東に向かつた。そして東サベル入口にあるダイカン湖周辺にまでたどり着き、そこで、緊目と後世呼ばれることになる遊牧民と出会う。彼女たちの戦闘技術を吸収した緊目は勢力を拡大し、リヤンモー高原などから神苑圏へ侵入を紀元前200年ごろに開始し、神苑圏の歴史に現れる。

神苑圏の歴史の古典であれ望泉記は、神苑統一以前からたびたび緊目と呼ばれた遊牧民族の襲撃の記録を残し、緊目列伝という形で詳細に記録が残っている。

それによると彼らの襲撃は男性主体とはいえ、大規模な戦闘であれば女性も駆り出された。彼女たちは馬盟もしくは馬存と呼ばれ、緊目の各部族の本拠地を守る義務を持つことになつた。そして時には襲撃にも参加し、その中で左右将とは別個の地位を得ることになつたのである。

特に单于の近衛兵として役割を持つことが多く、その地位は低いものでなかつた。これは、リヤン域の緊目古墳からも、その豊かな副葬品と明らかにアマゾネス文化の意匠なども残つてていることから判明している。

そしてその戦闘もアマゾン文明の衣鉢を継ぐものであつたことが望泉記の緊目列伝で書かれている。

『馬盟、馬存は单于に従う婦女の兵团である。古の殖の遺風を残し、单于の妃とその部下を通じて、指揮される。右将や左将に付き従うこともあり、その軍団が駆け抜けること縦横無尽であり、多大な毒を盛つた馬の尾を巧みに使いこなし、わが国の将兵を打ち破る。その様はあたかも巧みな鉄の斧ごときだ。その噂は蠍尾を持ちし獸を従えた兵がいると、中原に噂される。』

そして前汎朝によつて神苑圏が統一されても、緊目の襲撃はやむことなく、この遊牧民を追撃すべく、北征をたびたびおこなつたが、付き従う馬存によつて撃退されることもあつた。

どうやらこの時代に再びサベル圏のキタモリスミオオショクシユ

とアマゾネス人の長育種触手を掛け合わせることで西部とは違った長育種触手改良に馬存と緊目は成功し、次の記録が残っている。

『郭王が緊日本土の集営地に襲撃をかけた。あともう少しで单于を追い詰めるところであつたが、馬存の女兵が恐るべき勢いで郭王の元に攻め寄せ、あともう少しのところで逃してしまつた。その毒矢と武術はおそるべきものである。その強弓の届くところはわが国の将兵の強い弓の及ぶものなく、その軟触術、毒縄剣を扱うところは雷鳴のごとき威力である』

こうしてエウロスタン大陸東部で、遊牧民や森林狩猟民族は触手技術を手に入れた。紀元3～6世紀には神苑部の触手技術をも組み合す、かつてのアマゾネス文明のような立ち位置になり、アマゾネス文明由来の称号などが残る。单子の女性親衛隊長称号や外戚の地位を示す馬存という称号は8世紀まで続いた。

また望泉記由来である蠍女、もしくは葛女は遊牧民の中で地位ある女性を意味する言葉として残つた。また蠍女の技は、ほぼ各遊牧民で医療を意味することばとなつてゐる。

この動きは最終的にリヤンモー帝国によるエウロスタンのほとんどを征服する大帝国によつて、スタニア東部の触手技術の世界拡散という形で絶頂をとげるが、それは別の参考資料を参照してほしい。ただその技術は北方トナカイ遊牧民を通じて、わが国にももたらされ、多大な影響を与えた。カヌン族の漁業、マタギの各種ショクシユ技能として、山岳森林地域の複雑な樹上移動、スライム種を利用した擬態、デコイの活用として伝達される。

さて東部のかつての遊牧帝国の再現を起こした彼女たちの一派と違つて、サベル北部に移住した彼女たちの子孫はどうであつたといえば、東部移動の同族と違つて対称的なライフスタイルを営むことになる。

北部サベルに向かうと、北サベル最大の内海ハービエン海につくことになる。彼女たちはヒューマンやエルフの半漁半猟民族と同化す

ることになった。

この内海は寒冷であるが、海流とタイガから流れ出る富栄養の水を求める魚が集う良質の漁場である。またその魚を狙うクラーケン、シャチなど海洋や陸上の大型獣が集う。豊饒と危険が隣り合わせの地である。その中で有能な狩人であり特殊技術を持つアマゾネス人は歓迎されたらしい。

この地での触手技術は彼女たちが来るまでは、原始的触手技術——すなわち犬などに毒液付与器官や寒冷地対応した器官など——がメインであった。だが彼女たちはこの地でも触手技術を応用して、新たなライフスタイルを作り上げる。この地に住まう海洋大型スライムを飼いならし、触手で制御する生きたウェットスーツを作り上げたのだ。この技術が成立したのは遅く、おそらく紀元2世紀ごろである。

この服の誕生は北サベル一帯の産業を変えた。それまでの半獵半漁のライフスタイルから、厳しい冬季でも海洋活動が短時間ながらも、革製のポンベや服の中に空気をため、海中活動が可能になつたのである。極寒の海女と呼ぶべき彼女たちは、氷と網で囲んだいけずに魚を育てることに成功した。またトナカイ遊牧民にも専用の触手を作り出し、この北の地の富を確実に増やしたのである。

紀元8世紀になると、東方から来た遊牧民リエルと接触し、交易も活発化する。より一層の繁栄を作ることになる。しかしこの文化圏も、その後のリヤンモー帝国負け、この技術は広くエウロスタン全域に知られることになった。

そして後代の研究になつておそらくアマゾネス人の触手技術の古形が残つている点でも重要視される。オーパ族由来の南方触手技術と比較検討された上で、どう技術を作り出したかが現在進行形で検討されている。

著者もこの地域の触手技術のフィールドワークに勤しみ、この地でアマゾネス人の活動の重要性を知つたものである。その日々の記録は是非興味深いので、読者には改めて読んでもらいたい。

以上三つの流れのアマゾネス文明の影響を述べたが、アマゾネス人

の力強い動きとそれに伴う触手技術に代表される文化の奥深さの一端がこの論説からもわかつたと思われる。

次の節では、長々と書いたこの論説のまとめとして、現代においてアマゾネス人の歴史から読み取れることと、わが祖国である大三島国の触手の歴史を交えて、考察を行いたい。

13 アマゾネス文明の世界史的意義——そして大三島域の触手技術

【アマゾネス文明の触手技術史から見た世界史的意義】

以上、彼女たちのほぼ500年に及ぶ歴史とその後世における影響をも説明した。その発見の過程を寄り道しながらも、ここまで読んだ読者もこの文明の興亡の一通りの知識を得たと思われる。その上で彼女たちの文明の世界史的意義は、触手技術とその交流に関するならば、次の通りであろう。

1. 独占されていた古典ガンダ触手技術を広め、乾燥地から後には寒冷地に適合する触手養殖技術の完成、発展と応用
2. 1を基礎とした軍事触手利用による騎馬遊牧民の戦闘技術のフォーマットの完成
3. 1によつて可能になつたジェンダーの限界があるとはいえ相対化と、現代のジェンダーとは別のありかたの提示
4. 1, 2, 3を維持するインフラと国家によつてなされた東西触手技術の伝播と融合

これらを順をおつて説明したい。

まず地理的条件によつて、ガンダ域は様々な触手技術を開発、独占していた。その生産過程の中で抑圧、奴隸狩りなどの被害に彼女たちはあつていた。その過酷な環境の中で触手技術を開発、改良をした。その完成形として、ガンダハラスマシヨクシユの改良による人馬一体型長育種触手とその培養技術を作り出した。

無論ガンダ域の触手技術は彼女たちがいなくても、やがて流出しただろう。神苑圏の絹のように。しかし彼女たちが作った触手の品種はより広い範囲で適合し、彼女たちの広い行動範囲と各地への移住によってもたらされた。この普遍的な触手がなければ、各地にガンダ由来の技術などが來ても発展させることが遅れ、根付きにくかつただろう。

また彼女たちは各種役畜を開発し、そのうえでこの技術をもたらし

た。これは牧畜業にとつて、大きなターニングポイントの一つである。これに匹敵するのは、農業面では神苑園中世宗の千剣米の誕生や、エウロスの近代農法ぐらいなものだろうか。

しかも彼女たちは優れた語学力で、各地の言語で翻訳し、政治的な意図こそあれ、ガンダ域の独占された知識を公開した。これらを分類、編集したのが彼女たちだつたのだ。

実際、古写本や口碑などにはおそらく彼女たちの文献由来のものが、ガンダとヤクテイス、ザウルなどで見受けられる。

このことに気づいて、採集と再分類、再編集したのが、サラやトーニヤの先駆的研究やその後続の学者の研究である。しかしナーリーン遺跡の書類からわかつたのは、アマゾネス人の技術は、想像以上であり、その可能性を広げたことが分かった。

特に生殖器の回復技術などは高度であり、ともすれば不安定な遊牧民に生産的安定性をもたらした。その派生技術も含めると現代でも恩恵を受けているものは少ない。

また技術とそれを維持するインフラも整備したうえで広めたことも画期的であり、この恩恵を与えるシステムがなければ、征服した広い地域を維持することができなかつただろう。その影はガンダ域に確実に影を落とし、200年の征服と支配を可能にしたのだ。

とはいゝ、無論飴だけで支配が可能になるほど、古代の世界情勢は甘くはないのは事実である。それに対抗するべく鞭の技術を彼女たちは持つていた。それが、長育種触手による騎馬技術の改良、相対的に非力な女性を強力な騎兵にする射撃補助触手とそれに伴う弓技術の改良である。これも歴史上重要なターニングポイントである。

バイアーン流の騎馬技術を改良と訓練期間を短縮、女性でも強力な射撃が可能になつた弓やその他の武術は、それだけで軍事的脅威である。

この技術による射撃は、彼女たちの文明の同時代には対抗できるものがほほいなかつた。特に戦車技術にガンダ諸国家に対しても圧倒的威力を發揮したのだ。

彼女たちの作り出した触手技術を様々に応用した武器と戦術は、古

典的遊牧帝国の一つの完成形である。その後、各地でバリエーションを後世の各遊牧民族や国家によつて作りしていく。

むろん生きている鞭というべき触手は様々な生産限界がある故、次第に後発の対抗技術に押されるが、その基本形とその応用は遊牧民のそれとは別に連綿と今に続いている。

先に述べた、飴と鞭を持った彼女たちの文明は、歴史的にも珍しい女権の帝国というものを作り出した。触手技術の生産の主導権を持つたことと、女性にも参加可能な軍事力増加、さらに生殖技術の進歩によつて、ジエンダーブの相対化が進んだのだ。とくに牧畜技術由来の生殖技術の応用は遊牧民には必需の技術で、それを加速させた。

もともとはこれらを可能にする技術は、遊牧民の去勢した役畜でも生殖を復活さすための、彼らの生死に関わる技術である。

しかしアマゾネス文明人は、これらをさらに進歩させ、積極的な使用方法と性的なものを活用するために人間にも応用、活用し始めた。

このような活用がなされたのは、大規模女権社会という中で性秩序が不安定だったという事情もある。その中で帝国を結果としてアマゾネス人は作り上げてしまつた。それ以前ならば性犯罪とかを取り締まるためには部族社会の慣習法ですんだが、帝国時代になると限界があつた。快樂の与える技術とそれに伴う混乱を防ぎ、新しい性的秩序と倫理を作り出すために、これらの技術が刑罰面で使われ発展させた。

その結果、古代としてはより現代に近い性倫理をアマゾネス人は作り出した。その影響は古代普遍宗教の広まりとともに同時に、洗練されていった。

とはいえて原型ができたとはいえ、戦乱が続く時代はまだまだこの後も続く。基本男権社会は戦争の必然性から産まれた可能性が高い。そのため既存社会は男権社会になることのほうが歴史上多かつたのも真実である。だが彼女たちの文明は、女権社会でもその条件と時期に会えば、軍事的にも強くなおかつ、女性が主導権を握つた上で、男女同権社会が製作可能であり、それによつてジエンダーによる役割は変化し、我々のジエンダーブが絶対ではないことを教えてく

れる。

最後に各地に適合した触手技術と移動技術によつて、アマゾネス人は触手技術の第一次東西交流というものをもたらした。それは彼女たちの文明がある時点だけでなく、その滅亡後により一層進んだ。

彼女たちの帝国は、最大フタスタンからガンダ北西部、南部にまで広がっていた。この南北に広がる帝国を維持するために、宗教と Gandia 自由思想家と人文知識を活用して、最終的には普渡教やザーレー教などの普遍的イデオロギーを産む結果になつたのは先に述べた。これは帝国を維持する際には必要なことである。

この結果、各種技術もまた混交と普遍化される傾向を産んだ。特にアラン域とガンダ域の知識の混交、地方王権になつてからはザウルとガンダの知識の混交を産んだ。

その過程の副産物として、彼女たちの各種技術が各地域伝わった。媒介者としての彼女たちは、このエウロスタン大陸の文化の東西混交には必要だつたのである。

彼女たちは遊牧民ならではのフットワークの軽さで各地の産物を運び、古代の重要な海洋交易民族オーケ族とグラムス人や、他の遊牧民と接触して、第一次触手の道というものを最終的に作り上げた。この道はおそらくその前にあつたと推測される雑穀の伝来の道を、改良したものではないかといわれるが、現時点ではそれは定かではない。この移動は触手以外だけでなく、彼女たちの畜力機関を伝える道でもあり、これによりかつての辺境域は、彼女たちが開発した役畜とともに広がり、ヒューマン種の生存圏を高めた。畜力に依存し、それらを制御する以上、その影には触手技術は必要である。このことがより東西触手技術の交流を必要としたのだ。

しかしこのような優れた技術を持つていたのにもかかわらず、最終的には彼女たちの文明と帝国は崩壊する。その優位をなぜ維持できなかつたのかを説明しよう。

【アマゾネスの没落原因の分析】

とはいって、彼女たちの文明の崩壊パターンは、私たち大三島域住民からすれば、神苑圏の騎馬遊牧民帝国の崩壊に似ていることから、ことさら珍しくないかもしれない。だがこの崩壊パターンを最初になしたのがこの帝国であり、後半の遊牧民帝国とは違った原因で崩壊した原因もある。私から見れば、アマゾネス文明はその強さゆえに崩壊せざる得ない部分が見える。素人ながら見ると。それらの理由は主に3つ挙げられる。

1 インフラの逆機能化による高度な技術力の維持の困難

2 代替技術の発達

3 人口圧とそれに伴う広域支配の限界

これらが組み合わさってアマゾネス文明は崩壊したが、比較的わかりやすくするため、順に説明していこう。

インフラの逆機能化と高度な技術の困難とともに、その技術が発展するときにはある種のインフラが必要されるが、発達するとそのインフラが桎梏になる場合が、特に前近代では起こりやすい点にある。そうなると高度な技術の発展が阻害される。近代官僚制でもこの現象は起こるが、前近代の技術は社会的文脈にかなり依存しているため、より一層おこりやすかつた。

彼女たちはガンダの専門家——神官階級など——から分離して、普遍的な触手技術を開発した。そして安定した触手生産をなすために、サーリハの教団や自由ガンダ思想家の教団などを取り込んで生産を開始した。その際に注意深く、より広く支持を得られるように運営した。各種インフラの整備、儀礼に伴う安全な触手養殖法、女性や異邦人も参加可能な教義と教団などがそれである。

差別されていたそれらに権威と権力を与えることで、触手の大量生産と改良を行う基盤を作り上げた。

しかし一度これらのインフラが作り上げられてしまい、安定した制度になるとなかなか新しい技術が入りにくくなってしまうのだ。

その一例としては実際彼女たちの神はかなり後にならなければ、北東ガンダで根付かなかつた。それ以外の強い制度が定着していると、根付くには時間がかかるてしまう。ガンダ南部などの彼女たちの技

術とインフラが根付いたのは、先行者がないなかのことと、彼女たちの軍事力だけでなく、かなり似た風土と宗教と文化を持っていたことも大きい。

後代のガンダ魔術やザウル魔術が発展してきたとしても、これらを融合させようという試みは困難にさらされることになる。また融合したとしても、その社会的文脈にゆがめられるのだ。

たしかにアマゾネス文明人は、人間の魔術回路を把握していましたし、神経もつかんでいた。だが触手で体力を強めることはしても、魔力による身体を強めることはしなかった。魔法を使うにしても、触手の力を強めるように発達していったのである。この方式は現代の魔法技術から見れば、魔力やアーティファクト技術的にも、また魔術編成からしても非効率である。だがこの時点では魔術に触手技術が従属していたのではなく、触手技術に魔術が従属していた。だからその文脈の中で魔術を使わざる得なかつた。

実際彼女たちの記録で筋力をどのように強めたかを知ると、精緻ではあれ触手を大量につけてそのうえで魔術で制御したのが、判明している。このようなやり方では他に魔術を展開することは難しいだろう。このように、使い手によつて効率のよい魔術の使い方は、一度触手技術とは別種のものとして分離発展させなければならない。

いくら人間より強い力を持つものとして乗用車があり、それらに後付けで強力な機能をつけようとしても限界がある。乗用車の設計で近似するものを作れても、トラックや工事車両になることはできない。だが作り上げた既存のインフラは自動車用に特化し、分解できないう状態になつてている。

ちなみに魔術が魔術として分離して扱つたのがアルジャニス朝からである。このように高度な技術の発展は社会的文脈によつてかなり歪められてしまうのだ。その社会的文脈が強力であればあるほど、技術発展の上で歪みが大きくなる傾向は否めない。

ちなみに学問の進歩、新しい視点や発見を元に、今ある学問体系を解体、再編成することでより普遍性の強いものを作る一連の作業のことを指す。

このようにして社会的文脈で高いコストを払つて高度な技術が維持される状態になると、より簡素で使いやすく発展しやすい対応した代替技術が現れ、使わることになる。

触手技術に関して言えば、馬具や武器の改良、対触手技術用の触手がそれになる。

触手技術では本来神経質な馬や役畜を安定して騎乗したり、制御するためには使われた。これらの技術は今でも使われているが、アマゾネス文明ほど触手に依存せず、メインでない。触手を使ってかつてのアマゾネス人のように馬具のほとんどを代替するのは可能だ。しかしいくら纖細な馬術が可能だとしても、触手は生き物である以上生産に端境期が存在する。ショクシユ目自体の生体リズムに生産が支配されるのだ。馬具を触手だけにするとこれらを定期的変更する必要がうまれ、その最終コストは馬具よりもはるかに高い。だから現在では馬具と触手の組み合わせがメインになつてている。

無論アマゾネス人は馬具も改良したのである。だがそれ以上に触手技術を発展させ、疑似神経回路や魔術回路を駆使した現代でも通じる高度な戦闘用触手服を作り出した。反面そのような高度な触手服を作るよりも、馬具を改良した他人数の軍隊の方が強いのが実情である。さらにこの戦闘服では魔術を使いにくく、応用が乏しい。だから後世には伝わらずすたれた。ある高い技術は別の文脈で発達の余地のある高い技術を受け入れにくくするところがある。この問題は現代でも発生するが、アマゾネス人も免れなかつたのだ。

無論アマゾネス人の一部は、この問題に手をこまねいたわけではない。サレウ・マンジエーの改革はまさにこれらの問題に対応するために行われたのだ。それに付随した比較的なマイナーな神性を優遇することは、既存の社会的文脈と新たな視点と技術開発のためには必須であった。そのうえザーレーのような留学生でありつつ、高度な魔術技術を持つものを取り込もうとしたのである。

だが政治的安定性にかけたのと、既存層の既得権益を脅かしたために、排斥される結果となつた。その結果、この改革の果実はアルジヤニス朝の成立という形で実を結ぶという、アマゾネス文明にとつて皮

肉なことになった。

また高度な技術を遊牧民帝国支配者層が持っていたとしても、一朝一夕で解決できない根本的問題として、人口差とそれに伴う人口圧の問題が横たわっている。この問題はアマゾネス文明だけでなく、後代広く各地で成立した遊牧民帝国に付きまとった問題である。

この問題は特に神苑圏の歴史を紐解けば、より深く理解できるが改めて説明しよう。

遊牧はヒューマン、アルタ種の生存域を広めたの事実ではある。しかしその生存を可能にする必要面積は、農業地帯よりも多くなる。これが広さのわりに遊牧民帝国の人口は農業地帯の国々よりも少なくなる傾向を産む。軍事力が強くても、人口差は覆りにくい。

軍事的にも生産面でも遊牧民帝国がこの問題に対処するには、触手技術を含む各種技術を開発したり、農業可能圏を開発、征服したり、交易ルートを確保するための広域支配を行つたりする。これらの条件が組み合わさると大帝国が誕生する。アマゾネス人やリヤンモー帝国のように、この文明が高い技術力を持つていると、その方向性と動きを加速、成立する。

しかし人口が多い地域を政治的安定とともに支配するには、地元民の協力がなければ成立しない。

そのため、遊牧民側は各種特権や各種技術など遊牧民側は与えざるえなくなるのだ。アマゾネス人の場合なら、各種インフラの利用と役畜類、触手増産、そして畜力、水力機関がそれにあたる。

はじめは既存の支配域、アマゾネス人ならフタスタンで生産することになり、人口が少ない以上生産が頭打ちになつてくる。そうなると、他の地域でも生産が開始させられる。政治的安定をもたらすために。

この生産傾向が続くと、人口の多い地域でより多く触手や各技術が使われることになる。かくして時間がたつにつれ、技術浸透がなされ、両者の技術的水準は均衡する。そうなると単純に人口が多い方が有利になつていく。改良も維持条件も段違いに楽だからだ。

こうして人口圧に負けた地域から遊牧民帝国は破綻していく。ア

マゾネス人なら南部から、属国に近いザウル圏の圧力によつて。さうに先に述べた条件も重なれば崩壊が早くなることも言うまでもない。

このような問題に困まれて、アマゾネス人の文明は滅んだのである。アマゾネス人の発達と崩壊から何が読み取れるか。

それは次の節でわが国大三島国の触手技術の簡単な歴史紹介との比較を通じて、この長文を終わらせたい。

【大三島国の歴史から見た触手技術】

● 第三島域の触手技術伝播地図

このような事例一つとして、わが祖国でもある大三島国の歴史における触手技術を見てみよう。

大三島列島は名の通り、大きな三つの島を列島を中心に、大小多くの島々からなる地域の総称である。大三島と呼ばれるものの、近代期の侵略植民を通じて編入された大カムイ島、南西小列島などを含んでいる。大三島国はそれらをまとめた立憲君主制国家である。

ヒューマン種やアルブ種などがこの地にたどり着いた原始時代には、原始的触手技術が確立していたらしい。この時に開発された犬用触手は多様であつた。この多様性を説明するために、人畜交配法がこの時代には確立していたのではという仮説があるが、定かではない。

しかし東スタニア歴史時代になると、この地域に移住するものが増え、独特的文化を各地で作り始める。この地に移住するルートは三つあり、カムイ島経由の北東ルート、南西諸島経由の南方ルート、そしてベチエル半島経由の西北ルートである。

南方ルートからは南部神苑圏や東南スタニア経由でオーク族などが入り、北東ルートではエルフ族が入る。そして歴史的に重要な神苑圏やベチエル半島諸国の動乱を避ける形で移住した他民族が西北

ルートから入ってきた。

触手技術的には、オーク族のガンダやアマゾネスのそれを発展させた技術を運んだ南方ルートと、神苑圏の触手技術を運んだ西北ルートがこの時代では重要である。

これらの触手技術を残した土偶や壁画、祭器は各地に残り、発掘されている。その中でも触手を扱う人の姿が現れている。

基本、大三島列島域では長く定住狩猟採取生活社会が長く続いたが、西北ルートや南部ルートで稻や芋などを作る農業や、養殖漁法、牧畜などが入ると、農業社会に突入する。

生産力を増した各地域は様々なクニを作った。そしてそれらの対立抗争吸収をするようになつた。その際、各地域の基本的な文化枠組みが作られ、ライバルのクニの技術は卑しめられる傾向があつたらしい。このことはわが国の神話や各地の伝承から推測される。

この最初の国家統一への向けての動きは、大三盆地と仙和平地を中心とした大皇家によつて統一された。大三島列島域を統一し、神苑圏の帝国の朝貢体制に入ることになった。この時代からわが国の歴史的記録がはつきりとわかり、東スタン史に組み込まれる。

大皇家は列島域の統一イデオロギーとして先進地域から普渡教を採用することになり、さらに体系的かつ大掛かりに触手技術が入つた。この時代に入った触手技術は、薬用軍事用そして畜産用の触手であり、これらの技術の独占に成功し、中央集権体制を確立するに至つた。そして各種ルートで入つた触手技術は民間の一段と劣つた技術とみなされたのである。

しかしこの体制が長く続くにつれ、民間触手技術と普渡教経由の触手技術は対立することもありながらも、普渡教と民間信仰の習合を通じて、融合根付くことになつた。この時代に発達した触手技術は、薬用触手、上流階級用のヤギヒツジ用、人間用の乳量増量触手、性交補助用の触手、儀礼用の装飾や芳香触手、そして各種戦闘、魔術用触手である。

この時代にいわゆるわが国の古典的触手技術体系が誕生、完成する。

やがて中央集権体制が数百年へて崩れると、各地の軍人貴族、武士が自立し始める。その動きはやがて中央とは別の政治的勢力の誕生と独自の秩序を作り始める。この時代から軍事技術の発展に伴つて、戦闘用触手は進化、重装騎馬弓兵をつくるための触手が誕生する。古典的技術から発展させた戦闘用触手は高度なものであり、現代でも世界各地で評価されている。

しかし13世紀になると、リヤンモー帝国が上下カムイ島やペチエル半島から襲来することで、この体制も危機に陥る。ゲリラ戦や各地の海戦などを行つて、からうじてこの大帝国の圧力を撃退したが、その後の体制の混乱は長く続いた。

触手技術的にはカムイ島にコンパウンドボウや北方系触手技術が伝わり、トナカイ遊牧民となつたカムイ島各原住民による遊牧民部族連合が成立する。これらの国々は混乱した大三島地域を襲撃し、さらなる混乱を起こすことになった。

間欠的な平和な時期こそあれ、近世まで戦乱が各地でおこり、カムイ島や南西域の海賊の襲撃もあつたため、中世後半は内乱期に入る。この時代から軍事貴族の戦闘技術に対抗するような技術が確立、触手技術も軍事だけでなく生産用にも様々に発達する。皮肉なことだが、この時代こそが民間触手技術黄金時代ともいえよう。

17世紀になると、新興武士層である徳堂家によつて大三島地域は統一される。大皇家より政治を委任されたという形で分権領邦連合体制が確立する。19世紀前半までの長い平和時代に入る。武装解除の文脈で、触手技術はこの時代過剰殺傷力を持つものとして忌まれ、メインとなることは民生用を含めてなかつた。その結果、一部の権威付けられたものを除いて、触手技術が卑しまれたのもこの時代である。

とはいえた民生用を中心に各地でマイナーな技術ながらも発展させ、医療用、薬用、大三島北部では乳用漁業用触手は発展していく。なかでも性交用触手の開発は魔紋術の開発に伴い大きく高度に発達する。この時代の触手開発がなければ近代触手に移行できなかつたともいわれている。

だが19世紀中盤に訪れたエウロス諸国の近代化と世界各地の再編は、この国に及ぶ。大三島諸国も旧体制から再び中央集権体制へと権を切り、大三島帝国が成立する。エウロス文明のライフスタイルも大幅に取り入れ、近代化の一環として急激な役畜利用が需要された。そして各種触手技術も近代化科学化されるに至る。各種触手技術は工業化、農業などの生産力を高めることが期待され、それを担うことになったのである。こうして触手技術は、賤民の技術から各種産業の開発に欠かせぬものとなつた。

その反面、無理に近代化した触手技術に歪みが押し寄せることになる。後発近代化国家にありがちだが、需要に供給が追い付かなくなつた。そして19世紀後半から20世紀中盤にかけての帝国主義の時代にかけて、これらの国々は人権に配慮しない無茶な触手生産を行うことになつた。その中に大三島帝国も入つたのは、先に述べた通りである。

この歪みが頂点に達した第二次世界大戦に大三島帝国は敗北、崩壊に至つて、この蛮行はやむ。それは触手技術によらない機械技術のさらなる発達によつて起こされたものであつた。

こうして再び一部を除いてわが国では、触手技術は医療や漁業などの特殊技能としてマイナーなものとなつた。近年になつて高齢化社会に伴う介護用触手の開発が期待され、それに伴う触手技術の蓄積のなさが問題になつてることを除いて。

【アマゾネス文明がわが国に問いかけるもの】

簡単にわが国の歴史的流れをみつつ、その触手技術の伝播と現在の触手技術がどのようなものであることを紹介した。

このようにアマゾネス文明とわが国は全く対照的な地理的、文化的状況にある。触手技術拡散の地とその東遷伝播各ルートの終点の地であることと。

だがこれは逆に見れば、各ルート技術を分散しているとはいえ、すべて持つてゐること、それより古い品種を持つことを意味する。こ

れを生かせば、他の文明の触手技術を融合すれば、より新しい技術を作り出すことが可能かもしれない。まさしくアマゾネス文明の発祥した状況に似ているのだ。

実際、わが国の近代化を進めたかつての大三島帝国は、触手技術だけでなく各種技術や学問を融合させることで独特の地位を得て、そのフットワークと学問の社会的しがらみの少なさからある程度の近代化を成功させた。そのことは誇るべきであろう。

だが大三島帝国は、このような技術を各種インフラの整備とともにあまり広くファイードバックすることが相対的に少なかつた。特に支配した植民地などでは。それらを可能にするほどの産業生産力を持たなかつたこともある。しかしその国家統合理念を深く思索するところなく、単純な自国民自民族中心主義に陥り勝ちであつたため、その支配域を安定したものにできず、強権を使つたものでなすことが多いつた。

その結果、より洗練された国家統合理念と技術を持つ国々との戦いで、味方するものが少ないまま行うことになつてしまつた。その結果、惨敗を喫することになり、大三島帝国は崩壊した。その点ではアマゾネス文明人にも私たちは劣つていたのだろう。

そうした反省をして、戦後様々な条件に恵まれて目覚ましい復興がなされた。だがそれが終わると、失われた30年という経済的にも文化的にも政治的にも停滞した時代に突入してしまつていて。

正直戦後からかなり立つとはいえ、自国の最近の歴史を振り返つてみると、あまり戦前と国民性はなかなか変わっていないのではないかと思えてしかたがない。特に昨今の歴史修正主義の流行を見ると、その思いをより確信する。反省に基づく新しいわが国の世界史的役割はどうあるべきかが共有されてないのである。

私自身は一触手技術者にすぎない。だがこのままだと大三島国は、その地域特性を理解し生かそうともせず、なおかつ普遍的なものの関係を考えないまま過ごすことになるだろう。そうしてアマゾネス文明後期の退廃とアマゾネス文明以前の略奪的な野蛮が併存するような時代はなりはしないかと心配でならないのだ。

自分たちの文明文化ををありのままに見ることは実は難しい。自明なことが自明として意識されないからだ。それを意識するためには各種教養や歴史を学ぶ意義がある。このような作業を通じなければ、社会や世間は改善できないだろう。

その一端として私たちとは違った文明を知るために、私は簡単で触手技術を中心しながらアマゾネス文明の盛衰を紹介した。私たちとは違つたものの歴史を見るのは、自分たちの自明なものを意識するのに最良だからだ。

彼女たちの文明は確かに歴史の波に一度忘却された。しかし彼女たちの祈り、抗い、なしたことは、決して私たちにとつて無駄になつてはいない。直接的な技術だけでなく、それを作り出した諸価値と制度のあり方も大いに参考になるところが多いのだ。

そして私たちのもすれば自明としがちなジエンダーと技術の関係を——それがいい関係であれ、不調和を起こすものであれ——問いつし、別のあり方がないのかを問い合わせてくる。その問い合わせは触手技術者だけでなく、それを消費する私たちにも語りかける。

そして筆者は思うのだ、この問い合わせを考えつつ日々のなすべきことを考えて、それを行う。時には間違えながらも。そのような営みこそ歴史に参加することなのだと。

歴史を作るのは、決して英雄とも見える人たち——サーキー サリハ、ザーレーなどの権力者や偉人たち——だけではないのだ。自分の中に触れるこの論文ともエッセイともつかぬ文章の視点も一面にすぎない。読者がそれについて何を思い、視点を修正したうえでどう行動するか考えたならば、この文章を書いた価値があるだろう。

そして著者の拙く、狭い教養を広める知見をまとめてくれると嬉しい。そしてその一貫としてできれば触手学の広さに更なる興味を持

ち、身近なものでも知つてもらうと嬉しい。
このような筆者の小さく確かな願望を書いて、この本を終わらせたい。

終わりに——ある触手技術者の個人史から

この触手技術史の中で、ひとシーンのスケッチに過ぎない論文ともレポートともつかないものを筆者が書いたのは、個人的な関心と大三島域における触手技術の歴史とその啓蒙の手助けになるかと思ったからである。

ここで少し筆者の個人史を語ることで許してもらいたい。というのも私の人生は、三島の触手技術と世界の触手技術の接触の一つの形であると思われるからである。

私、蝕野 千手郎は海鳴半島の清摩地方——旧令制国ならば清摩——に育つた。清摩は海女で有名であり、海洋触手技術の発達したところである。古くは網元の一族の末裔として私は生まれた。そのため実家には触手を使った海女が家に出入りすることもあり、触手漁の技術に日々触れ合うことが多かつた。

私自身も海女さんやその家族を通じて、手に季節性の触手を移植し、各種触手漁に親しんだものである。ウエットスーツを着こんで、モリと触手を操りながら少年時の旺盛な食欲を満たすべく、素潜り漁に勤しんだ。この時のスリルは何物にも代えがたい。

勉学と漁の二重生活が、私の少年時の行動の全てであつたといえるだろう。父母はそのような清摩地方の少年に勉学をしないことに少し腹を立てつつも、暖かく見守ってくれた。

しかし20数年前にキヨシマシヨクシユ種を襲った疫病は、一時期この愛すべき郷土の漁を困難にした。私のしなびる触手の相棒をみつつ漁に出られず、自身の無力感を過ごす日々を送つたことは今でもはつきり覚えている。漁業組合の幹部でもあつた父も夜遅くまで家に帰ることがない日々が続き、母も必死になつて義捐金集めや困窮する漁民のために買い出しに行つたり、副業を作つたり、紹介したりしていた。この不安な日々は、中学3～4年の少年のアイデンティティを揺さぶるに十分だつた。

幸い数年にしてこの疾病はおさまつた。だがその経済的損失は大きく、元の規模に戻すには数年かかりであつた。改めて他の地域から

キヨシマショクシユを分けてもらうことに四苦八苦したとは父の談である。この事件は漁好きの少年を勉学に目覚めさせ、高校受験の試験勉強しながらも各種触手技術や生物学への広範な関心を寄せることになった。父母からしてみれば、怪我の功名だつたかもしけぬが。

こうして一浪こそしたもの、無事煌都第一高等学校に何とか滑り込み、そこで寮生活を過ごすわけになった。

しかしそこで会つたのは、清摩地方の海女漁法への性的な好奇心からくる無遠慮な目と、それらの技術がある地域への差別的な目であつた。助平野郎とか、淫紋使いとか言われたり、レイプの手助けをしろとか、さんざんなものであつた。

義務教育の授業の上では、職業差別や地域の技術からくる差別との啓蒙は行われていた。だがそれだけでは不十分なものであり、差別の目は寮生の出身の地域差こそあれど無視できないものであつた。この体験が技術というものの地域性というものを自分に考えさせられることになる。もつともただの海洋触手医志望の政治的にも社会的にも未熟ななりたての青年には、その偏見の目に抵抗するのが精一杯であつたが。

このような逆風を受ける中でも、盟友宮野 智君などとも——彼は山羽地方の酪農家出身で、わが国一級の陸上ショクシユ目研究とその利用法のパイオニアである——知り合うことになった。これらの友人たちと一緒に学園祭で触手技術の啓蒙や、触手漁や触手猟の紹介などを改めてその偏見を治すように努めた。このわが国の伝統漁法もあり、猟法を楽しむサークルである触食会は、幸い校外にもメンバーをあつめた。設立から二十年たつた今でも、学内外問わず現在でも活動している。よろしかつたら参加してほしい。

また高校生活は差別だけでなかつた。優れた各恩師らの厳しくも暖かい指導の下、生物学、歴史学を通じて自分たちの進むべきものを教えてくれた。そこで触手技術の学術的基礎を学んだだけでなく、その技術の歴史的背景を知り、技術に生を捧げた人、新しい技術への偏見、差別にあらがつた人たちの生き方をも教えられ、学べた。少なくとも私にとつては、荒波はあれども幸運な学生生活であつたといえよ

う。

三島諸国はその多島海の中にある風土もあつて地域差が大きい。各島の海洋交易を通じて遠く離れた技術が伝わったかと思えば、別の地域ではまったくその技術が伝わらなつたりすることもある。それこそがわが祖国の文化的豊饒さをもたらしたが、交流が少ない地域になると、無知と偏見による差別が発生した。

またそれだけでなく、その技術の応用を恐れた為政者による扇動や偏見も含めて、複合的に差別が行われたのである。

高校時代の恩師である網川 義彦氏の著作には、中世期の情報収集から武装海獣を巧み操り、武将たちを翻弄するオーク族や海女に代表される海上生活者があり、またそれらの利害をまとめて交渉する半漁半農の民姿を、手堅い文献と豊富な民俗学的知見と考古学的知見に基づいて、再現している。

中世に悪党として活躍した海上生活者への恐れは、各地域にとつて海賊の脅威として現れ、海に住まう化外の民として表象されることが多くかった。

またその目はようやく領域国家としてまとまつた近世においても変わりはない。戦国武将化した海上勢力を利用しつつも、三島本土の政治的秩序が安定すると、その態度を変える。各地に根付くことで力を得た海上勢力のリーダーたちは自分たちには慣れぬ陸上の領地が与えられることがあつたりしたのである。

しかし差別が厄介なのは、被差別された側も別な形で別な人を差別することがある。近く近代の差別の例をあげてみよう。

わが国では、古代期には乳製品が使用されたが、その環境的要因と中世に至つてその技術は一部地域を除いて断絶するに至つた。そして伴うショクシユ技術もまた失われることになつた。中世期にはカムナ島からのユワン帝国の北襲とその撃退によつて、新しい技術がもたらせられた。その結果、三島各地域で改良があつたとはい、依然として大三島文化圏全体に根付くことはなく、酪農用触手技術はマイナーなものであり続けた。例外はスイギュウとヤギを伝統的に食用してきた、南西諸島域ぐらいか、それとは対称的なカムナ先住遊牧

民ぐらいである。

ウェスタンインパクトによつてわが国が近代化せざるえなくなると、それに伴い優れた酪農技術も導入され、そしてそれに付随して海外の触手技術も紹介された。これらの技術は士族の子弟の一部や先駆的な被差別階層の人たちが改めて学ぶことになった。開国時の海外触手技術を学んだ初期技術者は、このような人だったのである。

だが新しい酪農技術はもたらされたものの、新しい生活習慣とその技術はすぐに受け入れられるわけではない。彼らは被差別民の技術を習つたものとして敬遠されたのである。勘当されたり、実験場の土地を貸してもらえないかつたり散々だつという。

さらにその差別は、この種の技術を持つ留学生やその弟子たちに結婚相手ができないということで現れた。彼らは先駆的な技術を持ちながらも、その技術の使用者はわが国の歴史的文脈ゆえに忌み嫌われたのである。その原理的には古くからその技術の応用が本土で使われていたといえども。触手薬の開発のぬめり製薬は、開国以前から活動していたのは忘れてはならない。しかし動物の酪農用触手技術だと別物だつた。

ちなみに宮野君の祖父は、留学生仲間の被差別民であつたマタギの一家と結婚したことで家を保つたそ�である。結婚した当初、あまりにもお互いのなまりがすごくて、言葉が通じず、親たちは近くの小学校の教科書を頂いて読み、比較的中立的な語彙を学びあうことでもミニュニケーションを保つたと、ユーモラスに語つてくれたことがある。

私も正直寮で宮野君たちと出会わなければ、バタクサとエンガチヨと酪農家を差別してただろう。彼らには、寮生活で好きになつた各種乳製品やバターなど生活面での恩恵を受けていたのにも関わらず。

このような出会いを通じて、差別し差別される自身の両義性を自覚したうえで、少しずつたまに道に迷いつつも、煌衛大学医理学二科に進学した。大学での教育は高校時代の広く浅く呑気なものではなく、精緻な技術への厳しい指導とその職業的倫理を教えていただいた。こうして曲がりなりにも海洋触手技術者の一員となり、日々過ごすこと

となつた。

だが私の中にこの技術とそれを作つた人や世界への畏敬の念は忘れことはなかつた。日々の海洋触手の品種改良の仕事や技術改良をこなしながらも、教養として触手技術史の資料や論文を集め、友人たちから紹介された文献を読むことで今ある技術の社会的関係の把握に努めた。

そして北方海上触手の技術のルーツの一つとされる北部サベル地域の触手技術のフィールドワークの体験、前者とはまったく対称的な産業化された触手技術の本場であるコランドのなどを留学体験は、私のともすれば専門の中でもどろみがちな目を開かせた。

前者は触手漁業最北端の地である。その厳しい生活の中、シャーマニズムの信仰の元、身体を包む大型シヨクシユをつかって、狩猟に漁業に勤しんでいた。一見原始的でありながら、高度な触手技術を使いこなす人々の生活は触手の野生としてのありかたや、複合的生物利用の可能性を見せつけられた。

またエウロス大陸コランド地域では、女性触手技術者が一定の地位を得つつ、社会の中で過ごしていた。またこれらの技術者はその職業柄もあって、ジエンダーセクシャリティも多様であり、それらの互助団体も発達していたことも感銘を受けた。しかもその互助団体は100年以上存続しているのである。

無論そのような地位に至るまでの歴史的闘争とそのゆらぎと激しさは、歴史的に孤立しがちな国の学者の計り知れぬものだろう。だがその熱気と誇りは、確実に私の中で何らかの形として刻印された。このエッセイ書くにあたつても、フィールドワーク・留学前後に得た資料や知見がなければ書けなかつただろう。

触手技術者の地位向上とフェミニズムの波は、学問上でも政治社会的にも押し寄せつつ

あるが、いささかその歴史的文脈やその流れを把握することが軽視されやすい傾向がある。これもわが国の歴史的孤立になりやすい国土の制約の一つかもしれないが。

正直私は、男性の一海洋触手技術者に過ぎない。とはいえ、私の狭

い興味本位と各種限界を負つたうえでも、触手技術の流れとそのかかわりがどのようなものであるかを多少は書いて、なんらかの道しるべの一つになりはしないかと日々思つていた。

そう思つた矢先、川満書房の水木さんが、触手技術についての歴史も含めた触手技術の本を書いて下さらないかというお誘いがあり、好き勝手に私は書かせていただいた。改めてお礼を申し上げる。彼女は小さい体ながらもそれからは想像もつかぬ行動力と熱心さで、私はこのささやかな啓蒙書を発表する場を与えてくれた。

そしてこの短い歴史的スケッチを通じて、読者がショクシユを含む生態、その歴史の流れの関心を得て、改めて社会と歴史の関係に思いをはせることを、著者は願う。

幸い川満書房からは、高校時代の恩師でもある網川義彦氏の啓蒙的著作などが、文庫や新書など安価で出ている。文字に現れない民俗や考古学、各種文献から現れる三島諸島の民衆の移動のダイナミズムを感じてほしい。その中には被差別民とされながらも、確実に歴史を変えた人々たちの息づかいが感じられる。これらの著作はこのつたないエッセイを書くのに大いに役立つた。まつたく恩師の大作料理に比べれば、私のこの短文は刺身のツマ程度のものだが。

またその技術や生態の詳しい啓蒙は、宮野君の著作や私のささやかな著作でも触れてくれると幸いである。多様なショクシユ目の生態とその利用は各種産業に使われている。その名人芸ともいえる巧みな技能から機械化された中での触手利用は、その世界をのぞくだけでも楽しいものだと確信する。なにかと性的に勘違いされやすい技術ではあるが、その限界や可能性は一定の理解と訓練さえ行えば、人生をより良きものにするであろう。実際介護用の触手技術は現在最新鋭の研究課題でもあり、その技術、倫理的課題も含めてヒューマン系種族の課題の一つである。

最後に、これらの歴史を動かしながらも陰に現れ、差別されながらも懸命に生きた女性や差別された人たちへの畏敬と無念さを忘れることがないよう祈りつつ、この短いエッセイを終わらせたい。